

偉大なるヴァイオリニストたち

フリッツ・クライスラー	(1875-1962)
ヤン・クーベリック	(1880-1940)
ジャック・ティボー	(1880-1953)
ジョルジュ・エネスコ	(1881-1955)
ブロニスワフ・フォーベルマン	(1882-1947)
アルバート・サモンズ	(1886-1957)
エフレム・ジンバリスト	(1889-1985)
アドルフ・ブッシュ	(1891-1952)
ミッシェル・エルマン	(1891-1967)
ヨーゼフ・シゲティ	(1892-1973)
フランツ・フォン・ヴェチェイ	(1893-1935)
ゲオルク・クーレンカンフ	(1898-1948)
ジョセフ・フックス	(1899-1997)
トーマス・ザイデル	(1899-1962)
ヴァーシャ・フシホダ	(1900-1960)
ヤツシヤ・ハイフェッツ	(1901-1987)
ジノ・フランチェスカッティ	(1902-1991)
ナタン・ミルシテイン	(1903-1992)
エリカ・モリーニ	(1904-1995)
アルフレード・カンポーリ	(1906-1991)
ジョコンダ・デ・ヴィート	(1907-1994)
ダヴィッド・オイストラフ	(1908-1974)
シモン・ゴールドベルク	(1909-1993)
ヴォルフガング・シュナイターハン	(1915-2002)
ユージェ・メニューイン	(1916-1999)
オスカー・シュムスキー	(1917-2000)
ルッジェーロ・リッチ	(1918-)
ヘンリク・シエリング	(1918-1988)
ジネット・ヌヴェ	(1919-1949)
アイザック・スターン	(1920-1991)
アルテュール・グリユミオー	(1921-1986)
イヴリー・ギトリス	(1922-)
ヨーゼフ・ハシッド	(1923-1950)
イダ・ヘンデル	(1924-)
レオニード・コーガン	(1924-1982)
ヨハンナ・マルツイ	(1924-1979)
ユリアン・シトコヴェツキー	(1925-1958)
フランコ・グツリ	(1926-2001)
アーロン・ロザンド	(1927-)
ヨゼフ・スーク	(1929-2011)
イーゴリ・オイストラフ	(1931-)
クリスティアン・フェラス	(1933-1982)
マイケル・レービン	(1936-1972)
サルヴァトーレ・アツカルド	(1941-)
ウラディーミル・スピヴァコフ	(1944-)
ウート・ウーギ	(1944-)
イツァーク・パールマン	(1945-)
オレグ・カガン	(1946-1990)
ヴィクトル・トレチャコフ	(1946-)
ギドン・クレーメル	(1947-)



ジャン=ミシェル・モルケ 著 藤本優子 訳

偉大なる ヴァイオリニストたち

—クライスラーからクレメールへの系譜—

全50人の演奏CD-ROM付き

Fritz Kreisler Jan Kubelik Jacques
Thibaud Georges Enesco Bronislaw
Huberman Albert Sammons Efrem
Zimbalist Adolf Busch Mischa Elman
Joseph Szigeti Franz Von Vecsey
Georg Kulenkampff Joseph Fuchs
Toscha Seldel Vasa Prihoda Jascha
Heifetz Zino Francescatti
Nathan Milstein Erica Morini





左から順に、ユードイ・メニューイン、アルテュール・グリュミオー、ダヴィッド・オイストラフがそれぞれのボーイングを比べているところ。エチエンヌ・ヴァトロの所蔵写真（1960年頃）

©2002, R.Kayaert/Droits SOFAM.

序文

二十世紀の偉大な演奏家と、その先駆者たち。違いを決定づける何かがあるとすれば、それは録音の発明であろう。音を再生するという技法と、その技術の目覚ましい現代化、すなわちアーティストの演奏のごく精緻なところまで楽しませてくれるレベルへの進化によって、演奏家の芸術は世界中に広められ、実物を聴くために時と場所を限定する必要がいっさいなくなった。振り返ってみるとこれを大事件であった。すぐにラジオ放送でも演奏を中継するようになるが、録音技術が発明されたことによってヴァイオリニストに限らず、二十世紀の演奏家たちとそれ以前の奏者のあいだに一本の線が引かれた。二十世紀の演奏家はその先輩たちに比べて学識が深いのか、あるいは創意に満ちているのか。いや、そんなことはなからう。では技巧的に二十世紀のほうが優れているのか。それはありえる。楽器をややる能力の習熟という段階で、「完璧なもの」を意識し、昔に比べると遥かに要求度が高くなってきていることは事実だ。パガニーニ、ヴェータン、ヴィエニャフスキの演奏について、私たちは書き残された資料から知識を得るしかない。だが、二十世紀の演奏家であればその天才をピアノロール、円筒型レコード、次いでレコードに録音という消えないかたちにして残している。この大発明は、いつでも音源記録を聴いて、あとからそれを好きなだけ聴き直す、という娯楽を人々に提供し、音楽業界のみならず世界を一変させていく。これを境に演奏は先史から歴史へと移り、パガニーニの時代とハイフェッツの時代に線が引かれた。同様に、推測と確信という領域にも線が引かれた。

書き残された資料によって我々はコレツリ、ヴィオッティ、パガニーニの響きや演奏を想像しようとして、録音によってリアルな領域に踏みこんでいく。黎明期こそ粗末なものであった録音の技術は次第に原音に忠実なものとなり、演奏家の様式感、ルバート、ポルタメント、楽器のコントロール、音程のクオリティ、澁刺とした技巧や息づかいまでも鑑賞できるようになった。

レコーディング時代になるまで、聴き手は舞台上の演奏家を時折聴くのみで、奏者がどう演奏しているかを間近に見せてもらえないのは直弟子だけだった。演奏会となると、コンサートホールまで足を運んで席を購入しなくてはならず、それは一般に都会での社会的および文化的なエリートだけに許される特権だった。行きずりの演奏家による演奏は、たとえそれがどれほど強烈なものであっても、聴き手のなかの単なる記憶にとどまり、ふたたび同じ奏者を聴くまで場合によっては数年を待たねばならなかった。演奏家の芸術と露出のメディア的な拡散は限定され、本人の才覚と素性による部分が大きかったのだ。

レコードのおかげで、一度聴くだけではなく同じものを十回でも聴き直し、様式、ボーイング、運指を学び、ヴァイオリニストそれぞれの音を聴いてイメージを膨らまし、アタックの正確さや強弱を確かめることができるようになった。若き日のメニューインは、フリッツ・クライスラーの自作自演を何度も繰り返し聴いてから、その曲のレコーディングをしたと告白している。わずかなりともクライスラーのウィーン風の 에스プリ を、そして魅力を吸収したかったのだ、と。

こうして、望めば即座に無尽蔵な音声および映像の資料を視聴し、同じ曲の十種類もの録音を比較したり、世代ごとの技術や様式感の進化を味わったりすることが、音楽ファンでも演奏家たち自身

でも、いとも簡単にできるようになった。録音で永遠の命を得るとなると、その時点でたとえ演奏の瑞々しさや芸術性や個性を少し犠牲にしても、技術の面では非の打ちどころのないものであらねばならない。かつて、ヴァイオリンの名手は強い個性を誇り、誰の音かすぐ識別できる響き、その人ならではのヴィブラート、自分だけのスタイルといった、弾き手の魂がそのまま音楽になったような演奏をしていた。それぞれの奏者の録音が全世界に広まったことで、現在はどんなヴィルトゥオーソの演奏であれ、身近に感じ、たやすくインスピレーションを得られるようになり、あるいは、それがどのような教育の流れを汲む奏法であれ、良いところを好きなようにピックアップできるようになり、意識してであろうが無意識であろうが、さまざまな影響を集大成した千もの弾き方が可能になった。さらに、たいいていの若い演奏家にとって、キャリア発進のきっかけとして大切な役割を果たす国際コンクールにおいて、奏法そのものと同じくらい無疵の演奏が要求されるようになった。非主流派の烙印を押されるかもしれないという恐れから、思い切った個性を主張する若手がほとんどいなくなってしまうのだ。それとは別に、レコードの演奏が決定版とされ、演奏家たちがその尺度を意識せず日々の鍛錬を重ねることもいまやありえない。とはいえ、私たちの音楽の聴き方を根底から変えてしまふほどの個性に恵まれ、すみずみまで知りつくしていると思いきんでいた曲をまったく新しい雰囲気で見聞かせ、完璧だったはずの技巧の限界をさらに押し広げてしまふ、そんな才能は世代ごとに必ず出てくるはずだ。

十六世紀末から、ヴァイオリンという素晴らしい楽器は作曲家の創作意欲をかきたて、多くの場合、ヴィルトゥオーソ奏者が作曲家を兼ねていた。ルクレール、ヴィオッティ、イザイ、そういった優れ

た奏者にして作曲もする人々が楽器の可能性を広げてきた。ヴィルトゥオーソ作曲家の伝統はとぎれることなく二十世紀初頭まで続いたが、そこから先の作曲家は演奏家を兼ねることはなくなり、それでもヴァイオリンの新しい可能性を切り拓き、新しい曲をレパートリーにどんどんと加えている。もはや自分の演奏能力に足を阻まれることなく、イメージだけの力で作曲していくやり方が主流となった。こうしてバルトーク、ショスタコーヴィチ、シュニトケ、シェーンベルク他の作曲家たちは、ヴァイオリニストたちへの進化を強いたのだ。

二十世紀に世界中で活躍した偉大なヴァイオリニストは数多い。この本では、無理に全員を網羅しない、という方針を選んだ。聖なる怪物(モンスター級の大物)と、二十世紀のヴァイオリン史に功績を記したソリスト、目立って奇抜な演奏活動をおこなった奏者、数奇もしくは悲劇的な運命をたどった奏者の紹介も含めた。第一部ではまず、一八七五年生まれのフリッツ・クライスラーを登場させた。その録音は人気を呼び、世界中で広く愛された。クライスラーよりも年長のパプロ・テ・サラサーテ、ウジェーヌ・イザイ、レオポルト・アウアーといった名匠の録音も残されているが、彼らのキャリアの最後のほうのものばかりであり、絶頂期の演奏を伝えていたとは言いがたい。並べ方は「最初に舞台上立った」年代順とするのが読者にとってもわかりやすいだろう。室内楽の奏者、あるいはバロック音楽の弾き手として名をなした奏者は、項目に含めなかった。教育者、オーケストラのコンサートマスターについても同様である。だが、巻末には、クライスラーより前の世代の巨匠と、偉大な教育者の列伝を記した。彼らの存在がなければ、この本のメインテーマである五十人もその才能を存分に

発揮できなかつたはずだ。

ヴァイオリニストはその楽器と密接な関係を結ぶ。親友、共犯、狼狽、幸福の極み、謎であつたり、複雑であつたり、まさに夫婦のような関係である。人によつてはストラディヴァリ以外は人生をかける価値がないと断言し、別の人に言わせるとストラディヴァリの響きはあまりに圧倒的で、自分が好きにする余裕をまったく与えてくれない、と口にする。翳りがあつて内臓深くからの響きだからとグアルネリ・デル・ジェスを好む人もいる。登場するヴァイオリニストごとに、そのキャリアの主要な時期で使つたり所有した楽器についても言及している。

音源については、演奏者ごとにそのキャリアで大きな意味を持つ曲、もしくはその演奏を象徴するような音源を選択した。この本の付録CD・ROMで聴くことができる。

序文	4
フリッツ・クライスラー	FRTZ KREISLER (1875-1962) No. 1
クライスラー	美しきロスマリン
シューベルト	ヴァイオリンソナタイ長調 Op. 162 二重奏曲 第1楽章 No. 2
ヤン・クーベリック	JAN KUBELIK (1880-1940) Op. 6 No. 3
ウイエンヤフスキ	「モスクワの思い出」 Op. 6 No. 3
ジャック・ティボー	JACQUES THIBAUD (1880-1953) No. 4
フランク	ヴァイオリンソナタイ長調 第1楽章 No. 4
サン＝サーンス	「ファの洪水」 Op. 45 前奏曲 No. 5
ジヨルジュ・エネスコ	GEORGES ENESCO (1881-1955) No. 6
シヨーン	詩曲 Op. 25 No. 6
ブロニスワフ・フーベルマン	BRONISLAW HUBERMAN (1882-1947) No. 7
エドゥアール・ラロ	スペイン交響曲 Op. 21 第3楽章 No. 7
アルバート・サモンズ	ALBERT SAMMONS (1886-1957) No. 8
エルガー	ヴァイオリン協奏曲ハ短調 Op. 61 第3楽章 No. 8
エフレム・ジンバリスト	EFREM ZIMBALIST (1889-1985) No. 9
ブラームス	ヴァイオリンソナタ 第3番 二短調 Op. 108 第3楽章 No. 9
アドルフ・ブッシュ	ADOLF BUSCH (1891-1952) No. 10
シューマン	ヴァイオリンソナタ 第1番 イ短調 Op. 105 第2楽章 No. 10
ミッシェル・エルマン	MISCHA ELMAN (1891-1967) No. 11
チャイコフスキー	ヴァイオリン協奏曲 二長調 Op. 35 第2楽章 No. 11
アクロン	ヘブライの旋律 Op. 33 (アウアー編曲) No. 12
ヨーゼフ・シゲティ	JOSEPH SZIGETI (1892-1973) No. 13
プロコフィエフ	ヴァイオリン協奏曲 第1番 二長調 Op. 19 第1楽章 No. 13
ベルリオース	夢とカプリース Op. 8 No. 14
フランツ・フォン・ヴェチエイ	FRANZ VON VECESEY (1893-1935) No. 15
ベートーヴェン	ヴァイオリンソナタ 第3番 変ホ長調 Op. 12-3 第3楽章 No. 15
ゲオルク・クレーンカンプ	GEORG KULENKAMPFF (1898-1948) No. 16
シューマン	ヴァイオリン協奏曲 二短調 第2楽章 No. 16
ジョセフ・フックス	JOSEPH FUCHS (1899-1997) No. 17
ベートーヴェン	ヴァイオリンソナタ 第5番 へ長調 Op. 24 「春」 第1楽章 No. 17

- トーシヤ・ザイデル TOSCHA SEIDEL (1899-1962) No. 18 106
- ブラームス ハンガリー舞曲第1番ト短調(ヨナヒム編曲) No. 18 106
- ヴァーシヤ・プシホダ VASA PRIHODA (1900-1960) No. 19 112
- バガニーニ ヴァイオリンソナタ第12番ホ短調 Op. 3-6 No. 19 112
- ヤツシヤ・ハイフェッツ JASCHA HEIFETZ (1901-1987) No. 20 118
- トマス・アントニオ・ヴィターリ シヤコンヌ(レスピーギ編曲) No. 20 118
- コルンゴルト ヴァイオリン協奏曲ニ長調 Op. 35 第1楽章 No. 21 118
- ジノ・フランチェスカツティ ZINO FRANCESCATTI (1902-1991) No. 22 130
- バガニーニ ヴァイオリン協奏曲第1番ニ長調 Op. 6 第1楽章 No. 22 130
- ラヴェル ヴァイオリンソナタト長調第2楽章 No. 23 130
- ナタン・ミルシテイン NATHAN MILSTEIN (1903-1992) No. 24 136
- J・S・バッハ 無伴奏ヴァイオリンのためのパルティータ 第3番ホ長調 BWV1006 第1楽章 No. 24 136
- ゴルトマルク ヴァイオリン協奏曲第1番イ短調 Op. 28 第1楽章 No. 25 136
- エリカ・モリーニ ERICA MORINI (1904-1995) No. 26 146
- ヴィエニャフスキ カプリッチョ・ワルツホ長調 Op. 7 No. 26 146
- アルフレード・カンポーリ ALFREDO CAMPOLI (1906-1991) No. 27 150
- アントニオ・バッジーニ 妖精の踊り Op. 25 No. 27 150
- ジヨコンダ・デ・ヴィート GIOCONDA DE VITO (1907-1994) No. 28 156
- ブラームス ヴァイオリンソナタ 第1番ト長調 Op. 78 第1楽章 No. 28 156
- ダヴィッド・オイストラフ DAVID OISTRAKH (1908-1974) No. 29 160
- シヨスタコーヴィチ ヴァイオリン協奏曲第1番イ短調 Op. 77 (旧99) 第1楽章 No. 29 160
- サン＝サーンス 序奏とロンド・カプリチオーソ Op. 28 No. 30 160
- シモン・ゴールドベルク SZYMON GOLDBERG (1909-1993) No. 31 170
- モーツァルト ヴァイオリンソナタ 第36番変ホ長調 No. 380 第3楽章 No. 31 170
- ヴォルフガング・シュナイダーハン WOLFGANG SCHNEIDERHAN (1915-2002) No. 32 176
- ベートーヴェン ヴァイオリンソナタ 第7番ハ短調 Op. 30-1 2 第3楽章 No. 32 176
- ユードイ・メニューィン YEHUDI MENUHIN (1916-1999) No. 33 182
- ブロッホ アボダー No. 33 182
- メンデルスゾーン ヴァイオリンソナタへ長調(一八三八年) 第2楽章 No. 34 182
- オスカール・シュムスキー OSCAR SHUMSKY (1917-2000) No. 35 194
- ジヨヴァンニ・バッティスタ・ヴィオッティ ヴァイオリン協奏曲 第22番イ短調 第3楽章 No. 35 194
- ルツジェーロ・リッチ RUGGERO RICCI (1918-) No. 36 200
- バガニーニ 24のカプリース Op. 1-13 変ロ長調 No. 36 200
- サラサーテ 序奏とタランテラ Op. 43 No. 37 200

ヘンリック・シエリング HENRYK SZERYNG (1918-1988)	206
J・S・バッハ 無伴奏ヴァイオリンのためのパルティータ第2番 二短調 BWV1004「シャコンヌ」	No. 38
ジネット・ヌヴェー GINETTE NEVEU (1919-1949)	214
ラヴェル ツィガーヌ	No. 39
アイザック・スターン ISAAC STERN (1920-1991)	218
バーンスタイン プラトンの饗宴によるセレナード 第1楽章	No. 40
J・S・バッハ ヴァイオリン協奏曲 第1番 イ短調 BWV1041 第2楽章	No. 41
アルテュール・グリユシオー ARTHUR GRUMIAUX (1921-1986)	226
モーツァルト ヴァイオリンソナタ 第40番 変ロ長調 K.454 第1楽章	No. 42
ブラームス ヴァイオリンソナタ 第2番 イ長調 Op. 100 第3楽章	No. 43
イヴリー・ギトリス IVRY GITLIS (1922-)	232
バルトーク ヴァイオリン協奏曲 第2番 第1楽章	No. 44
ヨゼフ・ハシッド JOSEF HASSID (1923-1950)	240
サラサーテ スペイン舞曲集 Op. 23 1-2 「サパテアード」	No. 45
イダ・ヘンデル IDA HENDEL (1924-)	246
ベートーヴェン ヴァイオリン協奏曲 二長調 Op. 61 第3楽章	No. 46
レオニード・コウガン LEONID KOGAN (1924-1982)	252
ハチャトゥリアン ヴァイオリン協奏曲 二短調 第2楽章	No. 47
チャイコフスキー ワルツ・スケルツォ Op. 34	No. 48
ヨハンナ・マルツィヨ JOHANNA MARTZY (1924-1979)	258
ドヴォルザーク ヴァイオリン協奏曲 イ短調 Op. 53 第1楽章	No. 49
ユリアン・シトコヴェツキー JULIAN SITKOVETSKY (1925-1958)	264
シベリウス ヴァイオリン協奏曲 二短調 Op. 47 第1楽章	No. 50
フランコ・グツリ FRANCO GULLI (1926-2001)	270
パガニーニ ヴァイオリン協奏曲 第5番 イ短調 MST78 第2楽章	No. 51
アロン・ロザンド ARON ROSAND (1927-)	276
サン＝サーンス ヴァイオリン協奏曲 第3番 Op. 61 第2楽章	No. 52
ヨゼフ・スーク JOSEF SUK (1929-2011)	280
スク ハラード 二短調 Op. 3b.	No. 53
イーゴリ・オイストラフ IGOR OJSTRAKH (1931-)	286
ヴィエニャフスキ 2つのヴァイオリンのためのエチュード・カプリース Op. 18 1-2, 5, 4	No. 54

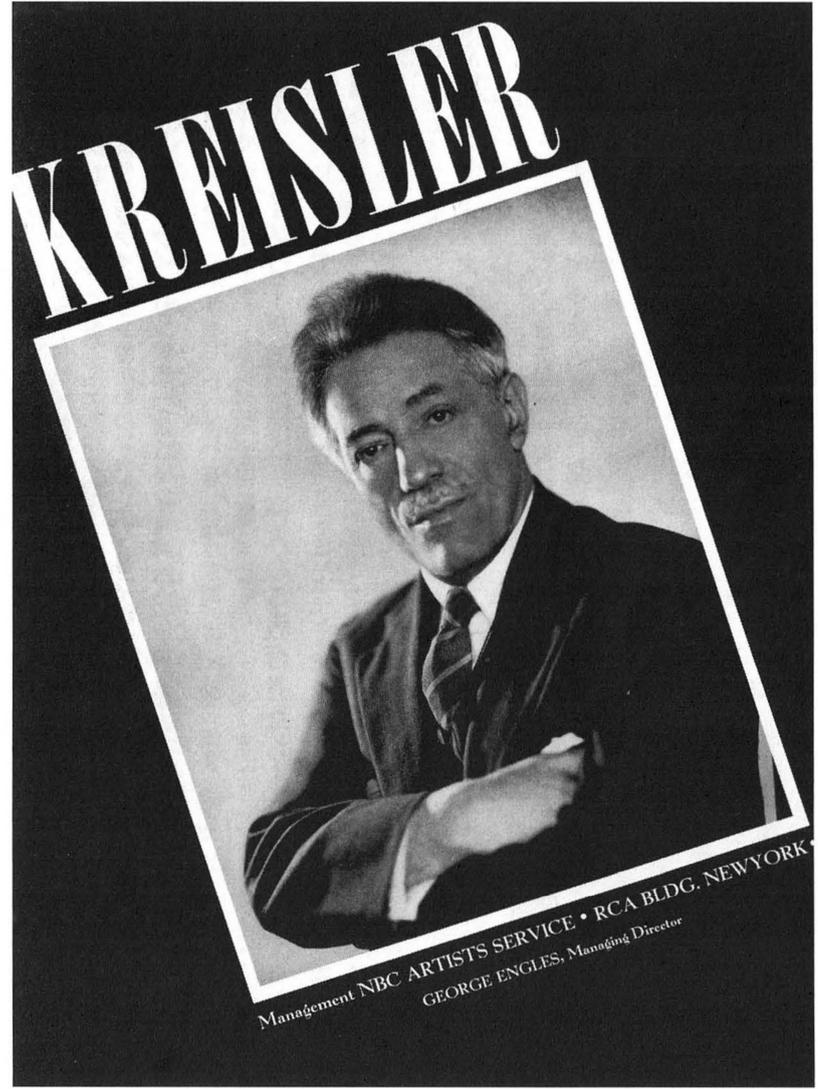
INDEX

クリスティアン・フェラス CHRISTIAN FERRAS (1933-1982)	292
ブラームス ヴァイオリン協奏曲 二長調 Op. 77 第3楽章  No. 55	
マイケル・レービン MICHAEL RABIN (1936-1972)	298
パガニーニ 24のカプリース Op. 1 1、5、24  No. 56	
サルヴァトーレ・アッカルド SALVATORE ACCARDO (1941-)	304
パガニーニ ヴァイオリン協奏曲 第2番 口短調 Op. 7 「ラ・カンパネラ」 第3楽章  No. 57	
ウラディーミル・スピヴァコフ VLADIMIR SPIVAKOV (1944-)	310
R・シュトラウス ヴァイオリンソナタ 変ホ長調 Op. 18 第2楽章  No. 58	
ウート・ウーギ UTO UGHI (1944-)	316
J・S・バッハ 無伴奏ヴァイオリンのためのソナタとパルティータ 第1番 卜短調 BWV1001 第2楽章  No. 59	
イツァーク・パールマン ITZHAK PERLMAN (1945-)	320
メンデルスゾーン ヴァイオリン協奏曲 第2番 ホ短調 Op. 64 第3楽章  No. 60	
プロコフィエフ ヴァイオリンソナタ 第1番 へ短調 Op. 80 第3楽章  No. 61	
オレグ・カガン OLEG KAGAN (1946-1990)	328
シヨスタコーヴィチ ヴァイオリンソナタ Op. 134 第2楽章  No. 62	
ヴィクトル・トレチャコフ VIKTOR TRETAKOV (1946-)	334
チャイコフスキー 懐かしい土地の思い出 Op. 42 第1楽章  No. 63	
ギドン・クレマー GIDON KREMER (1947-)	338
イザイ 無伴奏ヴァイオリンのためのソナタ 第3番 イ短調 Op. 27 「バラード」  No. 64	
モーツァルト ヴァイオリン協奏曲 第5番 イ長調 K. 219 第3楽章  No. 65	
番外編 くライスラー以前の巨匠、偉大なる教育者たち	346

● No. 1 は付属CD・ROMのトラックナンバーです。CD・ROMドライブで再生してください。CDプレイヤーでは再生できませんのでご注意ください。
レコード音源をデータ化しており、アナログ特有のノイズがあります。予めご了承ください。

Fritz Kreisler

(1875-1962)



フリッツ・クライスラー

ヴァイオリンの王者

歴史を振り返ってみて、フリッツ・クライスラーほど聴衆に愛され、同じヴァイオリン奏者たちからの支持と尊敬を勝ちとった人物はいない。クライスラーは五十年以上の長きにわたって「ヴァイオリンの王者」と呼ばれ、世界中の人々を夢中にさせた。その名は今日でもまだ魅惑と高貴の代名詞として多くの音楽ファンの心を震わせる。彼こそ、ヴァイオリンの響きと表現の革新者であった。おびただしい数の作曲と編曲を手がけ、ヴァイオリンのレパートリーを豊かにしたという功績も大きい。十九世紀に生まれたヴァイオリン奏者のなかで、「ハイフェッツ現象」によってそのキャリアを脅かされなかった唯一の演奏家でもあった。

フリードリヒ・マックス・クライスラーは一八七五年二月二日、ウィーンに生まれた。四歳で父からヴァイオリンの手ほどきを受けた。七歳にしてウィーン音楽院に入学し、ヨーゼフ・ヘルメスベルガー二世にヴァイオリンを師事、アントン・ブルックナーから和声学とピアノ演奏を学んだ。十歳でパリ音楽院のランベール・マサールのクラスに入学を許可され、二年後に優秀な成績（審査員の満場一致）で卒業すると、その後はいかなる音楽教育も受けなかった。アメリカ演奏旅行からウィーンに戻ってから、しばらくヴァイオリンとは距離を置き、あらためて高等学校に通い、医学を学び始めた。

兵役を終えてからようやく、音楽家として身を立てようと決意を固め、のちに知られることになるクライスラーならではの輝かしいテクニクを必死になつて磨いた。クライスラーの佳作として知られるベートーヴェンのヴァイオリン協奏曲のカデンツァを書いたのはこの頃だ。ウィーン宮廷劇場の採用試験を受けたが、当時のウィーン・フィルのコンサートマスターだったアルノルト・ロゼによって、初見能力の欠如を理由にクライスラー青年は不採用とされた。

栄光の始まり

一八九九年、指揮者アルトゥール・ニキシュに抜擢され、クライスラーはベルリンのフィルハーモニーホールでメンデルスゾーンのヴァイオリン協奏曲を演奏した。最終楽章が終わるや、ウジェーヌ・イザイが熱狂をあらわに立ちあがって喝采を浴びせた。栄光の始まりである。ピアノストのハロルド・パウアーとのデュオ、ヨゼフ・ホフマンおよびジャン・ジェラルディとのピアノ三重奏、珍しい取り合わせだがテノール歌手のジョン・マコーマックとのデュオなどで、世界を飛びまわった。ギャンブル好きの洒落者で、飽くことを知らぬ女好き。妻となるハリエット・リースとの出会いは一九〇二年のことであつた。ハリエットは野放図に走りかねない夫の生活を整理させ、国際的な活躍を視野に入れて全面的なバックアップをした。そのおかげで、即座に聴衆はクライスラーを至高の芸術家と見なすようになり、第一次世界大戦が始まる頃には録音の数も倍増した。その演奏の精緻な味わいは世界的な人気を獲得した。その一方でクライスラーによる多くの名曲演奏は優雅さの規範とさ

れた。エルガーのヴァイオリン協奏曲はクライスラーに献呈され、一九一〇年にロンドンで初演された。アメリカでの熱狂的な人気は、同時代の最大のライバルだったミッシェル・エルマンをしのぐほどであつた。クライスラーは大戦で演奏活動を中断してウィーンに戻り、召集を受けてロシアの前線に送られた。負傷して除隊となり、一九一四年十一月にニューヨークへ戻つた。塹壕ざんこうでの数週間の体験を書きとめ、一九一五年に出版した。オーストリア国籍ゆえに演奏活動への復帰は順調とはいかず、アメリカの大きなホールにはクライスラーの招聘を拒むところもあつた。そんな状況ながらも戦前の人気は少しづつ復活していく。その時代には時間の余裕があつたので、唯一の弦楽四重奏曲（一九一九年）を書きあげた。

アメリカでの熱狂的な人気は、同時代の最大のライバルだったミッシェル・エルマンをしのぐほどであつた。クライスラーは大戦で演奏活動を中断してウィーンに戻り、召集を受けてロシアの前線に送られた。負傷して除隊となり、一九一四年十一月にニューヨークへ戻つた。塹壕ざんこうでの数週間の体験を書きとめ、一九一五年に出版した。オーストリア国籍ゆえに演奏活動への復帰は順調とはいかず、アメリカの大きなホールにはクライスラーの招聘を拒むところもあつた。そんな状況ながらも戦前の人気は少しづつ復活していく。その時代には時間の余裕があつたので、唯一の弦楽四重奏曲（一九一九年）を書きあげた。

クライスラーは二度の大戦のあいだにセルゲイ・ラフマニノフとデュオを組み、この連携はベートーヴェン、グリーグ、シューベルトという、一九二八年の三つの録音で不朽のものとなった。二人がニューヨークで開催した演奏会にまつわる有名な逸話がある。クライスラーはパートナーとの稽古をあまりしたがらず、そのうえ暗譜での演奏を好んだが、演奏会の舞台上で暗譜が怪しくなり、ピアノを弾いているラフマニノフにそつと近づき、ひそひそ声で訊いた。「いま我々が弾いているのはどこだね？」するとラフマニノフは平然として答えた。「カーネギー・ホールだよ！」

クライスラーはナチス政権を逃れ、一九三八年にベルリンを後にしてフランスへ行き、一九三九年にアメリカへ移住した。一九四一年にトラックに轢かれたが翌年には演奏活動を再開した。一九四三年にアメリカ国籍を取得し、一九四七年に最後の公開演奏会をおこなつた。一九六二年一月二十九日、

八十七歳の誕生日まであと数日、というときニューヨークで息を引き取った。

伝統という鎖の最後の輪

クライスラーは「作曲もするヴァイオリニスト」の最後の一人だ。コレツリ、ヴィヴァルディに始まり、シユポーア、クロイツェル、パガニーニ、ヴェータン、ヴィエニャフスキ、ヨアヒム、エルンストと連なる系譜の最後尾である。作曲家としてのクライスラーは、数百におよぶオリジナル曲、トランスクリプション、編曲、ブラームスとベートーヴェンとモーツァルト協奏曲のカデンツァ、弦楽四重奏曲の一つ（一九一九年）、幾つかのドイツ歌曲、オペレッタを二つ——《アップル・プロッサムズ（一九一九年）》、もう一つの《シシー（一九三二年）》は『陽気な姫君（一九三八年）』のタイトルで映画化されて有名となった——を残した。

混じりけなしの魅力

彼が登場すると、そこには魔法のようなものが作用した。得も言われぬユーモアと抗しがたい魅力を兼ね備え、けれどもわざとらしさも仰々しさもなく、その生来の気高さに聴衆は魅了された。率直、鷹揚、余裕。そういったものがクライスラーの演奏の特長だった。洗練された音色には力が漲り、品が良いのに気取りはなく、魔法めいた魅力にあふれていた。たつぷりと、そしてスピーディに聴かせ

るヴァイブラートもクライスラーならではの表現だ。ヴァイブラートを絶え間なくかける演奏を最初に実行した有名ヴァイオリニストであり、その奏法によってクライスラーは同時代の他の奏者たちと一線を画したと言える。彼のポルタメント（二音間の移動の際に、滑らかに徐々に音程を変えながら移る技法）は、ほどよい抑制とあいまって驚くべき魅力を発揮した。同時に、クライスラーは生まれついでルバート（全体的な基本のテンポを一定に保つたまま、内部の個々の音を伸び縮みさせる方法）の名手であり、自由なテンポ感を会得しつつ、機知に富んだ音楽の流れが滞ることは決してなかった。指の下で一つ一つの音が官能をほらみ、極めた美と優しさ、生きる喜びを紡ぎだした。クライスラーは聴き手を魅了することを唯一の目的としていた。そして、そのための天賦の才を持っていた。

およそ二百の作品による彼の録音は、時が過ぎても古びることがない。クライスラーはたぐいまれな演奏家の一人であった。

ダニエル・パーカー (1720年)

著作

『塹壕での四週間～あるヴァイオリニストが見た戦争』

(Houghton Mifflin Company / 1915年 / ボストン、ニューヨーク)

CD-ROM

[No.1] クライスラー：美しきロスマリン

フランツ・ルップ(ピアノ) / 1938年2月15日録音 / Gramophone
DA1627 / EMI CDH 7 64701 2. に再収録 / (1'58)

混じりけなしのウィーンの魅力を、ヴィルトゥオーソであり作曲もするという芸術家としての伝統を受け継ぐ最後の一人の演奏で楽しめる。つねに柔軟な弓使い、そして優美なヴィブラートで自然に支えられている音ときたら、天国からまっすぐに聞こえてくるようだ。

[No.2] シューベルト：ヴァイオリンソナタ イ長調 Op.162「二重奏曲」

第1楽章

セルゲイ・ラフマニノフ(ピアノ) / 1928年12月20日録音 / ビクター
8216/8. / Biddulph LAB 001-3. に再収録 / (6'16)

セルゲイ・ラフマニノフとの伝説的なデュオによって残された録音の一つ。

使用楽器

ガアルネリ・デル・ジェス (1733年)

現在はワシントン・ライブラリー・オブ・ कांग्रेसに保管されている。

ガアルネリ・デル・ジェス (1735年)

ガアルネリ・デル・ジェス (1740年)「タイガー」

その後ベンノ・ラビノフ所有となった。

J. B. ヴィヨーム (1845年)

クライスラーはヨーゼフ・ハシッドに貸し与え、現在はキム・ヨンウク所有。

ストラディヴァリ (1728年)「グルヴィル」

ストラディヴァリ (1733年)「クライスラー」

プロニスワフ・フーベルマンとヨハンナ・マルツィの手に渡った。

ストラディヴァリ (1711年)「アール・オブ・プリムス」

現在、ロサンゼルス・フィルハーモニー管弦楽団が所有。

ストラディヴァリ (1727年)「ハート」

その後ジノ・フランチェスカッティが使用、次いでサルヴァトーレ・アツカルドが使った。

ストラディヴァリ (1732年)「バイヨ」

ピエール・バイヨとウジェーヌ・ソゼの所有となった。

ストラディヴァリ (1734年)「ロード・アマスト・オブ・ハックニー」

メイ・ハリソンとベンノ・ラビノフも演奏した。

ビエトロ・ガアルネリ (マントヴァ、1707年)

1967年にカール・アリス (ジュリアード弦楽四重奏団の第二ヴァイオリンだった) が購入した。

カルロ・ベルゴンツィ

のちにイツァーク・パールマン所有となった。

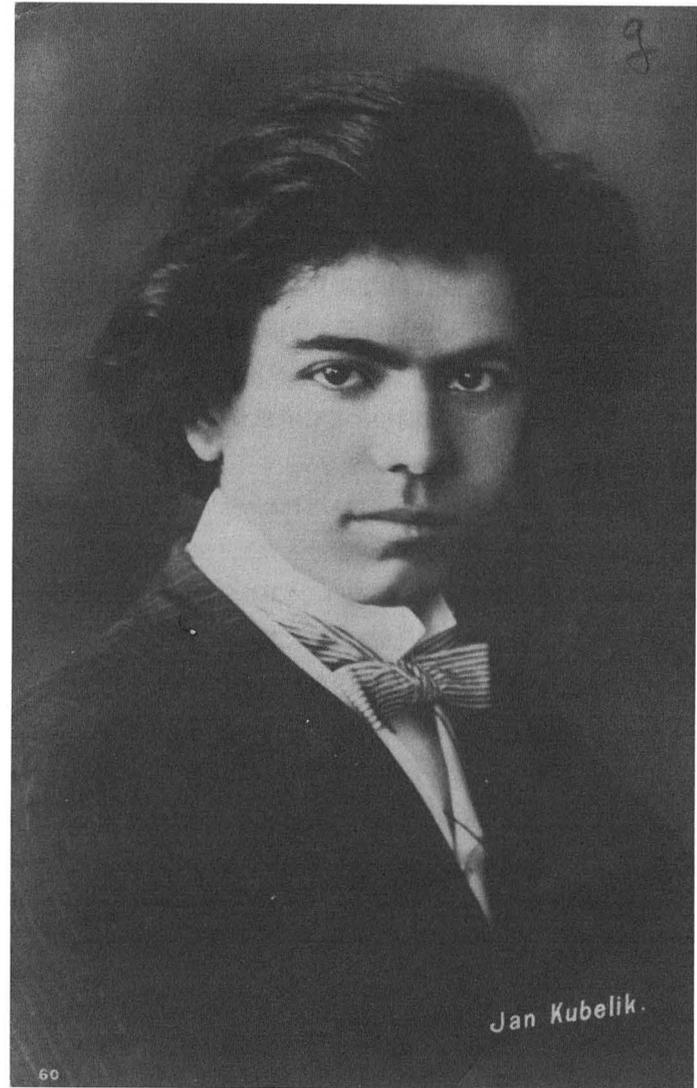
アレッサンドロ・ガリアーノ

ジョヴァンニ・グランチーノ

グラン・エ・ベルナデル

Jan Kubelik

(1880-1940)



ヤン・クーベリック

パガニーニの再来と称されたヴァイオリニスト、その華やかな技巧

ヤン・クーベリックは、近代ヴァイオリンにおける「スーパースター」の先駆けだ。エレガントな美貌、そして豊かに波打つ褐色の髪をしたヴィルトゥオーソは、批評家と美しい女を魅了するすべてを持ちあわせていた。だが、その栄光は長くは続かなかった。

チェコ出身のこのヴァイオリニストは、一八八〇年七月五日、プラハ近郊のミフレに生まれ、のちにハンガリーに帰化した。アマチュアのヴァイオリン弾きだった父親から音楽の手ほどきを受けた。その後カレル・ウエーバーとカレル・オンドジーク（フランティシエク・オンドジークの弟）に師事した。八歳でヴェータンの協奏曲を弾いてデビューを果たし、十二歳でプラハ音楽院に入学してオタカール・セヴシツクのクラスで学んだ。六年間、チェコ人であるセヴシツクのもとにとどまった。クーベリックはセヴシツクが輩出した最優秀の弟子と言われている。さらにヨゼフ・フェルステルから作曲を習った。

クーベリックは一八九八年にウィーンでデビューして注目され、それが縁で後援者ブローシエ伯爵と出会い、貴重な名器を与えられた。十年にわたる華やかな時代の幕開けだ。そのあいだにクーベ

リックは財をなした。デビューの翌年に、プラハ、ブダペスト、ザグレブ、さらにイタリアへと演奏旅行に行った。一九〇〇年にはパリとロンドンへ招聘され、ヴィクトリア女王の前で演奏し、同様にしてローマでは教皇から勲章を授けられた。一九〇一年のアメリカ演奏旅行は大成功に終わった。そして名声を欲しいままにした。華麗な技巧と聴衆を感動の渦に巻きこむ能力を目的にしたりして、人々はクーベリックをパガニーニと比べた。クーベリックは几帳面に練習する人であり、稽古を重ねることで完璧な技術を保っていた。一日の練習時間が十二時間におよぶこともあり、熱中のあまり指先から出血することさえもあったという。

第一次世界大戦以前、一世を風靡したヴァイオリニスト

一九〇二年、ロンドンのロイヤル・フィルハーモニック協会から金メダルを授与された。クーベリックの前にこの榮譽を受けたのはヨアヒムとイザイだけである。翌年、ハンガリーの女伯爵マリアンヌ・ツァーキーセルと結婚し——八人の子に恵まれた。そのうち一人は有名な指揮者ラファエル・クーベリック（一九一四—一九九六）だ——、妻と同じハンガリー国籍を取得した。シロンスクと故郷ボヘミア地方に広大な土地を購入し、鳥をコレククションした。第一次世界大戦以前、ヤン・クーベリックは、ウジエーヌ・イザイ、フリッツ・クライスラー、ミッシェル・エルマンと並び、世界的な人気を誇るヴァイオリニストの一人とされた。比類なき技巧の持ち主であり、特に左手の柔軟性には目を見張るものがあり、オクターヴ、トレモロ、フラジオレット、ピチカート奏法が見事であった。協奏曲など

の大曲もレパートリーに入っていたが、それよりはむしろ、華やかな曲を取りあげてヴィルトゥオーソの魅力を聴かせることのほうが多かった。また、クーベリックは弦楽四重奏団を創設した。そこにいたチェロのパウル・グリユマーはのちにブッシュ弦楽四重奏団の創設メンバーとなった。

束の間の栄光

残念なことに、クーベリックの栄光の時間は短かった。一九一五年以降、演奏技術が明らかな衰えを見せ、クーベリックはソリストとしての活動を減らして作曲に専念した。作曲家としては、ヴァイオリン協奏曲を六つ、他にも自分が弾いてきた楽器のための作品と編曲を多数、さらに交響曲を一つ、完成させた。一九二〇年、まだ有名だったクーベリックは、ヨーロッパとアメリカへの演奏旅行を決行し、ホールを満席にすることができたが、ハイフェッツ、エルマン、クライスラーといった奏者に比べると、その演奏がいささか時代遅れとなった感は否めなかった。一九三八年、クーベリックは彼にとつて十回目となるアメリカでのツアーをおこなない、それが最後の演奏旅行となった。一九四〇年五月八日にプラハで最後の演奏会を開催し、同じ年の十二月五日に没した。

クーベリックに献呈された曲としては、いずれもクーベリック自身が初演したドルドラのセレナーデ第一番、ヨゼフ・ボフスラフ・フェルステル（クーベリックが師事したフェルステルの息子）の協奏曲第一番が挙げられる。

ディスクグラフィののうち、主要なものは一九〇二年から一九一三年にかけて録音された。パッ

使用楽器

ストラディヴァリ (1687年)「ブロック」

ストラディヴァリ (1713年)「サンシー」

現在はイヴリー・ギトリスが所有。

ストラディヴァリ (1715年)「アラード」

デルフィン・アラードの所有楽器でもあった。

ストラディヴァリ (1715年)「エンペラー」

しばらく塩川悠子が使っていた。

GB グァダニーニ (1750年)

ガアルネリ・テル・ジェス (1735年)「タウンリー」

フランツ・フォン・ヴェチエイ、マイケル・レーピンの手にわたり、ジョン・キョンファの手元へと移った。

CD-ROM

[No.3] ヴィエニャフスキ：「モスクワの思い出」Op.6

ピアノ伴奏付／1934年録音／ELEC R 431／再収録 Pearl BVA I／
(3'36)

きわめて個性的な解釈。19世紀の伝統に則って奔放かつ創意に満ちた演奏となっている。

ジーニ、ドルドラ、フィオリツロ、フバイ、パガニーニ、サラサーテ、ヴィエニャフスキといった技巧的に華やかに聴かせる曲が多く、自作自演もかなり含まれる。
ヤン・クーベリックはヴァイオリンの貴重な名器を集めていたが、その一部は一九三二年に離散してしまった。

Jacques Thibaud

(1880-1953)

The Illustrious French Violinist
Jacques THIBAUD
TRIUMPHS
WITH SYMPHONY ORCHESTRAS

NEW YORK PHILHARMONIC-SYMPHONY
"The show was Mr. Thibaud's, the grand technician and stylist, the artist to his finger tips, and the musician who knew how to breathe a human voice into a violin."
NEW YORK WORLD-TELEGRAM

PHILADELPHIA ORCHESTRA
"An authentic and sensitive Mozart style such as one rarely hears."
PHILADELPHIA EVENING BULLETIN

CHICAGO SYMPHONY ORCHESTRA
"Thibaud captures audience—his is a patrician and a penetrating art—universal in its comprehension . . . something never to forget."
CHICAGO TRIBUNE

SAN FRANCISCO SYMPHONY ORCHESTRA
"One may go a lifetime without hearing a Mozart performance as exquisite as Thibaud's."
SAN FRANCISCO CHRONICLE

LOS ANGELES PHILHARMONIC ORCHESTRA
"Thibaud's reappearance a signal for a tremendous ovation . . . indeed a triumphant event."
LOS ANGELES TIMES

DETROIT SYMPHONY ORCHESTRA
"Both audience and orchestra rose in salute . . . For Thibaud had just provided everybody in the hall with a final lesson in how Mozart should be performed on the violin."
DETROIT NEWS

IN RECITAL - CARNEGIE HALL, N. Y.
★ "A rare experience for everyone."
NEW YORK TIMES
★ "A great artist who speaks on his instrument with the wisdom of a philosopher and the freedom of a true liberal."
NEW YORK POST
★ "The occasion was particularly memorable."
NEW YORK HERALD-TRIBUNE
★ "One of the great musicians of our time."
NEW YORK WORLD-TELEGRAM

1949-50 NOW BOOKING
NCAC NATIONAL CONCERT AND ARTISTS CORPORATION * 711 FIFTH AVE., NEW YORK 22, N. Y.
Marks Levine Baldwin Piano O. O. Bortoff

ジャック・ティボー

偉大な誘惑者

ヴァイオリンの世界に君臨したフランス人奏者だ。ティボーのパーソナリティをユーティ・メニューインが巧みに表現している。

「ジャック・ティボーは演奏のままの人物であった。稀有の才能に恵まれ、練習のしすぎで音楽を硬直化させることもなかった。そもそも固執やこだわりは、ティボーの持つて生まれた気性とは相容れないものなのだ。教養を身につけた率直な人柄で、ユーモアのセンスに長け、人生を存分に楽しむ術を心得ていた。フリッツ・クライスラーと同じく、おそらく、傲慢や野心と無縁であるように見える最後の人物であった。ティボーは最初から、みずから望んだとおりの、あるべき自分だった。彼は私の記憶と心に、美しい歌としてとどまっている」

ジャック・ティボーは誘惑そのものだった。洗練されたエレガンス、王者の魅力は、ともすれば享樂的になるくらいがあつた演奏の瑕疵さえも忘れさせた。限らない敬意をウジエーヌ・イザイに抱き、二人は師弟愛で強く結ばれ、ティボーはイザイを心の父と慕った。聴衆、ヴァイオリニストの友、弟子たちはティボーを心底から愛していた。いわゆる教育者ではなかったが、ミシエル・オークレール、

ジノ・フランチェスカッティ、ヘンリク・シェリング、ジネット・ヌヴー、イヴリー・ギトリスにちよつとした助言などを含めてレッスンをした。全員が才能を花開かせるための本質的な影響を受けたと、口をそろえてティボーへの感謝の念を表している。

イザイからの大きな影響

ジャック・ティボーは、一八八〇年九月二十七日にボルドーで生まれた。この街からはティボーの前にも、ピエール・ガヴィニエ（一七二八—一八〇〇）、ピエール・ロド（一七七四—一八三〇）といったフランス流ヴァイオリンの名手が出ている。ティボーの兄二人は音楽家で、父親はヴァイオリン教師だった。ジャック・ティボーは父と兄から最初のレッスンを受けた。八歳にして、シャルル・ド・ペリオとアンリ・ヴェータンの曲を弾いて公開演奏会でデビュー。十二歳でウジェーヌ・イザイに紹介され、ヴィエニャフスキの協奏曲第二番を弾いてみせた。その才能に惚れこんだベルギーの巨匠は、パリ音楽院で勉強を続けるようにと勧めた。そこで一八九三年、ティボーはパリ音楽院に入学してマルタン・マルシツクのクラスへ入り、三年後に一等賞を獲得して音楽院を卒業した。

その後、リュシアン・カペーのあとを引き継ぐかたちでコンセル・ルージュ楽団のコンサートマスターに就任したのち、友人であるジュール・ブシエリとの交代制でコンセル・コロヌ管弦楽団の第二ヴァイオリン首席に任命された。同じ頃、フリッツ・クライスラーやジョルジュ・エネスコと親しくなった。コンセル・コロヌ管弦楽団におけるティボーのソロ、とりわけサン＝サー

ンス「ノアの洪水」の《前奏曲》でヴァイオリン・ソロをぶつつけ本番の代役で見事に弾きこなしながら、またたくうちに人気上昇し、長く熱烈な喝采を浴びることも多くなった。一八九九年、メンデルスゾーンとブルッフの協奏曲の演奏がドイツの興業主ヘルマン・ヴォルフの興味を引き、ティボーはベルリンに招かれて演奏した。とりのコンサートホールでは大スターであるヨーゼフ・ヨアヒムが演奏することになっていた。ところが偉大なドイツの巨匠は演奏会をキャンセルし、聴衆は若きフランス人ヴァイオリニストの演奏を聴いた。結果は大勝利で、ヨアヒムを聴きに来た評論家たちは無名の若者を手放しで絶賛した。フランスへ戻ったティボーの演奏会はすべて大成功を収めた。一九〇〇年三月十五日、友であるジョルジュ・エネスコとの共演で、J・S・バッハの《二つのヴァイオリンのための協奏曲》を演奏し、その数ヶ月後、ウジェーヌ・イザイの招きによりブリュッセルでのデビューを果たした。翌年はドイツへの演奏旅行で大好評を博し、続く一九〇二年はヨーロッパ全土で約百回におよぶ演奏会をおこなった。さらに、ティボーはその年にウジェーヌ・イザイを証人として結婚式を挙げた。結婚祝いに、それまでピエール・バイヨの所有だった一七〇九年製のストラディヴァリを妻から贈られ、生涯その楽器を手放すことはなかった。一九〇三年十一月、アメリカ合衆国でのデビューを飾り、三か月のあいだ東海岸での活動を続け、演奏するたびに喝采を浴びた。アメリカの批評は、ティボーの演奏の精緻な洗練、典雅な響き、甘美なおもむきを賞賛した。フランスに凱旋したティボーは、偉大な巨匠と呼ばれるようになった。

伝説のトリオ

一九〇六年、ティボーはピアノリストのアルフレッド・コルトー、チェリストのパブロ・カザルスと出会い、伝説のトリオが誕生する。このトリオの活動は一九三三年まで続き、その後も長いあいだ並ぶものなしと言われ、歴史的な録音を幾つも残すことになる。一九〇九年、ジャック・ティボーはスペイン人のピアノリストにして作曲家であるエンリケ・グラナドスとデュオを組み、コルトーとも継続的にソナタを演奏した。一九一四年、北アメリカへのツアーをおこない、ふたたび成功を収めた。フランスへ帰国すると戦争が勃発し、参謀本部に配属された。一九一五年末に重傷を負い、数ヶ月後に除隊となった。そして戦争継続のプロパガンダのためにとアメリカ演奏旅行に送りこまれた。狙いどおりの大成功で、批評家筋と聴衆はティボーを友人であるクライスラーと比較し、惜しめない喝采で迎えた。そのまま四年間、その地にとどまってあらゆる舞台に立ち、アメリカの聴衆から崇拜された。一九二〇年代、ヨーロッパそしてアメリカでの楽旅をさらに増やし、コルトーとカザルスと一緒に室内楽での活動を継続した。

一九二一年、ジャック・ティボーはエコール・ノルマル音楽院（その二年前にコルトーが創立した）の教授に就任し、一九三四年まで教鞭を執った。一九二三年、アレクサンドル・グラスノフからレニングラード音楽院でのヴァイオリン教授職を提示された。レオポルド・アウアーの後任が決まらなくて数年前から空席となっていたのだが、ティボーはこの提案を拒んだ。一九二八年、世界一周の演奏旅行をおこない、中国と日本まで足を運んだ。一九三三年以降、人種差別法によって友であるクライ

スラー、エルマン、アルトゥール・ルービンシュタインの公開演奏を禁じたドイツでの演奏を、ティボーも拒否するようになった。一九三五年の南米ツアーを終えたのち、その翌年にはふたたび世界一周の旅に出た。第二次世界大戦の勃発によって、ティボーは国際的な活動を中断。それでもドイツでの演奏会の提案を拒み続け、ヴァイシー政権の中核と関わったアルフレッド・コルトーとはついに決裂した。一九四三年、ピアノリストのマルグリット・ロンと共に有名な国際音楽コンクール、ロン・ティボー・コンクールを創設した。終戦直後、あらためてアメリカ合衆国を訪ねたティボーは、自分の人氣にまったく陰りがなかったことを知った。そのまま活発な演奏活動を続けたが、一九五三年九月一日に極東へ向かう途中に乗っていた飛行機がバルスロネット付近で事故を起こし、ティボーは死亡した。

ティボーに献呈された曲は数多い。ヴァイオリンソナタだけでも、ジョルジュ・エネスコ（第二番）、ガブリエル・ピエルネ（作品三六）、ジェルメーヌ・タイユフェール（第一番）、ウジェーヌ・イザイ（第二番）、エンリケ・グラナドスなどがある。

レパートリーは広くなかったが、ユーティ・メニューインは「フランスの遺伝子を持つ者にふさわしく、生まれつきの自由な感覚を生かし、メトロノームの許可を求めなくてもなく、フレーズを優美に表現するコツを心得ていた」と語っている。

一九〇五年から一九五三年にかけてプレスされた音盤は相当な数にのぼる。そのうち協奏曲は、バッハ、ブラームス、モーツァルト、ショーンソンの《ヴァイオリン、ピアノと弦楽四重奏のための協

使用楽器

ストラディヴァリ (1709年)「バイヨ」

ピエール・バイヨとウジェーヌ・ソゼの所有楽器だった。飛行機事故で失われた。

ストラディヴァリ (1714年)「ベルー」

のちにダヴィッド・オイストラフ、次いでヴァレリー・オイストラフの使用楽器となった。

ストラディヴァリ (1716年)「コロツサス」

ジョヴァンニ・バッティスタ・ヴィオッティとピエール・バイヨの所有楽器だった。現在はルイー・アルベルト・ピアンキの使用楽器。

カルロ・ベルゴンツイ

ウジェーヌ・イザイの所有楽器だった。

フランソワ＝ルイ・ピック

ウジェーヌ・イザイの所有楽器だった。現在はジャン＝ピエール・ヴァレーズの使用楽器。

ジャン＝バティスト・ヴィヨーム (1730年)「モンタニャーナ」

現在はシュエ・ウェイの所有となっている。

CD-ROM

[No.4] フランク：ヴァイオリンソナタ イ長調 第1楽章

アルフレッド・コルトー (ピアノ) / 1929年5月28日録音 / グラモフォン DB1347/50 / 再収録 EMI TOCE7311-20 / (6'27)

鋭敏な感覚の響き、哀切、柔軟な流れによって作りだされる陰影。極上の魅力と個性にあふれ、演奏者の洗練と人生への愛が透けて見える。

[No.4] サン＝サーンス：「ノアの洪水」Op.45 前奏曲

ジョルジュ・ド・ロスネ (ピアノ) / 1929年5月29日録音 / グラモフォン DB 13338 / 再収録 EMI TOCE 7311-20 / (3'27)

この《前奏曲》によって初めてティボーはパリの聴衆の注目を引いた。

奏曲』と《詩曲》、ラロの《スペイン交響曲》など。ヴァイオリンソナタは、ベートーヴェン第九番、ドビュッシー、エックレス、フォーレ第一番、フランク（共演はアルフレッド・コルトー）、モーツァルト（K三七八とK五二六）など。華麗な技巧と魅力が満載の小品は、アルベニス、ダンプロジオ、フォーレ、グラナドス、マルシック、サン＝サーンス、シューベルト、ヴェーバー、ヴィターリ、ヴィエニャフスキなど。それとは別にコルトー・ティボー・カザルスのトリオは、ベートーヴェン作品を六曲、ハイドン、メンデルスゾーン、シューベルト、シューマンを一九二六年から一九二八年にかけて録音している。

Georges Enesco

(1881-1955)

Present Exclusively for Season 1938-1939

ENESCO

World Famous Composer • Conductor • Violinist



Steinway Piano
Columbia Records

Red Seal Records
with Yehudi Menuhin

Final Appearance this Season as Soloist on Ford Sunday Evening Hour, APRIL 10th

Returning to America Jan. 1, 1939

ジョルジュ・エネスコ

巨人

真の天才。ジョルジュ・エネスコ（ルーマニア語の綴りで読むとジョルジエ・エネスク）は二十世紀の巨人だ。数多くの音楽家、演奏家、作曲家に影響を与え、生まれ故郷であるルーマニアのみならず、長く暮らしたフランスに大きな影響をおよぼした。

早熟の天才

ジョルジュ・エネスコは、一八八一年八月十九日、リヴェニールナヴ（ドロホイ）に生まれた。四歳でジプシー・ヴァイオリン奏者のニコラエ・キョールからヴァイオリンの手ほどきを受け、その翌年には最初の作品を書きあげた。次いでモルドバのヤシで、ヴァイオリニストにして作曲家でもあったカウテラに師事した。カウテラ自身はヴュータンに学んだ人物だった。一八八八年、ウィーン音楽院に入学し、ヴァイオリンをヨーゼフ・グリューンとヨーゼフ・ヘルメスベルガー二世に、室内楽をヨーゼフ・ヘルメスベルガー一世、対位法と作曲と和声学をロベルト・フックスに習う。一八九二年にはヴァイオリンと和声学を優秀な成績で修了する。翌年、パリ音楽院に入学してマルタ

ン・マルシツクのヴァイオリン・クラスに入り、同じく作曲をジュール・マスネとガブリエル・フォーレに師事。一八九八年、サン・サーンス《ヴァイオリン協奏曲第三番》を弾いてヴァイオリン科を一等賞にて卒業した。並行してチェロ、オルガン、さらにピアノを重点的に学び、なかでもピアノ演奏に關しては、一生を通じて折あることに見事な腕前を披露した。

ヴァイオリニスト、作曲家、ピアニスト、指揮者としてのキャリア

エネスコはまず作曲家としてその名を知られるようになった。一八九七年、十六歳のときにパリで自分が書いた室内楽曲による演奏会を開催したのだ。翌年、エドゥアール・コロヌヌ（コロヌヌ管弦楽団）が、新進気鋭の作曲家エネスコの作品番号一である管弦楽曲《ルーマニアの詩》をパリで演奏した。パリに居を定めた若きエネスコは、街における音楽的な活動全般と強く関わるようになる。仲間にはジャック・ティボー、フリッツ・クライスラーといった人々であり、三人の友情は半世紀以上も継続することとなる。

一九〇〇年三月、エネスコはティボーとJ・S・バッハの《二つのヴァイオリンのための協奏曲》を共演したが、ヴァイオリニストとしての真のデビューは一九〇二年のベルリンでのことだった。同年、チェリストのレイ・フルニエ、ピアニストのアルフレード・カセツラとでピアノ・トリオを結成した。一九〇四年には弦楽四重奏団を結成。ほどなく、ルーマニア王妃の宮廷ヴァイオリニストに任命された。その機会にルーマニアへ帰国し、第一次世界大戦の終焉まで祖国での音楽の世界に貢献し、

ルーマニア音楽の発展に尽力した。とりわけルーマニア出身の作曲家に与える賞を創設し、さらにヤシにジョルジュ・エネスコ交響楽協会を設立したという功績は大きい。戦後すぐ、ヴァイオリニストおよび指揮者としてヨーロッパ全土への演奏旅行をおこない、一九二三年にはニューヨークでフィラデルフィア管弦楽団との共演によってデビューした。

ユーディ・メニューインの心の父

それを境に、エネスコはフランスとルーマニアで半々の暮らしをするようになる。パリではエコー・ノルマル音楽院の教授に就任した。音楽院では友人ジャック・ティボーも教鞭を執っていた。そこで一九二五年にユーディ・メニューインと出会う。エネスコは九歳の神童メニューインの才能に惚れこみ、それからの二年間、彼の教養と音楽性を鍛えるために献身し、メニューインの心の父となった。「ロマンティックで騎士道精神にあふれ、ある種のドン・キホーテのような人物でした」とユーディ・メニューインは回想する。「女性を大切にすると同じように、音楽を守護していました。洗練された一流人ですね。彼に近づくと、留学先のウィーンで身につけた優雅さと東欧民族的な伝統がふんだんに感じられました。大地と民族のリアリテイ、そして有機的な人生のリアリテイを身にまとうていて、のちに私自身がルーマニアの地を旅する機会を得て、あの感覚がいかにリアルなものであったか、その深みを痛いほどに感じました。そしてエネスコは驚異的な記憶力の持ち主で、ひとたび目にした楽譜はどんなものであれ覚えてしまい、忘れることがありませんでした」

教育者としての名声がいや増し、世界中からせび来てほしいと渴望された。そういう状況を受け、アルテュール・グリユミオー、ジネット・ヌヴー、イヴリー・ギトリス、イダ・ヘンデル、クリステイアン・フェラスといった若いヴァイオリニストに与えた影響は計り知れない。一九三〇年代、作曲家としても目を見張るほどの成果をあげ、それと並行して、ヴァイオリニストおよび指揮者としての演奏活動を展開していく。さらに連続演奏会で、伴奏ピアニストとして友人であるジャック・ティボールとの共演もおこなう。一九三七年、アメリカに戻ってニューヨーク・フィルハーモニー管弦楽団を指揮しながら、同じ演奏会でヴァイオリン協奏曲をソリストとしても演奏した。

二十世紀の音楽における巨人

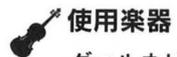
第二次世界大戦中、エネスコはルーマニアで暮らした。一九四六年、当時の体制と折り合いが悪くなり、フランスへ移住した。アメリカにも滞在し、ニューヨークで後進の指導にあたった。一九五〇年一月二十一日、ニューヨークで忘れがたい引退公演を催し、ユーディ・メニュートンとの共演によってヴァイオリニスト、ピアニスト、指揮者として最後の舞台を踏んだ。晩年をパリで過ごし、夏はシエナのキジアーナ音楽院の講習会で教えた。死去する数ヶ月前、最後に教えた弟子はイタリアの若き鬼才ウート・ウーギであった。一九五四年に卒中発作で身体の自由がきかなくなり、一九五五年五月四日にパリで他界した。

エネスコは作曲家として多くの作品を残している。ヴァイオリン曲のみならず、歌劇《オイディプ

ス王》、交響曲を八曲。室内楽、ピアノ、声楽にも秀作が多い。

本人は作曲家と見なされることを好んだが、おもな収入はヴァイオリニストとしてのものであった。録音スタジオより、聴衆との触れあいや舞台の空気を優先したので、ヴァイオリン演奏のデイスコグラフィーは控えめな数にとどまる。あれほどの名声を誇り、活躍をしたことを考えれば、録音リストはエネスコの実像をうつすらと伝えるものでしかない。おもな録音としては、J・S・バッハ《無伴奏ヴァイオリンのためのソナタとパルティータ》全曲、そしてユーディ・メニュートンとの共演による《二つのヴァイオリンのための協奏曲》、ベートーヴェンのピアノとヴァイオリンのためのソナタ《クロイツェル》、ショーンソンの《詩曲》、コレツリのソナタ《ラ・フォリア》、ヘンデルの《ソナタ第十三番》、シューマンの《ソナタ第二番》、クライスラー、パガニーニ、ダンブロジーオを数曲。さらに自作の《ヴァイオリンとピアノのためのソナタ第二番》および《第三番》を連続したかたちで録音している。

献呈された曲も多く、代表的なものとしてイザイの《無伴奏ヴァイオリンソナタ第三番》を挙げておく。



ガアルネリ・デル・ジェス (1736年)

ストラディヴァリ



[No.6] ショーソン：詩曲 Op.25

ザンフォルト・シュリュッセル (ピアノ) / 1929年録音 / コロンビア

50273/74 D / 再収録 Musica Memoria 30322 / (15'41)

知的なエモーションと官能が融合し、エネスコならではの生命力を感じさせるフレージングとなっている。音楽を通じてのコミュニケーションにもっとも心を砕いていることがうかがわれる。

Bronislaw Huberman

(1882-1947)



ブロニスワフ・フーベルマン

崇拜か嫌悪

おそらく二十世紀ヴァイオリンのヴィルトゥオーソのなかで、もつとも分類しがたく、そして嫌われることも多い奏者である。その音楽作りは極端なほど奔放で、犖猛なまでの獨創性、そしてフーベルマンの伝説的な疾走によって、演奏のたびに予想外という以上に他の誰も真似できないような閃きに満ちたものとなった。瞠目すべきテクニクの才に恵まれているのみならず、そのコントローラは比類なく、いかにして聴衆の心を燃えあがらせるかを知る稀有の奏者でもあった。その演奏には誰もが無関心でいられず、聴いた人は無条件の崇拜か、嫌悪による拒否反応か、どちらかに分かれた。

ブロニスワフ・フーベルマンは、一八八二年十二月十九日、ワルシャワに近いチェンストホヴァに生まれた。七歳のときに公開演奏でデビューしたのち、ヨアヒムに師事しようとベルリンへ行くが、教授はフーベルマンを助手に委ねる。失望したフーベルマン少年は、ヴィエニャフスキの弟子であるカール・グリゴロヴィチにこっそりと習い、のちに「教わるべきことはすべてグリゴロヴィチから学んだ」と言うようになる。それから、いっそうの上達をめざしてフランクフルトのフーゴ・ヘールマンのもとへ行き、次いでパリでマルタン・マルシックについた。その後は、本人の言葉を借りると「自

分で自分の師となり、自分なりのスタイルを確立し、偉大なアーティストの演奏を聴くことによってフレージングの感覚を磨いた。特に歌手を意識した」という。

一八九三年、ヨーロッパでの華麗なキャリアをスタートさせる。そして三年後、フーベルマン少年はブラームスの協奏曲を作曲家本人の前で演奏して、強く印象づけた。いわく、ブラームスは目に感動の涙を浮かべ、感謝の印に自分のポートレート写真にサインしたものを贈ったとか。アメリカへの演奏旅行ののち、フーベルマンは最初のレコードを録音（一八九八年）し、それからの五年間を舞台から退いて勉学の継続に充てた。一九〇二年、演奏旅行に復帰してジェノヴァではパガニーニ使用のヴァイオリンを演奏し、ロシアへ二回も足を運んだ。一九一三年、ウィーンでピアノのオイゲン・ダルベールと共に、ベートーヴェンのソナタを全曲演奏する。第一次世界大戦後、ウィーン音楽アカデミーの教授となり、デユオあるいはトリオでの演奏会を、アルトゥル・シュナーベル、エマヌエル・フォイアーマン、パウル・ヒンデミット、パブロ・カザルスと組んでおこなった。キャリアの絶頂期にあたる一九二九年、チャイコフスキの協奏曲を、ウィリアム・スタインバーグ指揮のシュターツカペレ・ベルリンとレコーディングした。

ヒトラーが政権を獲得すると、フーベルマンはドイツでの演奏会をすべてキャンセルし、ナチスの人種差別政策に抗議を表明した。一九三六年、若いユダヤ系の亡命音楽家たちが主要メンバーのパレスチナ管弦楽団をイスラエルに創設。このオーケストラがのちにイスラエル・フィルハーモニー管弦楽団となる。アルトゥーロ・トスカニーニがノーギャラで、この楽団の初年度の演奏会をテルアビブ、エルサレム、ハイファで指揮した。一九三七年十月、オーストラリアの演奏旅行から戻るとき、スマ

トラで飛行機事故に遭うが奇跡的に生還し、怪我を克服して翌年に演奏活動に復帰する。アンシュルス（一九三八年）のナチスドイツによるオーストリア併合直前にスイスへ移住し、さらに大戦中はアメリカへ脱出して多くの演奏会をおこなった。戦争が終わるとヨーロッパに戻ったが、体調を崩して一九四七年にスイスで永眠した。

代表的な録音として、J・S・バッハ、ベートーヴェン、モーツアルトの《ヴァイオリン協奏曲第三番》、チャイコフスキの協奏曲、ラロの《スペイン交響曲》、イグナツ・フリードマンとのベートーヴェンのソナタ《クロイツェル》（一九三〇年）、さらにバッジーニ、サラサーテ、シューベルト、ヴェータン、ヴェイエニャフスキの数曲が挙げられる。ロワイヤル・レーベルではフリッツ・マラシヨフスキという名前で録音。

プロニスワフ・フーベルマンは二つの著作も残している。『ヴィルトウオーソのアトリエ』（ウィーン、一九二二年）と、『ヨーロッパでの我が道程』（一九二五年）

一九八二年、フーベルマンの生誕百周年という機会に、ズピン・メータがイスラエルで音楽祭を企画し、アイザック・スターン、シユロモ・ミンツ、イヴリー・ギトリス、イダ・ヘンデル、イツァーク・パールマン、ピンカス・スカーマンが出演した。

使用楽器

ストラディヴァリ (1712年)「シュライバー」

ヘンリク・ヴィエニャフスキの所有楽器だった。

ストラディヴァリ (1713年)「ギブソン」

1936年に盗まれ、1987年に見つかった。その後ノーバート・ブレイン(アマデウス弦楽四重奏団の第一ヴァイオリンだった)の所有となったが、2001年からジョシュア・ベルの手元にある。

ストラディヴァリ (1733年)「クライスラー」

フリッツ・クライスラーの所有楽器だったが、ヨハンナ・マルツィの手にわたった。

ガアルネリ・デル・ジェス (1734年)「ギブソン」

その後はルツジェーロ・リッチの手を経て、現在は五嶋みどりの演奏楽器となっている。

著作

『ヴィルトゥオーソのアトリエ』(1912年)

『ヨーロッパでの我が道程』(1925年)

CD-ROM

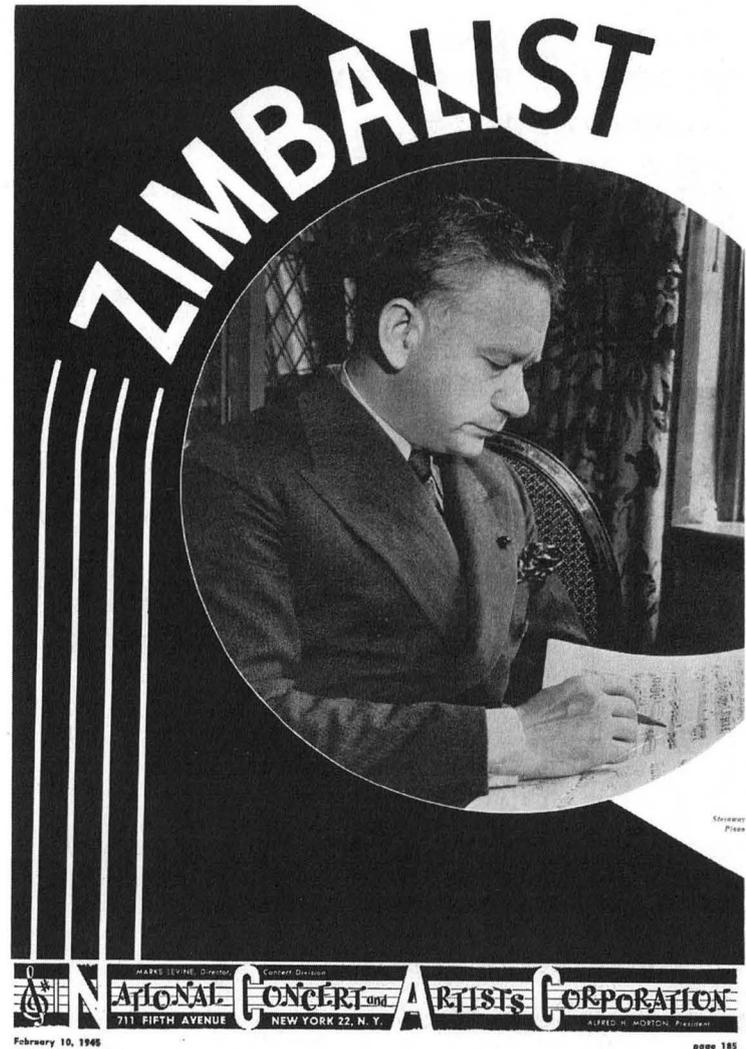
[No.7] エドゥアール・ラロ：スペイン交響曲 Op.21 第3楽章

ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団 ジョージ・セル指揮 / 1934年
6月20日-22日 / コロンビア 68288/90-D / 再収録 The Classical
Collector FDC 2003 / (6'07)

物憂げにたつぷりと歌わせるヴァイオリン。常軌を逸したイマジネーションを映し出す音楽で、人によっては心惹かれると同じくらい面食らうであろう精神性と感傷を色濃くまとっている。

Efrem Zimbalist

(1889-1985)



エフレム・ジンバリスト

アヴァンギャルド

エフレム・ジンバリストはレオポルド・アウアー最初期の弟子で、第一次世界大戦以前に国際的なキャリアを築いた。サンクト・ペテルブルク音楽院の先進的な空気を追い風に西側へ送り出され、ミッシェル・エルマンやヤッシャ・ハイフェッツがあとに続いたための道を拓いた。

一八八九年四月九日、ロストフ・ド・ナヌに生まれた。ロストフ歌劇場のヴァイオリニストおよび指揮者だった父親から音楽の手ほどきを受けた。五歳で地元の音楽院への入学を許された。めざましい上達を見せ、九歳にしてロストフ歌劇場管弦楽団でコンサートマスターとして弾いている。十一歳でレオポルド・アウアーに会って聴いてもらい、すぐさまサンクト・ペテルブルク音楽院のアウアーのクラスへ迎え入れられた。そこで六年学び、一九〇七年に金メダルを獲得して卒業。反抗的な性格ゆえに問題を起こすことも数回——一九〇五年には学生ストライキを主導したと伝えられる——あったが、音楽院の院長のグラスノフはジンバリストのことをこう書いている。「凄まじい才能と稀有のテンペラメントの持ち主で、閃きに満ちた演奏をする」それに対するアウアー教授の返事はこうだ。「同意見ですが、この二年間でエフラムがレッスンにほとんど顔を見せなかったことも事実です。

だからこそ、あれほどの才能を花開かせたのかもしれない」それに先がけ、一九〇三年にジンバリストはアウアーの推薦を受け、モスクワ音楽院で催されたチャイコフスキーの死後十周年の追悼演奏会に出演している。一九〇七年十一月七日、ブラームスとグラスノフの《ヴァイオリン協奏曲》を弾いてベルリンでデビュー、同年末にはロンドンでも演奏した。ヨーロッパでの評価を確立し、その成功の勢いで新世界アメリカへ乗りこもうと決心した。

アメリカでの大成功

一九一一年、ジンバリストはアメリカに移住し、アメリカ初の演奏をボストンで披露した。演目はグラスノフの《ヴァイオリン協奏曲》だった。人々はその活力、豊富な響き、安定したテクニク、精緻な音楽に聴き惚れた。一九一四年、ソプラノ歌手アルマ・グルックと結婚し、彼女との共演によるリサイタルを数多くおこなない、合衆国への永住を決めた。翌年、J・S・バッハの《二つのヴァイオリンのための協奏曲》をフリッツ・クライスラーとの共演で世界初のレコーディング。この音盤はレコード史上における屈指の大成功を収めた。このときはビクターだったが、レコード会社がバッハの代表作を抜粋ではなく全曲で録音するのは初めてのことと、さらに、このクラスの世界的トップ奏者二人をソリストに迎えるという意味でも歴史的意義のある企画だった。

ハイフェッツが一九一七年に登場しても、ジンバリストのアメリカでのキャリアは揺るぎなかった。その演奏は——感動させるといふ点でミツシャ・エルマンに一步ゆずり、完璧さでハイフェッツにひけを取ったとはいえ——きわだった優雅と洗練で、聴く者の心を惹きつけてやまなかった。どちらかといえば温厚なテンペラメント、正確なテンポ感、ゆったりめのヴィブラート。驚異的な技巧に恵まれていながら、ヴェルトウオーソをひけらかす演奏をジンバリストは嫌った。

ジンバリストのリサイタルの一つによって、興行師ソル・ヒューロックが華麗なキャリアを順調にスタートさせたことも忘れてはならない。一九二八年、ジンバリストは恩師アウアーのあとを引き継ぎ、フィラデルフィアのカーティス音楽院でヴァイオリン教授となった。カーティスで教育者としての名声を獲得し、約四十年にわたり後進の指導にあたった。門下にはオスカー・シユムスキー、アーロン・ロザンド、シユムエル・アシケナジ(フェルメール弦楽四重奏団の第一ヴァイオリン)といった名が挙げられる。カーティス音楽院の創設者メアリ・ルイーズ・カーティス・ボックと再婚し、一九四一年から一九六八年までカーティス音楽院の院長を務めた。ダヴィッド・オイストラフはジンバリストを称賛し、モスクワでおこなわれるチャイコフスキー・コンクールの審査員に何度も招いた。一九七〇年、ジンバリストは引退してネヴァアダ州のリノで暮らすようになり、一九八五年二月二十二日に九十六歳で没した。

作曲家としてのジンバリストは、《ヴァイオリン協奏曲》を一つ、ヴァイオリンのための小品を多数、オペラを一つ(《ラナンドラ》一九五六年)、ミュージカル・コメディを一つ(《ハニーデュー》一九二〇年)、残している。百を越すディスクグラフィイは小品が多いが、ブラームスの《ヴァイオリンソナタ第三番》の感動的な録音は特筆に値する。ジンバリストに献呈され、一九五二年に初演されたジャン・カルロ・メノッティの《ヴァイオリン協奏曲》も忘れてはならない。

 **使用楽器**

ロレンツォ・グァダニーニ (1743年)

G. B. グァダニーニ (1775年)

のちにルイス・カウフマンの所有楽器となった。

ストラディヴァリ (1715年)「ティティアン」

のちにアルテュール・グリユミオーの所有楽器となった。

ストラディヴァリ (1727年)

ストラディヴァリ (1735年)

 **CD-ROM**

[No.9] ブラームス：ヴァイオリンソナタ 第3番 二短調 Op.108 第3楽章

ハリー・カウフマン (ピアノ) / 1930年録音 / コロンビア 67786/8

／再収録 Doremi DHR 7739 / (3'07)

Adolf Busch

(1891-1952)



ADOLF BUSCH

WORLD FAMOUS VIOLINIST

"Mr. Busch's purity of line, his broad sense of architecture and his unerring projection of the chordal structure earned for him the warm approval of his listeners."—*New York Herald Tribune*, January 4, 1940

"The violinist reached great heights and was rewarded by a veritable ovation."—*Boston Post*, November 25, 1939

"Such was his deep understanding and so great was the passion with which he communicated his vision that many a listener ceased to hear mere violin tones, sensing only the immense architectural design of Bach."—*Boston Transcript*, November 25, 1939

"A purity and opulence which, combined with the superior musicianship always his, worked wonders."—*New York Times*, December 17, 1939

MR. BUSCH APPEARS IN SOLO RECITAL, IN JOINT RECITAL WITH
RUDOLF SERKIN AND WITH HIS OWN BUSCH QUARTET

Management • NBC ARTISTS SERVICE • RCA Bldg., New York • George Engles, Director

アドルフ・ブツシュ

偉人

ソリストとしては無論のこと、ブツシュ弦楽四重奏団の輝かしい功績は伝説となつて語り継がれている。アドルフ・ブツシュは画家、さらに作曲家でもあり、その偉大な人生において室内管弦楽団と幾つもの音楽祭を創立した。この偉人のキャリアは二つの大戦でのブランクを強いられた。ブツシュはファシズムに勇気をもって立ち向かい、恥辱よりは亡命を選んだことでその名を高めた。

アドルフ・ブツシュはヴェストファーレン(ドイツ)のジーゲンで一八九一年八月八日、五人兄弟の二番めの子として生まれた。兄のフリッツはのちにピアニストさらに指揮者となり、弟のヘルマンはチェリストになった。幼いアドルフは三歳で父からヴァイオリンの手ほどきを受ける。十歳でケルン音楽院に入り、最初はヴィリー・ヘス、次いでブラム・エルデリングに師事。二人ともヨーゼフ・ヨアヒム門下の出身だった。若きアドルフはさらにフリッツ・シュタインバッハとフーゴ・グリューター(ブツシュはその娘と結婚する)に作曲を習い、その後はマックス・レーガーの影響を強く受けた。一九一〇年以降、ブツシュは作曲家レーガーの《ヴァイオリン協奏曲》をヨーロッパ全土で演奏、しばしば作曲家本人の指揮によって弾くようになる。一九二一年、ケルンでブラームスの《ヴァ

イオリンとチェロのための二重協奏曲》をチェロのパウル・グリユマーと共演し、さらにロンドンでもデビュー。一九一二年、ウイーンに移り住んで演奏協会の管弦楽団のコンサートマスターとなり、さらに自分が結成した弦楽四重奏団の第一ヴァイオリン奏者となった。一九一八年、アンリ・マルトールのアトを引き継ぐかたちでベルリン音楽大学の教授に就任した。

二十世紀の室内楽奏者の最高峰

一九一九年、ブッシュ弦楽四重奏団を結成。この弦楽四重奏団は二十世紀を代表するアンサンブルとなる。一九二〇年代初頭、アドルフ・ブッシュはオーストリア出身の若いピアニスト、ルドルフ・ゼルキン（彼はのちにブッシュの長女と結婚）と出会い、このピアニストとデュオを組んで素晴らしい成果をあげ、そこへ弟のヘルマンも加わってピアノ・トリオも組んだ。同じようにしてベルリン滞在中、フェルツチョ・ブゾーニと親しくなり、ブゾーニの《ヴァイオリン協奏曲》と《ヴァイオリンソナタ第二番》を弾くようになった。一九二七年、スイスのバーゼルで暮らし始め、そこでも後進の指導にあたった。若かりし頃のユーディ・メニューインを二年にわたって夏に指導したのもバーゼルのことだ。アルトゥーロ・トスカニーニ（ブッシュ弦楽四重奏団の稽古に立ちあうことを許された唯一の人物）と親交を結び、共演者として一九一三年のアメリカ演奏旅行に参加した。

ヒトラーへの果敢な抵抗

一九三三年以降、ブッシュは非ユダヤ人でありながら、ナチスの人種差別政策に抗議を表明。ヒトラーから思いとどまるよう働きかけられたにもかかわらず、ドイツでの演奏会をすべてキャンセルし、生まれ育った祖国を去った。その結果、収入の半分と、ファンのほとんどを失った。ブッシュはスイスとロンドンで半々の生活を送るようになり、一九三五年に指揮者をおかない室内アンサンブル、ブッシュ・チェンバー・プレイヤーズを創立して、おもにJ・S・バッハとモーツアルトの作品を演奏した。一九三八年、ブッシュはスイスのルツェルン音楽祭に出演した。しかし、一九三九年、戦争が起るとブッシュはアメリカへの移住を決意し、先行していたブッシュ弦楽四重奏団のメンバーたちと合流。さらに、新しい室内アンサンブルを結成し、アメリカ中でのツアーを幾度もおこなった。

一九五〇年、ヴァーモント州マルボロの小さな村で音楽祭を創設。同じく音楽学校を創立し、その学校は現在、アメリカの音楽教育の最良の機関と評価されている。ブッシュは一九五二年六月九日にギルドフォード（ヴァーモント州）の自宅で急死した。

作曲家アドルフ・ブッシュは多作で、ヴァイオリン作品としては《協奏曲》やデュオないしソナタなどが挙げられる。弦楽四重奏とトリオでの録音を多く残しているが、それとは別にJ・S・バッハ、ベートーヴェン、ヘンデル、モーツアルト（第五番）の協奏曲をソリストとしてレコーディング、同様にルドルフ・ゼルキンとの共演によるJ・S・バッハ、ベートーヴェン、ブラームス、モーツアルト、シューベルト、シューマンのデュオおよびソナタの録音もある。

使用楽器

ストラディヴァリ (1716年)「シュトゥツキ」

ストラディヴァリ (1732年)「ヴィーナー」

のちにピーナ・カルミレツリの所有楽器となった。

CD-ROM

[No.10] シューマン：ヴァイオリンソナタ 第1番 イ短調 Op.105 第2楽章

ルドルフ・ゼルキン (ピアノ) / 1937年10月9日録音 / HMV

DB3371/72 / 再収録 EMI CDS7 54374 2 / (3'48)

ブッシュとゼルキンの1920年の出会いは、結婚にたとえてもいいかもしれない。二人のデュオは彼らの生前、すでに伝説だった。このシューマンのソナタでは、二人の音楽的な対話と心が通じあった様子、音楽の意図の継続、互いに耳を傾けあう細心の心意気が、聴く者の心を打ち、敬意の念を抱かずにいられない。

Mischa Elman

(1891-1967)



ミッシヤ・エルマン

黄金の響き

ミッシヤ・サウロヴィチ・エルマンは、ヴァイオリンの歴史における唯一無二の存在だ。ユダヤ系ロシア人演奏家の系譜でいえば、世界初のヴァイオリニストであり、二十世紀初頭に東側のゲットー（ユダヤ人街）をあとにした彼は、その後数世代の中央ヨーロッパとロシア出身のヴァイオリニストたちに道を拓いた。レオポルド・アウアーの最初の弟子の一人であり、同門のヴァイオリニストが次々に国際的なキャリアを築いていく先鞭をつけた。アウアーの弟子たちは世界中で活躍したが、なかでもエルマンはアメリカに、サンクト・ペテルブルク発信の偉大な音楽の伝統を持ちこんだ。

「ミッシヤはヨーロッパで最高のヴァイオリニストとなるだろう」

エルマンは、キエフの近くにある小さな村タリノエで、一八九一年一月二十日に生まれた。祖父はクレズマー、つまりイディッシュ系の音楽を奏でるヴァイオリン弾きで、父はヘブライ語の教師だった。四歳でヴァイオリンの手ほどきを受け、二年後にはオテッサの音楽学校に入学し、アレクサンドル・フィデルマンのもとで学ぶ。フィデルマンはレオポルド・アウアーとアドルフ・ブロードスキの弟子

だった。幼いエルマンの上達はたいしたもので、八歳になる頃には公開演奏会でシャルル・ド・ペリオの《ヴァイオリン協奏曲第七番》を弾きこなしした。パプロ・デ・サラサーテがその演奏を聴き、推薦状で少年の輝かしい将来をこう予言している。「ミッシャは凄まじいほどの才能に恵まれており、このままパリ、ベルリン、サンクト・ペテルブルクで音楽を学び続けられれば、ヨーロップで最高のヴァイオリニストとなるだろう」一九〇二年にオデッサを訪れたレオポルド・アウアーがミッシャと会い、ヴィエニャフスキの《ヴァイオリン協奏曲第二番》を聴いた。アウアーは少年の才能とそのヴァイオリンの響きに強い感銘を受け、すぐさまサンクト・ペテルブルク音楽院の自分のクラスへ迎え入れた。しかし、そうするためには困難も生じた。当時、ユダヤ人がサンクト・ペテルブルクで暮らすことは禁じられ、ミッシャとその父親の当地での在留にはロシア帝国の特別許可が必要だったため、アウアーはあらゆる手段を講じてこの許可を獲得した。そしてミッシャに音楽と楽器へのアプローチを伝授した。「聴衆を征服するには何よりもまず、決して単調にならないよう心がけ、陰影をつけるにも必ず自分ならではの色を出すこと。単調とはすなわち音楽の死だ！」その精神をエルマンは生涯忘れなかった。彼のレコードはまさに、おのれの魂を映し出す鏡として晩年まで師の教えを大切にしていたことの証ともいえよう。

ヨーロップおよびアメリカでのデビューと大成功

エルマンは十三歳の若さで帝都サンクト・ペテルブルクでメンデルスゾーンの《ヴァイオリン協

奏曲》を演奏してデビュー。圧倒的な成功を取めた。さらにツェーザリ・キュイのもとで作曲の手ほどきを受けた。エルマンのためにドイツ、オーストリア、スカンジナビアで華やかな演奏ツアーが企画された。人々はエルマンをもう一人の若き天才、フランツ・フォン・ヴェチエイと比較した。ヴェチエイはその頃、ドイツで演奏活動をおこなっており、神童二人のライバル関係に聴衆は熱狂した。一九〇五年、エルマンはロンドンでグラスノフの《ヴァイオリン協奏曲》を演奏し、パリでデビュー盤とそれに続く数枚をパテ（レコード会社）からリリース、さらにロンドンではグラモフォン&タイプライター（この会社はのちにHMV/ビズマスターズヴォイスとなる）のもとで録音した。こうして少年にすぎないエルマンは行く先々で興奮の渦を巻きおこすようになった。その超絶技巧は奇跡を思わせたが、それだけでなく、たとえようもないほど艶やかな響き、そして温かみのあるヴィブラートを駆使し、半世紀以上にわたって栄光の座に君臨した。一九〇八年にはニューヨークでのデビューを果たし、数ヶ月でその人気を不動のものとした。

クライスラーに並ぶほどの人気

批評家はエルマンをイザイ以来の偉大なヴィルトゥオーソと称賛した。一九一一年までロンドンで暮らし、その後はアメリカに永住した（一九二三年にアメリカの市民権を獲得）。レコードの売り上げは特筆に値し、一九一三年にリリースされたマスネの《エレジー（悲歌）》は、偉大なテノール歌手エンリコ・カルーソーとの共演で、かつてない商業的な大成功となった。だが、エルマンのキャリアに

おいて外せない一曲ということであれば、チャイコフスキーの《ヴァイオリン協奏曲》の成功を挙げ
るべきだろう。ハイフェッツがアメリカの音楽界に上陸するまで、この曲はエルマンの代名詞となり、
あまりの人気の白熱ぶりに、この協奏曲をプログラムに入れるとなると演奏会の主催者がエルマン以
外の奏者ではだめだと拒否するほどであった。名声は高まり、フリッツ・クライスラーと並び称され、
その過熱ぶりは「ハイフェッツ現象」が起きる頃まで続く。

一九二〇年代以降、ヤッシャ・ハイフェッツの驚異的な成功とその見事な演奏の現代的性によって、
エルマンのキャリアは脅かされる。同じ頃に活躍したヴァイオリニストたちの中には、さらに内的
もしくは知的なアプローチを試みる者も多かったが、エルマンはそれよりも音が人におよぼす力を信
じ、聴き手の心に直接語りかけるような演奏をした。「決して自分の感情に蓋をしてはいけない」と、
エルマンは幾度となく口に出している。一九二四年、エルマン弦楽四重奏団を結成し、第二次世界大戦
が終わるまで演奏会で弾き続けた。並行してソリストとしての活動も継続したが、ユー・デイ・メニエー
イン、ナタン・ミルシテイン、ジノ・フランチェスカツティ、ルツジェーロ・リッチ、アイザック・スタ
インといった若い才能の出現にともない、次第にエルマンの栄光は勢いを失っていく。そうだったこと
と考えあわせてみると、エルマンは自分の演奏の変化や進展を望まず、流行から離れてしまったのだ
ろう。信念を曲げず、自尊心の強い人物であったと言われている。演奏会のあと、ファンの女性が楽
屋を訪れ、彼が弾いたチャイコフスキーの一曲について称賛の言葉を述べた。それに対しての返答は
こうだ。「それ以外の曲のどこがお気に召さなかったのかな？」それでも晩年まで演奏も録音も活発
におこない、ニューヨークのマンハッタン・スクール・オブ・ミュージックで後進の指導にあたった。

このスクールは彼の私塾だったが、のちに音楽大学となった。エルマンは一九六七年一月二十八日、
最後の演奏会をピバリーヒルズでおこない、四月五日にニューヨークで没した。

フリッツ・クライスラーはエルマンに《ベートーヴェンの主題によるロンディーノ》を献呈し、ボ
フスラフ・マルティヌーは《ヴァイオリン協奏曲第二番》(エルマンが一九四三年に初演)を、そして
ウジェーヌ・イザイはヴァイオリンとピアノのための詩曲《恍惚》を捧げた。

六十年以上かけて録音された膨大な数のディスクグラフィ

一九〇五年から一九六六年までで、ミッシャ・エルマンは多くのレコーディングをおこない、録音
した作品数はざっと見積もっても二百以上になる。相当数がキャラクターもしくはヴィルトゥオーソ
で聴かせる小品で、エルマン自身の編曲によるものも多い。大曲のレパートリーとしては、J・S・
バッハ(第二番)、ベートーヴェン、ブルッフ、ハチャトリアン、メンデルスゾーン、モーツァルト(第
四番と第五番)、チャイコフスキー、ヴィエニャフスキ(第二番)のヴァイオリン協奏曲、ラロの《スベ
イン交響曲》、ベートーヴェンの二つの《ロマンズ》、同様にベートーヴェン(第五番と第九番)、ブラ
ムス(第二番と第三番)、ドビュッシ、フォーレ(第一番)、フランク、グリーグ(第一番と第三番)、
ヘンデル(第十三番と十四番と十五番)、モーツァルト(K四五四)のソナタが挙げられる。



Mischa Elman

At the peak of his career, the world-renowned violinist is today more tops than ever. Pouring in from all parts of the country, audiences and critics join in unanimous agreement: "NEVER MORE MIRACULOUS AND GREAT."

From the time of his American debut in 1908, at the age of 17, when he swept the country end to end with the glory of his violin genius (he gave 21 concerts in New York alone, a record which has remained solitary and unique), to the countless world tours, which have made his name a household word in every corner of the world, Mischa Elman has never been anything but tops.

The way in which Mischa Elman is tops today, however, is singularly special. It is a tops which has broadened and deepened and grown and matured with the years. The old glorious "Elman tone" is revelation to new audiences and a constant delight to the old; as is the brilliant technic and vigor and dynamic flight, now combined with a new spiritual strength, insight, all-round virtuosity and scope which has left the country breathless with new wonder.



With Dr. Serge Koussevitzky and composer Bohuslav Martinu, following the virtuoso's sensational success in the latter's Violin Concerto with the Boston Symphony.



On tour, Mr. Elman has played at Army Camps and Naval Stations all over the country,—appearances with GI orchestras being a special pleasure and privilege.



At home, there is nothing for relaxation like Mrs. Elman and afternoon tea.

- "WITHOUT A RIVAL TODAY"—OLIN DOWNES, N. Y. Times, Jan. 7, 1944
- "ELMAN A MASTER"—N. Y. World-Telegram, Jan. 7, 1944
- "MISCHA ELMAN WINS OVATION"—Christian Science Monitor, Jan. 3, 1944
- "POTENT IS THE ELOQUENCE OF MISCHA ELMAN'S VIOLIN"—Chicago News, Jan. 14, 1944
- "ELMAN WINS ACCLAIM"—Chicago Tribune, Jan. 12, 1944

EXCLUSIVE MANAGEMENT
BERNARD R. LaBerge INC.
 119 WEST 57th STREET, NEW YORK 19, N. Y.
 VICTOR RECORDS STEINWAY PIANO

使用楽器

ストラディヴァリ (1703年)「シューフス」

ストラディヴァリ (1721年)

のちにヨゼフ・スークの所有楽器となった。

ストラディヴァリ (1722年)「ブルームフィールド」

ヴィリー・ブルメスターとヨーゼフ・ヨアヒムの使用楽器だった。

ストラディヴァリ (1727年)「マダム・レカミエ」

ストラディヴァリ (1735年)「サマズイユ」

のちにレジス・パスキエとウート・ウーギの所有楽器となった。

ニコロ・アマティ

CD-ROM

[No.11] チャイコフスキー：ヴァイオリン協奏曲 二長調 Op.35 第2楽章

ロンドン交響楽団 (ジョン・バルビローリ指揮) / 1929年12月19日

—20日 / HMV 1405/8 / 再収録 Pearl Gemm CD9388 / (6'40)

現在、ミッシャ・エルマンのヴァイオリンを聴くと、十月革命以前のペトログラード (サンクト・ペテルブルク) の写真を眺めるような感慨を抱かずにはいられない。豪華、煌びやか、涙の滴。いまや永遠に失われた文化そのものだ。チャイコフスキー《ヴァイオリン協奏曲》の音色には思わず涙を誘われる。この曲こそエルマンが長らく「自分の曲」と見なしていた作品だ。

[No.12] アクロン：ヘプライの旋律 Op.33 (アウアー編曲)

ジョゼフ・ザイガー (ピアノ) / 1956年三月録音 / ロンドン LL

1467 / 再収録テストメント SBT4 1344 / (6'01)

イディッシュの民族音楽をエルマンはことさらに愛した。エルマンならではの自在なテンポ、激しい熱情、自然なインスピレーションは、圧倒的に豊潤な響きとなって結実し、中央ヨーロッパで幾世紀も受け継がれてきたユダヤの伝統をあらためて見せつける。

Joseph Szigeti

(1892-1973)

Szigeti
PEERLESS IN RECITAL AS WITH ORCHESTRA

St. Louis Star-Times
"Peerless Szigeti"

Cleveland Plain Dealer
"He stands without a peer."

New York World Telegram
"That Top of Top Flight Violinists."

TIME
THE WEEKLY MAGAZINE
"Big Box Office Such as
Mellow Fritz Kreisler,
Brilliant Jascha Heifetz."
MUSICIANLY JOSEPH SZIGETI."

Newsweek
"A Szigeti Concert
Invariably Attracts a
Full House."

**ORCHESTRAL ENGAGEMENTS
SEASON 1941-1942**

New York Philharmonic-Symphony
Minneapolis Symphony
New York City Symphony
Washington With National Symphony Orchestra
Baltimore With National Symphony Orchestra
Elizabeth Philharmonic
Montreal Symphony

Boston Symphony Orchestra
Ford Sunday Evening Hour
St. Louis Symphony Orchestra
New Haven Symphony
Cincinnati Symphony
Seattle Symphony
Toronto Philharmonic
Buffalo Philharmonic
New York, New Friends of Music Orchestra
Newark-Griffith Foundation (with N. Y. New Friends of Music Orchestra)

Management: National Concert and Artists Corp. * Alfred H. Morton, President * Marks Levine, Director Concert Division
Columbia Records 711 Fifth Avenue, New York Baldwin Piano

ヨーゼフ・シゲティ

ヴァイオリンの貴族

一八九二年九月五日、ブダペストでヨシユカ・ジンガーは生まれた。のちにヨーゼフ・シゲティの名で知られることになる人物だ。早くに母を亡くし、祖父母によってマールマロシゲト——シゲティという名はここから取った——というカルパチア山脈の近くにある村で育てられた。この地方で生まれたヴァイオリンの巨匠には他にも、ヨーゼフ・ヨアヒム、レオポルド・アウアー、カール・フレツシュがいる。シゲティの一族には音楽家が多く、ヨシユカは七歳で叔父のベルナトからヴァイオリンの手ほどきを受けた。ヨシユカの父は居酒屋のオーケストラを指揮していたが、もう一人の叔父デジュ(二八八〇—一九六三)はイエネー・フバイの弟子で、ニューヨークのメトロポリタン歌劇場管弦楽団のメンパーとなり、一族で初めてクラシックのヴァイオリニストとしてのキャリアを築いていた。ヨシユカは父に連れられてブダペストへ行き、十一歳でブダペスト音楽アカデミーのイエネー・フバイのクラスに迎え入れられ、そこで二年を過ごす。一九四七年に刊行された備忘録「弦によせて」のなかでシゲティは、このクラスに「子どもじみたライヴアル意識」が充満していたと回想している。さらに、フバイは弟子が伝統的なレパートリーから離れることを好まず、バルトークやコダーイの曲に対してもまったく感銘を受けたふうではなかった、と述べている。みずからも腕のいい演奏家として卓越した教育者

でありながら、フバイはヨアヒムの教えを大切にし、崇拜する師ヨアヒムが理想とした音楽と技術規範に終生忠実であり続けた。シゲティは一九〇五年にヴィオッティの《ヴァイオリン協奏曲イ短調》を弾いてブダペストでデビューし、次いでベルリンではバッハの《シャコンヌ》、パガニーニの《妖精の踊り》、エルンストの《ヴァイオリン協奏曲》を弾いた。演奏は好意的に受け入れられたものの、それ以上ではなかった。その頃の世界はロシア、特にサンクト・ペテルブルクのレオポルド・アウアーが送り出してくる神童たちの新しい波に席捲せきけんされており、そこにフバイ門下のフランツ・フォン・ヴェチエイ、エミール・テルマニー、シユテファイ・ゲイエル、イエリー・ダラーニが加わっていた。シゲティにとって、この競争を勝ち抜くのがどれほど困難かは想像するまでもない。そして彼は、ヤツシャ・ハイフェッツやミツシャ・エルマンのような閃光めいた華やかな運命をたどることなく、ひたすら忍耐と努力を積み重ねることによって国際的な評価を得た。しかもフバイのあとは他の誰にも師事することなく、独学でヴァイオリン・スト、そして表現者としての道を切り開き、自分ならではの響き、ヴィブラート、フレーズの解釈を究めていく。

困難なデビュー

十三歳のヨーシユカは劇場付きの楽団に雇われ、オペレッタの幕間で演奏をするようになり、さらにサーカスと契約して数ヶ月のあいだズラギという芸名——父親が本名を使うことを許さなかった——で、綱渡り芸人と学者犬のショーのあいだにクラシックの曲を演奏した。一九〇六年は彼がロ

ンドンのベヒシュタイン・ホール（現在のウイグモア・ホール）でデビューした年で、タイムズ紙の音楽評執筆者はその時点でヨーシユカの表現の成熟、演奏スタイルの美点について言及している。そのおかげで翌年、数か国での演奏会に招聘された。なかでも名指揮者トーマス・ビーチャムとの共演は意義深く、のちにモーツァルト、メンデルスゾーン、プロコフィエフの《ヴァイオリン協奏曲》をビーチャムと録音することになる。一九〇七年からイギリスに居を定め、イギリスを拠点にしてフェルツチョ・ブゾーニ——シゲティはブゾーニからきわめて強い影響を受けた——、マイラ・ヘス、ヴィルヘルム・バックハウスといった高名なピアニストと演奏旅行をおこない、またテノール歌手のジョン・マコーマック、ソプラノ歌手のネリー・メルバとも共演した。十四歳のとき、弟子の将来を心配したフバイに連れられてベルリンへ行き、ヨーゼフ・ヨアヒムに引きあわされる。その演奏を聴くなりヨアヒムはシゲティを弟子にしようと言った。だが、ヨアヒムの冷やかな態度に驚いた少年はそれを頭から拒絶し、ロンドンへ帰ることを選択した。一九〇八年、シゲティはハーティ・ハミルトンから献呈されたばかりの《ヴァイオリン協奏曲》を初演し、同年にHMVで初めてのレコーディングをおこなった。一九一三年までイギリスで過ごし、結核に罹患してキャリアを中断。それからの三年間、スイスのダヴォスにあるサナトリウムで療養した。

異なる素養

無事に快復したシゲティは、一九一七年にアンリ・マルトールからジュネーヴ音楽院の教授職を引き

継ぎ、その後の七年をジュネーヴで暮らした。そのあいだ、ヨーロッパとソヴィエトの主要都市で、偉大な指揮者たち（ライナー、ニキシユ）との演奏会をおこなった。一九二五年にジュネーヴでのレオポルド・ストコフスキーとの出会いがきっかけとなり、シゲティは初めてアメリカへ招かれて同年の十二月にベートーヴェンの《ヴァイオリン協奏曲》をフライデルフィアで演奏した。ヨーシユカという名をヨーゼフと変えたのはその頃のことだ。それを境にしてシゲティの音楽性、教養、洗練は聴衆と批評家の心をとらえた。優れた特質が認められ、全世界で高く評価されるようになっていく。自分がヴァルトウオースとして派手にアピールするテンペラメント（情熱的な芸術性）を持ちあわせていないという自覚のあったシゲティは、クライスラー、エルマン、ハイフェッツ、ミルシテイン、メニューインといった、アメリカ在住、アメリカで教育を受けた「ヴァイオリンの怪物たち」と同じ土俵で勝負しようとはしなかった。異なる素養を身につけた自分には別の道が開かれており、別の聴衆がついてきてくれるはずだとわかっていた。批評家マイケル・スタインバーグがこう書いている。「ハイフェッツが優れたヴァイオリニストだったとすると、シゲティは優れた音楽家であり、シゲティを支持した聴衆は、見事なヴァイオリン演奏と、ヴァイオリンで奏でる見事な音楽との違いを見わけることができたのだ」

偉大な貴族

二つの大戦のあいだもシゲティは活発な演奏活動をおこない、妻のワンダと長らくパリで暮らし

た。ペラ・バルトックと友情で結ばれ、多くのリサイタルで共演した。そしてニキタ・マガロフと親しくなり、マガロフは一九三九年にシゲティの娘イレーヌと結婚する。若い頃はあまり多くなかったレパートリーも次第に広がりを見せ、一九二七年にはニューヨークでペラ・バルトックの《ヴァイオリンソナタ第二番》を初演し、一九二九年に《ラプソディ第一番》を初演した。その頃には演奏会での曲目として、ルーセル、ミヨー、オネゲル、ブゾーニ、カウエル、マルタン、カゼツラといった作曲家の曲をよく入れるようになっていた。セルゲイ・プロコフィエフはシゲティを自作品の最良の理解者と見なし、シゲティはプロコフィエフの《ヴァイオリン協奏曲二長調》をロシアで初演し、最初の録音（一九三五年）もおこなった。エルネスト・プロツホもまた《ヴァイオリン協奏曲》をシゲティに献呈し、デイミトリ・ミトロプロロスの指揮でシゲティが初演をおこなった。一九四〇年、ヨーゼフとワンダ・シゲティ夫妻はアメリカに移住し、その同じ年にバルトックとの共演でワシントン国会図書館での伝説的なりサイタルを開催した。作曲家バルトック本人によるピアノ、さらにクラリネット奏者ベニー・グッドマンとの共演で《コントラスツ》を録音し、のちにはイーゴリ・ストラヴィンスキーと《ヴァイオリンとピアノのための協奏二重奏曲》を録音、クラウディオ・アラウとベートーヴェンの《ピアノとヴァイオリンのためのソナタ》全十曲を録音した。アルトゥル・シュナーベル、ウィリアム・プリムローズ、ピエール・フルニエと室内楽で共演し、一九五〇年代初頭にはブラドでパブロ・カザルス、マイラ・ヘス、ポール・トルトリエとも共演した。一九六〇年代初頭にスイスで隠退生活に入るまではレコーディングもしていた。晩年になると、数多くの国際コンクールの審査員となり、備忘録「弦によせて（一九四七年発行、一九六七年に改訂）」の改訂、新しい本の執筆——『ヴァイオリニストのノー

使用楽器

マントヴァのピエトロ・グアルネリ
グアルネリ・デル・ジェス
ストラディヴァリ(1724年)「ルートヴィヒ」
G. B. グアダニーニ

著作

『弦によせて』(1947年)
『ヴァイオリニストのノートブック』(1964年)
『ベートーヴェンのヴァイオリン・ソナタ』(1965年)
『シゲティ・オン・ザ・ヴァイオリン』(1970年)

CD-ROM

[No.13] プロコフィエフ：ヴァイオリン協奏曲 第1番 二長調 Op.19

第1楽章

ロンドン・フィルハーモニー管弦楽団(トーマス・ビーチャム指揮)
／1935年8月23日録音／HMV LX 433-35／再収録EMI CDH
53452 2／(9'17)

プロコフィエフはシゲティを自作品の最良の理解者と見なしていた。ここで聴くことができる演奏こそ、1935年にシゲティが世界初で録音した《ヴァイオリン協奏曲二長調》であり、胸をえぐるような歌心と熱のこもった雄々しさは、強い感情を喚起する力に満ちている。

[No.14] ベルリオーズ：夢とカプリース Op.8

フィルハーモニー管弦楽団(コンスタント・ランバート指揮)／
1946年8月26日録音／コロンビア 72869 D／再収録Lys DANTE
084／(9'08)

シゲティが蘇演したおかげでヴァイオリンのレパートリーに復活した楽曲である。

トブック(一九六四年)、『ベートーヴェンのヴァイオリンソナタ(一九六五年)』『シゲティ・オン・ザ・ヴァイオリン(一九七〇年)』——と、チョン・キョンファ、フランコ・グツリ、アーノルド・スタインハルト、ネル・ゴトコフスキーといった弟子の指導にもあたった。一九七三年二月二十日、ルツェルンで死去。

シゲティに曲を献じた二十世紀の大作曲家は多い。バルトークの《ラプソディ第一番》と《コントラスト》、プロッホとカゼッラの《ヴァイオリン協奏曲》、イザイの《無伴奏ヴァイオリンのためのソナタ第一番》、プロコフィエフの《ピアノとヴァイオリンのための五つのメロディ作品三五の二》の終曲が挙げられる。ベルリオーズの《夢とカプリース》を蘇演した功績も大きい。

シゲティのデイスコグラフィの録音期間は約五十年にわたり、曲目は百五十以上になる。規模が大きく華やかな《ヴァイオリン協奏曲》(チャイコフスキー、シベリウス、ブルッフなど)、あるいは華麗なヴィルトゥオーソを聴かせるレパートリー曲(サラサーテ、サン＝サーンス、ヴィエニャフスキなど)は含まれていない。だが、そこには豊かな学識と、故国ハンガリーの音楽への深い愛情が投影され、表現形式に対するシゲティの学究心とオープンマインドを示すものとなっている。一九〇八年のレコードデビューの頃はフバイの教えのままに弾いているが、ただ一度だけ一九五〇年代半ばに録音したバッハの《無伴奏ヴァイオリンのためのソナタとパルティータ》全曲を聴くと、演奏スタイルが大きく進化したことがよくわかる。とはいえ、二度の大戦に挟まれた時代こそが、この「ヴァイオリンの貴族」たる巨匠の黄金時代であり、二十世紀においてもつともきわだったパーソナリティ、優雅さ、教養を持った人物と呼ぶにふさわしい。

Georg Kulenkampff

(1898-1948)



ゲオルク・クーレンカンフ

ドイツの伝統

ゲオルク・クーレンカンフ、本名アルヴィン・ゲオルク・クーレンカンフIIポストは、一八九八年一月二十三日、ブレーメンに生まれた。七歳のとき、街のオーケストラのコンサートマスターだったハンス・コルクマイヤーからヴァイオリンを習うようになり、十二歳でデビューを果たした。会って演奏を聴いてくれたレオポルド・アウアーからは、音楽家として将来有望だと励まされた。ゲオルクはヨーゼフ・ヨアヒム門下出身の二人と勉強する。最初はエルンスト・ヴェンデルに一九一三年から一九一五年まで、次いでベルリン音楽大学で一九一七年までアドルフ・ブッシュの師でもあったヴェリー・ヘスについた。一九一六年、彼はベルリン・フィルハーモニー管弦楽団のコンサートマスターに就任し、師であるヴェンデルの弦楽四重奏団で第二ヴァイオリンを担当した。一九一七年にベルリン・フィルハーモニー管弦楽団による伴奏でマックス・ブルッフの《スコットランド幻想曲》を弾き、ソリストとしてデビュー。その後も幾度となくベルリン・フィルと演奏会で共演し、何枚かのレコードを録音した。第一次世界大戦末期、ベルリンに居を定め、一九二三年には音楽大学で教える側にまわった。クーレンカンフはドイツの楽派の教えをそのまま受け継いでおり、弟子たちの目から見ても鋭い知性、稀有なユーモアのセンスに恵まれた師匠であった。一九三五年、ピアニストのエドウィン・

フィッシャーとチェリストのエンリコ・マイナルディとピアノ・トリオを結成、演奏するようになる。ナチスの台頭でユダヤ系のヴァイオリニストが排除されたことは、クーレンカンブのキャリアに追い風となった。ファシズムには反対の立場だったが、彼はドイツにとどまり、一九三五年に録音もしていたメンデルスゾーンの《ヴァイオリン協奏曲》の演奏禁止に断固として立ち向かった。

シューマンのヴァイオリン協奏曲の初演

少しして、クーレンカンブはイエリー・ダラーニ(ヨーゼフ・ヨアヒムを大伯父に持つ女性)とユードイ・メニューインと共に、シューマンの《ヴァイオリン協奏曲》の再発見に端を発した論争の渦中に立った。最初はこの曲を「音楽史でたどるヴァイオリン作品の流れのなかで、いままで抜け落ちていた重要作品であり、ベートーヴェンとブラームスをつなぐ橋としての意義を持つ」と評価したメニューインが、みずからサンフランシスコでシューマンのこの《ヴァイオリン協奏曲》を初演するはずだった。だが、「ドイツの遺産」にして価値ある宝であるこの協奏曲を、外国で、しかもユダヤ人のヴァイオリニストが披露するなど認められないと、予定されていた初演をナチスが妨害した。クーレンカンブは当時ドイツで存命のヴァイオリニストとしては第一人者と認められており、この曲の初演(ヒンデミットによる改訂版を使用)を拒否することは許されなかった。一九三七年十一月二十六日、クーレンカンブはカール・ベームの指揮でシューマンの《ヴァイオリン協奏曲》を初演。四週間後、ハンス・シュミット・イッセルシュテットの指揮でクーレンカンブは同曲を録音し、このレコードは

彼の録音でもっとも有名なものとなった。一九四〇年、クーレンカンブはポツダムに居を定め、その地で偉大なピアノリストのヴィルヘルム・ケンプと出会い、デュオを組む。一九四四年にナチス・ドイツと決別し、スイスに亡命。カール・フレッシュの死後、ルツェルン音楽院であとを引き継ぎ、数年にわたってルツェルン音楽祭をプロデュースし、その機会にかつてのトリオの仲間であったフィッシャーやマイナルディと和聲、共演した。並行してゲオルク・シオルティのピアノでソナタを演奏し、シオルティをパートナーにして晩年のレコーディングを幾度かおこなった。一九四八年十月四日、脳炎の悪化によりシャフハウゼンで早すぎる死を迎えた。

ゲオルク・クーレンカンブは、多くの曲を初演している。パウル・クレツキの《ヴァイオリン協奏曲(一九二三年)》、ヴィルヘルム・ケンプの《ヴァイオリン協奏曲》、オットリーノ・レスピーギの《秋の詩(一九二六年)》、カール・ヘラーの《ヴァイオリンとピアノのためのムジーク》。

クーレンカンブのデイスコグラフィは六十曲ほどで、協奏曲はベートーヴェン(一九三六年)、ブラームス(一九三六年)、マックス・ブルッフ(第一番)、ドヴォルザーク(一九四一年)、メンデルスゾーン、モーツァルト(第五番)、シューマン、シベリウス、チャイコフスキーが挙げられる。他に、ソナタとしてはベートーヴェン、ブラームス、モーツァルトを、ヴィルヘルム・ケンプあるいはゲオルク・シオルティを共演ピアノリストに迎えて録音している。

 **使用楽器**

ストラディヴァリ (1734年)「ナドー」

エドゥアール・ナドーとヴィリー・ブルメスターの所有楽器だった。

 **著作**

『ヴァイオリン演奏についての考察』(1952年)

 **CD-ROM**

[No.16] シューマン：ヴァイオリン協奏曲 二短調 第2楽章

ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団 (ハンス・シュミット=イツセルシュテット指揮) / 1937年12月20日録音 / テレフンケン E 2395/8 / 再収録テルデック 4509-93672-2 / (6'24)

再発見された《ヴァイオリン協奏曲》の初演からわずか数週間後にレコーディング。

Jascha Heifetz

(1901-1987)



ヤツシヤ・ハイフェッツ

すべてのヴァイオリニストのお手本

ヴァイオリン史において「ハイフェッツ現象」ほどの激震はきわめてまれである。実のところ、パガニーニ以降、ハイフェッツの出現に匹敵する出来事は一度もなかった。パガニーニという事象によって何もかもが「パガニーニ以前」と「パガニーニ以後」と色分けされたが、まさにそれと同じことがハイフェッツでも起きた。「ハイフェッツ以前」と「ハイフェッツ以後」の線が引かれたのだ。一九一七年十月二十七日、ロシアから訪れたばかりの若きヴァイオリニストがカーネギー・ホールで初リサイタルをおこない、現代ヴァイオリンはかくのごとくあるべしという規範を打ち出し、その日を境に弦楽器の世界ではすべてが変わってしまった。ダヴィッド・オイストラフ、レオニード・コーガン、アイザック・スターン、ヘンリック・シエリング、イツァーク・パールマン、そして多くのヴァイオリニストが折りにつけ発言している。ヤツシヤ・ハイフェッツこそ、まちがいに二十世紀でもっとも抜きんでた奏者である、と。ハイフェッツがヴァイオリン演奏に革命を起し、完璧とはどういうものかを身をもって定義した。圧倒的なハイレベルであったため、ヴァイオリニストにとって避けては通れぬ絶対的な先例となり、あらゆる奏者が最初にこの手本と比較されることになった。あまりに卓越した技量だったゆえ、四分の三世紀が過ぎた現在でもその状況は変わっていない。そういう意味で、

ハイフェッツは時代を超越する預言者だった。

六歳でメンデルスゾーンの《協奏曲》

ヤツシャ(ヨセフ)・ハイフェッツは一九〇一年二月二日(この生年は正しくないとする説が根強い。これより一年前だとする情報も多い)にリトアニアのビルナで生まれた。市の交響楽団のコンサートマスターだった父から三歳でヴァイオリンの手ほどきを受ける。たちまち幼い息子の驚くべき才能に気づいた父は、息子を音楽学校に入れ、レオポルト・アウアーの弟子イリヤ・マルキンのクラスで学ばせた。ヤツシャは五歳で初の公開演奏会をおこない、その一年後にはカウナスでメンデルスゾーンの《ヴァイオリン協奏曲》を弾くほどになる。ビルナの帝国音楽学校を七歳で修了し、サンクト・ペテルブルク音楽院の高名な教授レオポルド・アウアーに紹介され、一九一〇年にアウアーのクラスに迎えられる。この有名な音楽院に史上最年少で入学したのだ。ユダヤ人がサンクト・ペテルブルクに住むことは禁じられていたので、ハイフェッツよりも先にサンクト・ペテルブルク音楽院で学んだエフレム・ジンバリスト、ミツシャ・エルマンと同じように、アウアーはハイフェッツ少年のために特別許可を取りつけるべく奔走した。アウアーは音楽院の院長であるアレクサンドル・グラズノフの協力を得ると、少年の父親を同じクラスに学生として迎え、ハイフェッツ一家がサンクト・ペテルブルクに在留できるように書類の体裁を整えた。

サンクト・ペテルブルクからニューヨークへ

ハイフェッツはすぐにアウアーの「直弟子」となり、それは一九一六年まで続いた。一九一二年、二万五千人の前で演奏して喝采を浴び、その翌年にはベルリンで、アルトゥール・ニキシュ指揮によるチャイコフスキーの《ヴァイオリン協奏曲》を特別に集められたヴァイオリニストたちが座る前で演奏してデビュー。この演奏を聴いていたフリッツ・クライスラーが他の有名ヴァイオリニストたちを振り返り、「諸君、こうなるともう我々は自分たちのヴァイオリンを手にとって、膝でたたき割ってしまうしかなさそうだ」と言った。ライプツィヒとウィーンでの演奏会をおこなった頃に第一次世界大戦が勃発し、ハイフェッツ一家はサンクト・ペテルブルクに戻らざるを得なくなる。一九一六年、ヤツシャは夏期講習に向いていた師アウアーと合流。その翌年には家族と共に、シベリア、中国、日本、太平洋を渡ってアメリカ合衆国をめざすという危険な旅を決行する。

爆弾の効果

前述の一九一七年十月二十七日、ニューヨークでのハイフェッツ最初の演奏会は、爆弾並みの効果をおよぼした。その夜、全アメリカの二千マイル四方に住むヴァイオリニストたちが、若き天才の演奏を聴くために集まっていた。演奏曲目は最初がヴィターリの《シャコンヌ》、次いでヴィエニャフスキの《ヴァイオリン協奏曲第二番》(当時の慣例にしたがいピアノ伴奏だった)、そして六曲ほどのヴィ

ルトウオーソ的な小品、最後がパガニーニの《二十四のカプリース》というものだった。批評家たちは熱狂し、ミツシャ・エルマンが隣に座っていたピアノリストのレオポルド・ゴドフスキーのほうを向き、「今夜はやけに暑くないか」と話しかけ、「ピアノリストは平気さ」とゴドフスキーが答えたという、そんな伝説まで生まれたのだ。その夜の演奏でハイフェッツはあらゆる現役ヴァイオリニストを二流のレベルへと押しやった。ただ一人、クライスラーだけがその魅力によってハイフェッツと肩を並べるだけの人気を保ち、その竜巻から逃れることができた。翌年の音楽シーズンになると、ハイフェッツはこのニューヨークのカーネギー・ホールだけで少なくとも五回以上のリサイタルを開催している。

「毎晩せめて一つはまちがった音を出してください」

当時はハイフェッツの選曲があまりにヴィルトゥオーソに偏りすぎていると批判する向きもあったが、ハイフェッツはリサイタルのプログラムにブラームス、グリーグ、フランクといったソナタを入れることで批判をさっさと封じこめた。とはいえ、その超人的な技巧、高く構える姿勢、表情を変えない顔ゆえに、ハイフェッツといえれば冷たいと言われるまでになってしまったが、その評価は永遠についてまわる。一九二〇年、ハイフェッツはロンドンでのデビューを果たし、それを聴いたジョージ・バーナード・ショウが若きハイフェッツにこう書き送った。「超人的な演奏をすることで神に妬まれるというのであれば、あなたは若くして死ぬにちがいない。私としては、せめて夜の祈りを捧げる代わりに、毎晩せめて一つはまちがった音を出してから寝てくださいと、切に願うばかりです。い

かなる人間もあれほど完璧な演奏をするようには出来ていないはずなのですから」と。ハイフェッツはパリ、ベルリンで演奏し、次いでオーストリア、極東、パレスチナへとツアーに出た。一九二五年にアメリカの市民権を得て、一九二九年にフロレンス・ヴィダー——著名な映画監督キング・ヴィダーの元妻——と結婚し、二人の子をもうけた。

室内楽への情熱

ヤッシャ・ハイフェッツはごく若い頃から室内楽への情熱を表明し、一九三〇年代末にはエマヌエル・フォイアーマン、ウィリアム・プリムローズと有名な弦楽トリオを結成、さらに戦後、グレゴール・ピアティゴルスキー、アルトゥール・ルービンシュタインと組んだトリオは「百万ドルトリオ」と称された。一九四五年に離婚、その二年後にフランシス・スピルバーグと再婚して息子が生まれる。戦争中は多くの演奏会を戦地でおこない、戦争が終わるとソリストとしての活動を世界中で続けた。だが、ソ連に戻ることはなく、ナチスが台頭したドイツの地での演奏も拒絶した。一九五三年、イスラエルでのリサイタルでリヒャルト・シュトラウスの《ヴァイオリンソナタ》を演奏後、ナチスに加担した作曲家の曲を弾いたと観客の一人に糾弾され、ひどい暴力をふるわれた。

隠遁生活

一九六〇年代になると少しずつソリストとしての活動ペースをゆるめ、カリフォルニアに居を定めて南カリフォルニア大学で後進の指導にあたりると同時に、室内楽に力を入れるようになった。有名な「ハイフェッツ・ピアティゴルスキー演奏会」が数多くおこなわれた時代で、その録音も数多く残されている。その頃に教えた弟子のうち、エリック・フリードマン、ユージン・フォード、ピエール・アモイヤルが現在もその名をよく知られている。一九七〇年九月にパリで最後の演奏をし、一九七二年十月にロサンゼルスでドロシー・チャンドラー・パビリオンで最後の公開リサイタル（録音が残されてリリースされている）をおこなった。それから次第に隠遁生活へと移り、編曲を手がけ、友人たちとの室内楽、プライベートで数人の弟子に教えることに専念する。晩年は一人で暮らし、ごく親しい友と身内としか会わなくなった。一九八七年十二月十日、ロサンゼルスでシダース・シナイ・メディカルセンターで死去。享年八十六歳。

並外れた耳、運動神経、コーデイネーション

だが、ハイフェッツの演奏のどこが特別なのだろうか。同時代のヴァイオリニストの頂点にハイフェッツを押しあげたものはなんだったのか。まず挙げるべきは、気が遠くなるほど正確なイントネーションであろう。現在にいたるまで、同じレベルに到達した例は他に見あたらない。ハイフェツ

ツは特別な耳、驚異的なコーデイネーション、桁外れの運動神経の持ち主だった。音程の正確さを獲得するには、やはり日々の熱心な音階練習がものを言う。そして鉄の意志で、一生を通じてつねに最高をめざしていく勤勉さが欠かせない。ハイフェツは手首を高くした構えで弓を持ち、そのおかげで運弓は驚くべき力強さと柔軟性を発揮した。ほんのわずかが駒に近い位置で弾くことで、パワフルかつ最大限に張りのある響きを生み出す。それに加え、食いこむようなアタック、大胆なスタイル、無限の色によるパレット、自在なスピードで幅広いヴィブラート、つねに張りを失わない音、一瞬たりともとぎれない集中力。こうして考えていくと、多くのヴァイオリニストたちが目標としてきた理由も見えてくる。

膨大なレパートリー

その途方もないレパートリーには、いわゆる超絶技巧を聴かせる派手な曲が含まれていない。例えばバガニーニ、サン＝サーンス、ベルク、シエーンベルク（シエーンベルクはハイフェッツのために協奏曲を書いたと言われている）の《ヴァイオリン協奏曲》、バルトークのソナタ集や《ヴァイオリン協奏曲》、プロコフィエフの《ヴァイオリン協奏曲第一番》とソナタ集などはレコーディングしていない。だが、ハイフェッツはあえてこのような選択をおこない、その理由については明確に説明をしないまま世を去った。しかし二十世紀の曲は好んで弾いていた。ロージャ、カステルヌオーヴォ・テデスコ、コルンゴルト、ウォルトン、グルエンバーグ（協奏曲をハイフェッツに献呈した）の《ヴァイオリン協



使用楽器

カルロ・トノーニ (1736年)

トノーニは18世紀イタリアの製作者。この楽器でハイフェッツは1917年のアメリカデビューの演奏をおこない、亡くなるまで手元に置き、弟子であり助手であったシェリー・クロスに遺した。

ストラディヴァリ (1731年)「ピエル」

ストラディヴァリ (1714年)「ドルフィン」

1951年に売られた。

ストラディヴァリ (1715年)「ホッホスタイン」

ヨーゼフ・ヨアヒムとフリッツ・クライスラーの所有楽器だった。

ガルネリ・デル・ジェス (1742年)「ex-ダヴィッド」

ハイフェッツは1922年に購入。そのキャリアの大部分においてこの楽器を弾いた。フェルディナンド・ダヴィッドとアウグスト・ウィルヘルミの所有楽器だった。ファンの一人在このガルネリのゴージャスな響きを称賛したところ、ハイフェッツは耳をヴァイオリンに近づけて「何も聞こえないか？」と答えた。ハイフェッツの遺言により、サンフランシスコ美術館に寄贈された。



CD-ROM

[No.20] トマソ・アントニオ・ヴィターリ：シャコンヌ (レスピーギ編曲)

リチャード・エルサツァー (オルガン) / 1950年8月4日録音 / RCA LM 2074 / 再収録 RCA 61 755 / (9'38)

このトマソ・アントニオ・ヴィターリによる《シャコンヌ》こそ、若きヤツシャ・ハイフェッツが1917年10月27日、ニューヨークのカーネギー・ホールでの初リサイタルにて最初に弾いた曲である。録音は一回だけ、1950年におこった。

奏曲》を初演し、広めたことから明らかだが、同じ現代作曲家のなかでも真に偉大な人から作品を献じられなかったことを、ハイフェッツは悔やんでいたのだろうか。編曲者としてのハイフェッツは大変な多作で、少なくとも百五十のヴァイオリンのための編曲を残している。そのうち自分で録音したものが約六十曲ある。クライスラーの曲と同じく、ハイフェッツの編曲作品の相当数が、いまでも偉大なソリストたちによって演奏されている。

おそらくは本人が意図したことだろうが、ハイフェッツの人となりについては、この先も解き明かされることはなく、人々の記憶も風化していくだろう。だが、ヴァイオリニストとして残した影響は今後の数世紀もその輝きを失うことはあるまい。ハイフェッツがこの世にいれば、ヴァイオリンという楽器の演奏がいまのような完璧なレベルに達することはなかったはずだ。

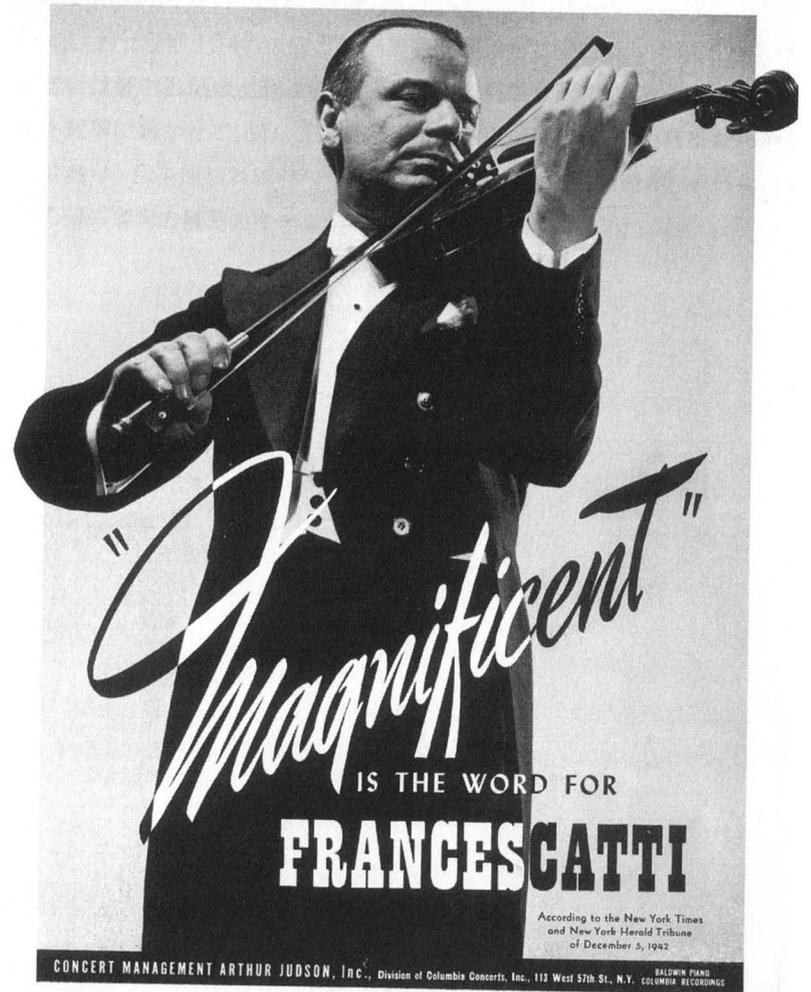
[No.21] コルンゴルト：ヴァイオリン協奏曲 二長調 Op.35 第1楽章

ロサンゼルス・フィルハーモニー管弦楽団（アルフレッド・ウォーレン
スタイン指揮）／1953年1月10日録音／RCA LM 1782／再収録
RCA 09026 61752／（7'47）

ハイフェッツは1947年にこの協奏曲を初演し、作曲者が望んだとおり、
ときには狂おしいほどセンチメンタル、ときには滑稽にと、狂詩曲風の解
釈を見事に聴かせている。おもな主題は1930年代末の映画音楽から取ら
れており、目を閉じればハリウッド映画のスターたちの姿が、それもこち
らの望み次第の最高のキャスティングで浮かんでくる。

Zino Francescatti

(1902-1991)



ジノ・フランチェスカッティ

パガニーニの継承者

第一次世界大戦後、フランス楽派のヴァイオリンは次第にその影響力を失っていく。フランスならではのエレガンスや魅力や洗練は、ロシアの覇気、力強さ、艶やかさの前に霞んでしまった。ただ一人、ジャック・ティボーだけがフランスの伝統を受け継いで気を吐いていたが、そこに負けじとジノ・フランチェスカッティが参入していく。

ルネ・シャルル(ジノ)・フランチェスカッティは一九〇二年八月九日、マルセイユでイタリアのヴェローナ出身の父と、フランス人の母のあいだに生まれた。両親は二人ともヴァイオリニストであり、息子は両親以外の教師につくことはなかった。二十世紀の偉大なヴァイオリニストのなかでも他に例を見ないケースだ。ジノは五歳で父から初めてヴァイオリンの手ほどきを受けた。この父親はマルセイユ交響楽団のヴァイオリン首席奏者であり、ミラノでアントニオ・バッジニに師事し、それだけではなくパガニーニの唯一の弟子であるカミッロ・シヴォリの薫陶を受けている。父による指導は密度が濃く、ときには厳しいものだったが、そのおかげでジノ少年はイザイやクライスラーやティボーを手本にしてめきめきと上達し、十歳でベートーヴェンの《ヴァイオリン協奏曲》を弾きこなすほど

の腕前となる。十五歳でヴィエニャフスキの《ヴァイオリン協奏曲第二番》とバッハの《シャコンヌ》を弾いて故郷マルセイユでデビューしたが、コンクールには一度も出場しなかった。その後もマルセイユで学び続け、一九二五年にパリのパレ・ガルニエ（オペラ座）でパガニーニの《ヴァイオリン協奏曲第一番》を演奏。この曲はフランチェスカッティのレパートリーでも特に人気のあるものとなった。演奏を聴いたジャック・ティボーからは将来有望だと励まされた。翌年、フランチェスカッティはモリス・ラヴェルのイギリス公演に随行する契約を結び、ツアー中にラヴェルの《ツイガース》を多くの都市で初演。次いで生活のために当時のパリで屈指のオーケストラ、ワルター・ストララム管弦楽団に入り、幾度かはソリストとしてモーツアルトの《協奏交響曲》などの協奏曲を弾いた。並行して一九二七年から一九二九年まで、エコール・ノルマル音楽院の教授を務めた。少しずつヨーロッパで、次いで南アメリカでも人気に火が付き、一九三八年にブエノスアイレスのテアトロ・コロンでは華々しい成功を収め、大勢のファンに押しつぶされないように警官が護衛につくほどだった。

アメリカで認められる

一九三九年十一月、ニューヨーク・フィルハーモニー管弦楽団との共演、アメリカでデビューを果たし、フランスのヴァイオリニストのトップ（すでにティボーは全盛期を過ぎていたという見方もあった）というだけではなく、世界最高峰の奏者と認められた。そのままアメリカに定住し、その演奏活動と録音のほとんどをアメリカでおこなう。一九四六年にコロンビアと契約を結び、二十五年以上

にわたって独占的にレコーディングした。一九七五年、控えめで温厚、そして謙遜という美德を兼ね備えたフランチェスカッティは、まだ腕前が衰えるには程遠かったのに現役活動から身を引くことを決意。生まれ育った南仏での隠居生活に入り、一九九一年九月十六日に世を去るまで、チェス、切手蒐集、ガーデニング、そして数人の弟子を無償で指導することに情熱を注ぎ、平穏な暮らしを送った。一九八七年、自分の名を冠した国際コンクールを創設し、一九四二年に購入していた一七二七年製のストラディヴァリ「ハート」を手放してその運営資金を作った。

ジノ・フランチェスカッティのレパートリーには、プロコフィエフ、ウォルトン、ストラヴィンスキー、ヒンデミット、バーンスタインなど、多くの二十世紀の曲が含まれた。フランチェスカッティはシマノフスキの《ヴァイオリン協奏曲第二番》とレスピーギの《グレゴリオ聖歌風協奏曲》のパリ初演をおこない、フィラデルフィアでダリウス・ミヨーの《イギリス組曲》を、ニューヨークでロベール・カサドシュが彼に献呈した《ソナタ》を初演した。作曲家として数曲、ヴァイオリン用の編曲も数多く残している。

燦々とした響き

フランチェスカッティの最後のコンサート録音は一九七五年だが、公式ディスコグラフィでは録音時期は一九二二年から一九七一年となっている。百二十曲におよぶ内容は幅広い。近い規模のレパートリーの持ち主はミルシテインだが、三百曲を越すレパートリーを誇ったハイフェッツ、オイ

使用楽器

ストラディヴァリ (1727年)

「ハート」は、現在はサルヴァトーレ・アッカルドの所有楽器。

アンドレーア・グアルネリ

サンクトゥス・セラフィンは、セザール・トムソンの所有楽器だったが、現在はガエタヌ・ブルヴォーの使用楽器。

スカランペツラ

CD-ROM

[No.22] バガニーニ：ヴァイオリン協奏曲 第1番 二長調 Op.6 第1楽章

フィラデルフィア管弦楽団 (ユージン・オーマンディ指揮) / 1950年
1月15日録音 / コロンビア ML 4315 / 再収録 CBS MPK 46728 /
(15'57)

バガニーニの伝統を継承する演奏であり、フランチェスカッティを有名にした録音の一つ。率直な表現、ヴィルトゥオーソ、多彩な抒情性で、この有名な《協奏曲》の燃えあがる炎と澆刺とした勢いを見事に聴かせてくれる。カデンツァはセヴシツク作。

[No.23] ラヴェル：ヴァイオリンソナタ ト長調 第2楽章

アーサー・バルサム (ピアノ) / 1955年1月11日録音 / コロンビア
ML 5058 / 再収録ソニー SM2K 61722 / (5'35)

洗練された奏法、日光を思わせる響き、思い切りの良いヴィブラート。これぞフランチェスカッティのスタイルの特徴であり、甘美な味わいにて咲き誇る花といった風情だ。弾き手は旋律線をくまなく、どこまでも美しく歌おうとしている。いまや伝説となったシンプルな表現と、持って生まれた「ベルカント」のセンスがうかがわれる。

ストラフ、メニューインに比べれば控えめだ。最初のアコースティック録音をHMVでおこない、次いで一九二八年に初の電気録音をおこなう。一九三〇年代初頭から長らくレコーディングの空白期間が続く、一九四六年にようやく録音したのはアンドレ・クリュイタンス指揮の《スペイン交響曲》で、これは彼にとつて初めてオーケストラと共演したレコードだ。その同じ年、ピアニストのロベール・カサドシュとの最初の録音をした。二人の奏者のコラボレートはそれから三十年のあいだ続き、一九七二年にカサドシュが死去するまで音楽史でもまれな万能のデュオとして活躍した。

優雅で洗練された奏法、陽光を思わせる響き、思い切りの良いヴィブラート。それらはつねにフランチェスカッティの人柄をそのまま映し出した特徴で、その音色を耳にすれば即座に誰が演奏しているかがわかるほどで、フランス音楽において得も言われぬ魅力を発揮した。録音した二十ほどの協奏曲のうち、おそらくバガニーニの《第一番》とサン＝サーンスの《第三番》が世界的に最大の成功を収めたものである。熱情、素直さ、官能といったような彼のきわめてイタリア風の特徴を前面に出し、そこにまばゆい輝きの音色をのせた上で、自由自在の変化に富んだボーイングと、伸びやかだが溺れないレガートを存分に操っている。演奏会での評は多くないが、それでも一九七五年のニューヨークでの最後のコンサートของときまで、フランチェスカッティが録音と同じだけの熱情、気品、激しさ、慈しみを楽器を歌わせており、現代ヴァイオリンにおけるボーイングの名手ならではのフレーズの瑞々しさを証明するものばかりである。

Nathan Milstein

(1903-1992)

M I L S T E I N



ナタン・ミルシテイン

神童でもなく努力家でもなく

ナタン・ミルシテインはオデッサでユダヤ人一家の七人兄弟の四番めの子として生まれた。生年を一九〇四年とする伝記が多いがそれは誤りで、正確には一九〇三年十二月三十一日である。異説が生じたのは、一九二五年にロシアから出国する許可を得るために一歳若く申告しなくてはならなかったからだろうと、ミルシテイン自身が自叙伝に記している。

子どもの頃のナタンはごく当たり前の元気のいい少年で、神童でもなければ努力家でもなく、勉強や音楽よりもサッカーに夢中だった。地元の教師のもとで無難に教育を受けたのち、ナタンは真の師匠と呼ぶべき人物と出会う。オデッサの高名な教育者ピョートル・ストリヤルスキーであるが、ストリヤルスキーはダヴィッド・オイストラフの師でもあった。ミルシテイン本人は自分は決して神童ではなかったと言っているが、十歳でグラズノフの《ヴァイオリン協奏曲》を作曲家本人の指揮で弾くだけの腕はあった。一九一六年、サンクト・ペテルブルクに連れていかれ、当時のロシアで卓越した名教師、レオポルト・アウアーに引きあわされた。これが人生の分岐点となり、このときを境に「自分は真の意味でヴァイオリンを愛するようになった」とミルシテインは述べている。レッスンスクの仲間には、ヤツシヤ・ハイフェッツ、トーシヤ・サイデル、マイロン・ポリアキンがいた。アウアーの

要求は恐るべきレベルで、ミルシテインの記憶にいつまでも残るものとなった。生徒たちは緊迫した対抗意識に支配され、この教育によって、ミルシテインの競争心に火がついた。

三銃士

一九一八年にアウアーがアメリカへと旅立つと、ミルシテインはオデッサに戻り、生きていくため最低限の生活費をかるうじて稼ぎながら、革命による窮乏と恐怖を生きのびた。一九二一年、ウラジミール・ホロヴィッツと知りあい、変わらぬ深い友情で結ばれる。この二人のヴィルトウオーソは共にソ連で数多くの演奏旅行をおこなう。一九二三年、ミルシテインはプロコフィエフの《ヴァイオリン協奏曲第一番》——パリでマルセル・ダリユーによる世界初演がおこなわれたわずか数日後のことだ——とシマノフスキの《ヴァイオリン協奏曲第一番》のモスクワでの初演奏をホロヴィッツのピアノ伴奏でおこなった。二人は一九二五年、共に祖国をあとにする。だが、ミルシテインはホロヴィッツと違い、二度とこの国に戻らなかった。ミルシテインは数年のあいだヨーロッパ、特にパリにとどまり、ホロヴィッツに加えてもう一人の亡命の仲間であるチェリスト、グレゴール・ピアティゴルスキーでトリオ「三銃士」を結成したが、残念なことにこのトリオの録音はいつさい存在しない。

ヴァイオリンで奇跡をおこなう能力

一九二六年、ウジェーヌ・イザイのレッスンを受ける。ミルシテインいわく「感じよく扱ってもらったものの、ほとんど何も学ぶことはなかった」音楽を演奏するなら「強すぎず、速すぎず」でなければいけないと、それしか言われなかった。ミルシテインは一九二九年十月二十八日、フィラデルフィアでレオポルト・ストコフスキー指揮によるグラズノフの《ヴァイオリン協奏曲》でアメリカ・デビューを果たす。一九三四年、ミルシテインはアメリカに定住し、一九四二年にアメリカの市民権を得る。ロシア出身のヴァイオリニストとしてアメリカに活動の場を広げてキャリアを積んでいく最初の人物となり、ハイフェッツが一九一七年に登場して多くの才能ある同業者を震ませてしまった例の「現象」にも負けず、しっかりと自分の存在を主張していく。ミルシテインこそ心を震わせる音楽家であり、完璧な美的感覚で音楽を創りあげ、ヴァイオリンで奇跡をおこなう能力に恵まれていると、世界中で批評家から讃えられる。評判どおり、ミルシテインの歌心の表現は清澄をきわめ、奏法はストレートにして柔軟、男性的な華やかさ、余計なものを削ぎ落とした音楽性、自然なヴィルトウオーソを兼ね備えていた。ジョセフ・フックスはミルシテイン死去の翌日、ナタンがかなり高齢になってもヴァイオリンを見事に弾き続けることができたのは「あの楽器の構え方、力むことが決してなく、筋肉に無理な負担や緊張をいっさいかけない、どこまでも自然な奏法」によるものだとニューヨーク・タイムズ紙に寄稿した。その点について付記するなら、ミルシテインは想像を絶する技巧の持ち主であり、その生涯にわたってつねに練習を続け、絶え間ない実験によって新たな指使いやボーイングを

探し続けていた。

音楽に対して貪欲

戦後、ミルシテインはロンドンに戻り、死去するまでの二十五年間をロンドンで暮らした。飛行機での旅を嫌ったことは伝説になっているが、世界中で演奏活動をおこない、舞台のキャリアは七十年以上におよぶ。体力的に大変きつい職業でもあるヴァイオリニストとしては異例のことだ。アメリカとヨーロッパで後進の指導にあたり、特にシエナとチューリッヒでの成果が知られている。本人の言葉を借りるならば、生涯「音楽に対して貪欲」であり続けた。ロシアの少年時代からすでにヴァイオリンのレパートリーだけでは物足りない、管弦楽やピアノの曲を貪るように学んでいた。「実験およびテクニクを磨きたいから」と、シヨパンの《二十四の前奏曲》をヴァイオリンのために編曲した。いまでもシヨパンの《夜想曲第二十番》やリストの《コンソレーション第三番》《メフィスト・ワルツ》の編曲は、有名なレパートリーとして残っている。そういった編曲の他にオリジナルの曲も幾つか書いている。例えば《パガニーニアーナ》という曲はジェノヴァの巨匠パガニーニへのオマージュであり、あの有名な《二十四のカプリース》の主題によって書かれたものだ。さらにブラームスとベートーヴェンの《ヴァイオリン協奏曲》のカデンツァも残されている。

バッハとの長いラブストーリー

ナタン・ミルシテインのレパートリーはコレッリからストラヴィンスキーまでと幅広いが、彼が特に愛した百曲あまりへの集中は注目に値する。ミルシテインのJ・S・バッハへの愛は早咲きで、流行とは無縁の場所、いまのようなバロックの波が来るよりずっと前の時代にまで遡る。「レオポルド・アウアーはバッハを好まなかった。好きではないと口にする以上のことは知りたくもなかったのだから、彼がバッハについて何か言うことはほとんどなかった。私は独力で本能を頼りにバッハの音楽と向きあった。そこから最大限に学ぼうと試み、ヴァイオリンで《平均律クラヴィーア曲集》を弾いてみることにさえた。《無伴奏ヴァイオリンのためのソナタとパルティータ》は、私の人生において、素晴らしい光をいっばいに浴びる機会を与えてくれた」と、ミルシテインは自叙伝で述べている。

バッハとミルシテインのあいだの長いラブストーリーは、一九三〇年に始まるミルシテインのディスクグラフィイーに華麗な花をふんだんに咲かせた。なかでも、バッハ《無伴奏ヴァイオリン》全曲集は初回が一九五五年〜一九五六年(Capitol-EMI)、次が一九七四年(ドイツ・グラモフォン)と、二回にわたって録音されている。つねにレパートリーに入っていたのは、ジェミニアーニ、ペルゴレーシ、コレッリ、ナルデイーニだった。時代に先がけてバロックを手がけ、バロックの曲を弾くときには奏法を純化させ、夾雑物を削ぎ落とし、瑞々しくシンブルな音楽にした。激烈、典雅、明晰。それらの完璧な混合によって、ミルシテインは特に有名な《ヴァイオリン協奏曲》を続けて数回ずつ録音したが、なかには音盤史において重要な位置を占めるものも含まれている。二十世紀の作品はごくわずかしが

使用楽器

ストラディヴァリ (1716年)

「ex-ゴールドマン」は、ミルシテインが自分の妻と娘の名である「マリア＝テレサ」という名前に変更した。

ストラディヴァリ (1703年)「ダンクラ」

シャルル・ダンクラの所有楽器だった。

ストラディヴァリ (1710年)「ダンクラ」

シャルル・ダンクラとルイス・クラスナーの所有楽器で、のちに江藤俊哉の所有となった。

ストラディヴァリ (1719年)「モナステリオ」

ルツジェーロ・リッチの所有楽器でもあった。

著作

『ロシアから西側へ』(ブシェ/シャステル社、1991年、パリ)

CD-ROM

[No.24] J. S. バッハ：無伴奏ヴァイオリンのためのパルティータ 第3番
ホ長調 BWV1006 第1楽章

1956年3月録音/キャピトル PCR 8370 /再収録EMI ZCMB 64793
23 / (3'10)

無伴奏ヴァイオリンのためのソナタとパルティータ全六曲はすべてのヴァイオリニストにとっての枕頭の書であり、レパートリーの頂点の一つである。ナタン・ミルシテインはこの曲集の計り知れない精神性と奥深さに挑んだ最初の奏者の一人であり、生涯にわたってこの曲集を演奏し、絶え間なく自然で清澄な絶対の境地を摸索し続けた。この音源は彼が最初におこなった全曲録音の抜粋で、技術的にも成熟の度合いからもすでに最高のレベルに達していることがうかがえる。フリッツ・クライスラーが彼のことを「理想のヴァイオリニスト」と言ったそうだ。

並外れた長寿

演奏しなかったが、プロコフィエフの二つの《ヴァイオリン協奏曲》の録音は抒情性と強靱さが美しい。デイスコグラフィイにはいかなる三重奏、四重奏、五重奏も含まれていないが、ベートーヴェンとモーツァルトのソナタの録音は何曲か残されており、ウラジミール・ホロヴィッツとの伝説的なデュオによるブラームスの《ヴァイオリンソナタ第三番》を忘れてはならない。

一九九二年十二月二十一日、世紀初頭生まれの最後のヴァイオリンの聖なる怪物はロンドンで没した。あと数日で八十九歳の誕生日を迎えるはずであった。並外れた長寿というだけではなく、八十四歳でも変わらぬ瑞々しき、活気、完璧さ、エレガンスでヴァイオリンを弾いてみせ、その年齢で二十世紀の奏者としてトップクラスの巧みな弓使いを披露した。ヴァイオリニストとしてきわめてまれなことだ。

MAISON GAVEAU - Salle des Concerts
45-47, RUE LA BOËTIE

Judi 8 Décembre 1938, à 21 heures
(ouverture des portes à 20 h. 30)

UNIQUE RÉCITAL

avant le départ pour la dixième tournée aux Etats-Unis

donné par

MILSTEIN

Au piano Gaveau : Artur BALSAM

AU PROGRAMME : Sonate "Le Trille du Diable" - Tartini
Sonate sol mineur (pour violon seul) - **Bach**, Sonate
ré mineur - **Brahms**, Deux caprices N° 16 et 17 et
le Concerto ré majeur de **Paganini**.

DISQUES : COLUMBIA

PRIX DES PLACES : DE 10 A 50 FRANCS

Location : Salles Gaveau, Pleyel, chez Durand, 4, place de la Madeleine, Rouart-
Lerolle, 40, boulevard Malesherbes. Max Eschig, 48, Rue de Rome et dans
toutes les Agences.

OFFICE THÉÂTRAL EUROPÉEN "O. T. E."
16, Rue de Gramont, PARIS - Téléph. : Richelieu 80-62

[No.25] ゴルトマルク：ヴァイオリン協奏曲 第1番 イ短調 Op.28

第1楽章

フィルハーモニア管弦楽団 (ハリー・ブリーチ指揮) / 1957年六月録音
/ キャピトル SP 8414 / 再収録テストメント SBT 1047 / (14'04)

ミルシテインはこの熱きロマンティシズムとセンシビリティに満ちた曲を好み、情熱をこめて演奏した。クリスタルの響きと繊細なヴィルトゥオーソ。とぎれることのない瑞々しさは、天才ならではの冴えと呼びたい。このロシアの巨匠の録音のなかでも特に価値ある曲である。

Erica Morini

(1904-1995)



エリカ・モリーニ

ボーイングのプリンセス

一九九五年に死去したエリカ・モリーニは、神童であった音楽家グループ——ジョージ・セルやルドルフ・ゼルキンが列に加わる——の最後の生き残りであり、オーストリア＝ハンガリー帝国の末期を生きた世代に属する一人でもあった。

一九〇四年一月五日にトリエステ（ウィーンではなく）で生まれた。父のオスカーは音楽学校を経営し、彼自身もヤーコプ・グリユーンとヨーゼフ・ヨアヒムのもとで学んだ素晴らしいヴァイオリニストだった。父は娘にまずバレエを習わせ、次いで七歳でヴァイオリン演奏の手ほどきをした。エリカはウィーン音楽院に初めて入学を許された女子となる。ローザ・ホーホマン＝ローゼンフェルト、そして父の師であったグリユーンその人に師事。同じ頃にアドルフ・ブッシュのレッスンを受け、グリユーンの死後はオタカール・セヴシツクについた。一九一六年にウィーンで華やかにデビューし、一九一八年にはベルリンでアルトゥール・ニキシュ指揮でデビューを飾った。

一九二一年、ニューヨークのメトロポリタンで演奏。翌年、ニューヨーク・フィルハーモニー管弦楽団との共演でカーネギー・ホールで演奏する。その後、彼女のカーネギー・ホールへの出演回数は五十六回を数える。一九二〇年代に、最初はニューヨークのピクチャーで、それからベルリンのポリ

使用楽器

ストラディヴァリ (1727年)「ダヴィドフ」

いまだに見つかっていない。

CD-ROM

[No.26] ヴィエニャフスキ：カプリッチョ・ワルツ ホ長調 Op.7

マックス・ランナー (ピアノ) / 1941年11月7日録音/ビクター 11-8761 A / 再収録Biddulph 80168 / (4'22)

歓喜にあふれ、モリーニならではの「古きヨーロッパ」の香りたよう演奏スタイルは、シャンパンの泡がはじけるようなこの曲「カプリッチョ・ワルツ」にぴったりだ。

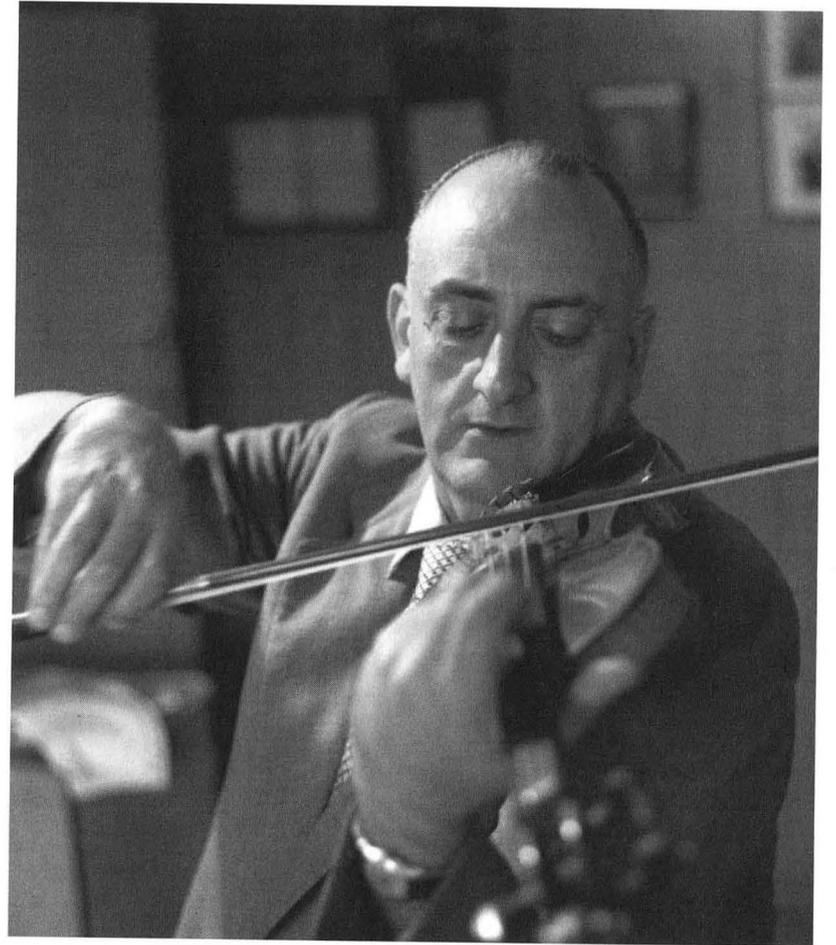
ドールとエレクトローラで、七十八回転のSPレコードの録音を幾つかリリースする。

一九三〇年代はおもにイギリスで演奏活動をおこない、一九三八年のオーストリア併合後、アメリカへ移住して一九四三年にはアメリカの市民権を得る。その演奏スタイルは「古きヨーロッパ風」であり、その頃のアメリカでは「ロシア風」のスタイルが勢力をふるうようになっていたが、彼女の魅力と、魅惑的な人柄をそのまま映したような音楽性によって、モリーニは充実の演奏活動を続けた。第二次世界大戦中、RCAピクチャーでチャイコフスキーの《ヴァイオリン協奏曲》(一九四五年)を録音した。室内楽の活動にも積極的で、ジョゼフ・ギンゴールド、ミルトン・ケイティムス、フランク・ミラーと弦楽四重奏団を結成。戦後すぐに、モリーニはふたたびヨーロッパで演奏するようになり、一九五一年のベルビニオン音楽祭ではパブロ・カザルス指揮によるモーツアルトの《ヴァイオリン協奏曲第五番》を演奏、および録音した。さらにルドルフ・フィルクスニーとデュオを組み、モーツアルト、ベートーヴェン、フランク、ブラームスのソナタ集(米デッカ)をリリースした。六〇年代末には演奏活動を半分のペースに抑えたが、一九七六年、この「ボーイングのプリンセス」はニューヨークでのデビュー五十五周年という節目に最後の演奏会を開催した。一九九五年十一月一日にニューヨークで死去。愛器ストラディヴァリの盗難にあつて数週間後のことだった。

エリカ・モリーニは作品数にして百曲ほどのディスクグラフィイーを残した。内訳を見るとヴィルトゥオーソ曲が多いが、ナタン・ミルシテインとの共演によるJ・S・バッハの《二つのヴァイオリンのための協奏曲》、ヴィヴァルディの《二つのヴァイオリンのための協奏曲》といった本格的協奏曲も含まれている。

Alfredo Campoli

(1906-1991)



アルフレード・カンポーリ

ベルカントの名手

変わった経歴の持ち主である。長いこと軽音楽に身を捧げたのち、少年期の決意をひるがえして本格クラシックのレパートリーに取り組み、成功を収めた。

師は父だけ

アルフレード・カンポーリは一九〇六年十月二十日にローマで生まれた。父ロメオは聖チェチーリア音楽院のヴァイオリン教師だった。母のエルヴィラ・チェリはカルーソーのパートナー役を歌ったソプラノ歌手で、イタリアの偉大な歌手の録音をヴァイオリンで真似てごらんと息子を導いた。一九一一年、カンポーリ一家はロンドンに移住し、ロメオとエルヴィラは音楽学校を開校した。アルフレードは四歳で父にヴァイオリンの手ほどきを受け、その後も一生を通じて父以外の師を持たなかった。十二歳の誕生日には優秀な成績で音楽学校を卒業する。一九一九年、ロンドン音楽祭でメンデルスゾーンの《ヴァイオリン協奏曲》を演奏して金メダルを授与された。イギリス国籍を取得し、一九二三年五月十八日にウイグモア・ホールでロンドン・デビューを果たす。が、若きヴィルトゥオー

ソは父の意志に逆らい、「サロン音楽」をやりたいと言いだした。かくして二度の大戦のあいだ、アルフレードはロンドンの一流ホテルのサロンで幾つもの軽音楽の楽団と演奏した。その楽団には、カンポリー本人が結成した「サロン・オーケストラ」、カンポリーがリーダーを務めるレイモンド楽団、弦楽四重奏団「ウエルベック・ライト」などが含まれた。その人気たるや大変なもので、彼が録音したSPレコードには数十万枚の単位で売れた物も少なくない。だからといってカンポリーが「真面目」なレパートリーを捨て去ったわけではなく、ステージでは本格クラシックの協奏曲を弾いていたのだ。一九三八年、初めて「プロムナード・コンサート（プロムス）」に出演してバガニーニの《ヴァイオリン協奏曲ニ長調》を弾き、ロンドンのロイヤル・アルバート・ホール史上に残る熱狂的なスタンディング・オベーションによる大喝采を博した。

転機

終戦からまもなく、カンポリーは関係する楽団を解散して軽音楽から身を引き、クラシック音楽のレパートリーに向きあおうと決心した。そして右がりの大成功を収めた。一九四八年にロイヤル・アルバート・ホールでベートーヴェンの《ヴァイオリン協奏曲》を、そして同じ年にウォルトンの《ヴァイオリン協奏曲》を演奏。一九五三年にはジョージ・セル指揮でニューヨークのカーネギー・ホールでデビューを飾る。それをきっかけに、世界中で演奏するようになり、ソ連、オーストラリア、ニュージーランドを訪れた。コロムビア、HMV、とりわけデッカで数百におよぶ録音をおこない、あらゆ

るヴァイオリン曲に取り組んだ。注目すべきはエルガー、ブルッフ、メンデルスゾーンの《ヴァイオリン協奏曲》、ラロの《スペイン交響曲》、そして数多くのヴィルトウオーソ小品集、複数のクライスラーのリサイタル・アルバムであろう。魅力たっぷりなユーモアのセンス抜群だったカンポリーは、一九八五年に舞台と別れを告げ、一九九一年三月二十七日、ロンドンのブリッジ・クラブで心臓発作を起こして死亡。

カンポリーはサー・アーサー・ブリスから献呈された《ヴァイオリン協奏曲》を一九五五年に初演している。



使用楽器

ストラディヴァリ (1700年)

ストラディヴァリ (1702年)「カンポーリ」

ストラディヴァリ (1706年)「ドラゴネッティ」

のちにフランク・ペーター・ツィンマーマンの使用楽器となった。



CD-ROM

[No.27] アントニオ・バッジーニ：妖精の踊り Op.25

エリック・グリットン(ピアノ) / 1947年4月19日録音 / テッカ K
1799 / 再収録 ダットン CDBP 9718 / (3'58)

空気のように軽やかなボーイングは、二十世紀における独創的な才能のきら
みと言えよう。

David Oistrakh

(1908-1974)



アメリカ・デビューの頃のダヴィッド・オイストラフ。

ダヴィッド・オイストラフ

ダヴィデ王

音楽的スケール、圧倒的なコントロール、たぐいまれな人間性。そのすべてによって、ダヴィッド・オイストラフは四十年にわたってソヴィエトのヴァイオリン王として君臨した。国際的な演奏活動を開始してから四半世紀とかならないうちに、オイストラフは西側諸国でも二十世紀のもっとも偉大な演奏家の一人と認められるようになる。実際には、彼がソヴィエトの壁から定期的に外へ出る許可を得たのは一九五〇年代初頭のこと、その後、本人の意志に反して祖国を代表する親善使節と見なされるようになった。プロコフィエフやショスタコーヴィチといった同時代のソヴィエトの作曲家と固い友情で結ばれ、彼らがヴァイオリンのために作曲した最高傑作の数々を初演した。卓越したヴァイルトゥオーソにして洗練された室内楽奏者、ヴァイオラ奏者としての才能にも恵まれ、傑出した教育者、尊敬される指揮者で、存命中からすでに巨人であった。その驚異的な高貴さと伝説的な善良さから「ダヴィデ王」とあだ名される。

ストリヤルスキーを唯一の師として

ダヴィッド(ダヴィート)・フョードロヴィチ・オイストラフは一九〇八年九月三十日にオデッサの貧しい家庭に生まれた。父の本名はコルケルといったが、コルケルはアマチュアのヴァイオリン弾きで育ての親でもあった義父フョードル・ダヴィドヴィチ・オイストラフの名を名乗っていた。ダヴィッドの母は合唱団の歌手で、若き「ドダイク」を歌劇場へよく連れていった。ダヴィッドは三歳半で最初の小さなヴァイオリンを与えられ、五歳頃に本格的な勉強を始めた。一九一四年から、ピョートル・ストリヤルスキーのもとで学ぶようになる。門下にはナタン・ミルシテインを始めとする才能が集まっていた。持つて生まれた才能を開花させつつ、少年は一九二三年にオデッサ音楽院へ入学し、彼にとつて唯一の師となるストリヤルスキーとの勉強を続けた。その同じ年、オーケストラとの最初の共演をおこなう。演奏したのはJ・S・バッハの《ヴァイオリン協奏曲イ短調》だった。翌年には最初のリサイタルを開催。一九二六年、ヴァイオリンとヴィオラで音楽学校を卒業。数ヶ月後、グラズノフの《ヴァイオリン協奏曲》を作曲家本人の指揮で演奏した。一九二七年にプロコフィエフと知りあい、友情で強く結ばれるようになる。一九二八年十月、指揮者ニコライ・マルコにレニングラードへ招かれ、フィルハーモニー管弦楽団とチャイコフスキーの《ヴァイオリン協奏曲》を演奏。そのままモスクワへ移り住み、苦しい時代を経験する。ポリシヨイ管弦楽団でヴァイオリンを弾く話を断つて、ソリストとしての活動に専念した。

イザイ・コンクールの覇者

一九三四年にダヴィッド・オイストラフはモスクワ音楽院の助手となり、その翌年にはレニングラードの国内コンクールで優勝。審査員にはマイロン・ポリアキン、ピョートル・ストリヤルスキー、アラム・ハチャトリアンが名を連ねていた。同じ年、ワルシャワでおこなわれた第一回ヴィエニャフスキ・コンクールに出場する。ジネット・ヌヴーが優勝し、彼は第二位となった。それをきっかけに西側諸国で名前を知られるようになり、オイストラフはピアノリストのレフ・オポーリンと共にウィーン、ブダペスト、イスタンブールで演奏した。一九三六年、モスクワでジャック・テイボーと出会い、その趣味の良さとエレガンスに魅了される。翌年、第一回イザイ・コンクール(このコンクールはのちにベルギーのエリザベート王妃コンクールとなる)でリカルド・オドノポソフと優勝を争い、第一位を制した。ジャック・テイボー、ヨーゼフ・シゲティ、カール・フレッシュユ、ゲオルク・クレーンカンフ、イエネー・フバイといった審査員が、若きオイストラフを称賛した。一九三〇年代末のヨーロッパは政情不安から激動の時代を迎え、そのために国際的なキャリアは順調とはいかなくなる。が、イザイ・コンクールの優勝により、ソ連においては同世代でトップのヴァイオリニストと認められた。一九三八年にはモスクワ音楽院のヴァイオリン教授に就任、同じ年にミヤスコフスキの《ヴァイオリン協奏曲》を初演し、二年後にはハチャトリヤンの《ヴァイオリン協奏曲》(一九四〇年)を初演した。プロコフィエフはオイストラフに《ヴァイオリンソナタ第一番》を献呈し、その数年後にはオイストラフの委嘱により自作の《フルートソナタ》をヴァイオリン用に編曲した。戦争中、オイストラフは何

度も戦地で慰問コンサートをおこない、包囲下のレニングラード市内でも演奏し、その功績を認められて一九四二年にスターリン国家賞を授与された。

待ち望んでいた国際的な評価

ごく若い頃から師ストリヤルスキーの影響で室内楽への興味を抱いていたオイストラフは、一九四一年、ソナタ演奏のパートナーであるピアノリストのレフ・オポーリン、チェリストのスピヤトスラフ・クヌシェヴィツキーとトリオを結成。このトリオは有名になり、彼らは多くのレコードを録音した。トリオに次いで、同じチェリスト、ヴィオラのミハエル・テリーアン、音楽院でオイストラフの助手を務めていたピョートル・ボンダレンコとで、みずからの名を冠したオイストラフ弦楽四重奏団を結成した。戦争が落ちつくとオイストラフはブカレストでジョルジュ・エネスコと出会い、弟子ユーディ・メニューインと出会う。一九四六年、プラハの春音楽祭で大きな成功を収め、次いでモスクワへ戻ってプロコフィエフの《ヴァイオリンとピアノのためのソナタ第一番》を初演した。しかし、冷戦の緊張でまたしても国際的なキャリアの展開にブレーキがかかり、西側の聴衆がオイストラフの驚異的な才能を再発見するのは一九五〇年代になってからのことであった。一九五一年、オイストラフはフィレンツェ五月音楽祭に出演し、さらに西ドイツ（一九五二年）、フランス（一九五三年）、英国（一九五四年）で熱狂的な成功を収めた。一九五五年、ようやくアメリカでデビューを飾り、そこで出会ったアイザック・スターンと親しくなる。すぐに二人でヴィヴァルディの《二つのヴァイオリ

ンのための協奏曲》数曲を録音した。同年、ショスタコーヴィチがオイストラフのために書いた《ヴァイオリン協奏曲第一番》を初演（その十二年後にショスタコーヴィチはオイストラフに《ヴァイオリン協奏曲第二番》も献呈）した。一九五八年には国連の総会で演奏。そして同時代を生きる偉大なヴァイオリニストの最高峰であることが世界的に認められ、ソ連本国では浴びるほどの榮譽を与えられ、一九五三年に「人民芸術家」の称号が授与され、一九六〇年にはレーニン賞を受ける。一九六一年にパブロ・カザルスのプラド音楽祭に招かれた。

オイストラフはヴァイオリンとヴィオラを持ち替えながら、息子であるイーゴリ・オイストラフとの演奏会も定期的におこなった。親子のデュオは音楽の真の理解における規範と呼ぶべきもので、並ぶ者がいないほどの知名度を得た。

心が優しく、世界で愛され崇拜された

一九六二年、ダヴィッド・オイストラフは指揮者として公式なデビューを果たす。一九六七年になると最初の心臓発作に襲われ、活動の制限を余儀なくされた。それでも一九六七年にはスピヤトスラフ・リヒテルと歴史に残るデュオを結成し、このコンビで二年後にショスタコーヴィチの《ソナタ作品一三四》の披露演奏をおこなっている。

チェスの名手で、愛猫家であり、またカメラの蒐集家でもあることを本人が認めていた。

使用楽器

ストラディヴァリ (1736年)「ユスポヴ」

ロシア政府のコレクションに含まれる楽器で、1937年から1950年代初頭までダヴィッド・オイストラフによって演奏され、同様にレオニード・コーガンの使用楽器でもあった。

ストラディヴァリ (1702年)「フォンタナ伯」

1955年に購入され、次いでフランコ・グツリの使用楽器となった。

ストラディヴァリ (1705年)「マルシック」

1966年に購入された。マルタン・マルシックの使用楽器で、現在はイェゴリ・オイストラフの演奏楽器である。

ストラディヴァリ (1714年)「ペルー」

ジャック・ティボアの所有楽器で、現在はオイストラフの孫ヴァレリー・オイストラフの演奏楽器である。

ヴァルネリ・デル・ジェス (1737年)

ヨーゼフ・ヨアヒムの所有楽器で、次いでユージン・フォドアの使用楽器となった。

トマシュ・パヌフニク (ポーランドの楽器製作者)

1934年のヴィエニャフスキ・コンクールの副賞として与えられた。

CD-ROM

[No.29] ショスタコーヴィチ：ヴァイオリン協奏曲 第1番 イ短調 Op.77 (旧99) 第1楽章

ニューヨーク・フィルハーモニー管弦楽団 (ディミトリ・ミトロポロス 指揮) / 1956年1月2日録音 / COL ML 5077 / ソニー・クラシカル MHK 63327 / (11'57)

曲を献呈されたオイストラフ本人による演奏は、いまま決定版と呼ぶにふさわしい。緊迫感、執拗さ、矛盾で引き裂かれるような苦悩、激情または散在する光の瞬間にも似た悲痛、確信の力、あふれんばかりの詩情。それらすべての点において、幾世代ものヴァイオリニストが束になっても太刀打ち

オイストラフに献呈された曲は数多く、代表的なものとしてショスタコーヴィチの《ヴァイオリン協奏曲》二曲と《ソナタ作品一三四》、プロコフィエフの《ヴァイオリンとピアノのためのソナタ》二曲、ハチャトリヤンの《ヴァイオリン協奏曲》が挙げられる。

デイスコグラフィには彼の膨大なレパートリーが反映され、一人のヴァイオリニストによって録音されたものとしては、記念碑的な作品群が幾つか含まれる。どの演奏からも時代を超越した高貴さが感じられ、時を経て絶対の規範という座にとどまっている。

教育者としても名声を博し、弟子たちはオイストラフの知識のみならず、優しき、ユーモアのセンス、謙虚さを慈しみ、師を心から愛した。ソヴィエトの偉大なヴァイオリニストの一代を育てあげ、教えたのは息子のイーゴリ・オイストラフに加え、イオン・ヴォイク、ヴァレリー・クリモフ、マルク・ルボツキー、オレグ・クリサ、ヴィクトル・ピカイゼン、リディア・モルトコヴィチ、オレグ・カガン、ギドン・クレーメル、ストイカ・ミラノヴァといった名前が挙げられる。一九七四年十月二十四日、アムステルダム・コンセルトヘボウに指揮者として招かれ、一日かけての長い総稽古のあとに死去。享年六十六歳。あまりに突然で早すぎる死に、音楽の世界は深い悲しみに暮れた。

できないと認め、敬意を払い続ける。ここに収録したのはアメリカ初演の演奏だ。

[No.30] サン=サーンス：序奏とロンド・カプリチオーソ Op.28

ボストン交響楽団 (シャルル・ミュンシュ指揮) / 1955年12月14日
録音 / RCA LM 1988 / 再収録 RCA 74321 840392 / (8'57)
オISTRAフがアメリカでデビューしたときに収録された。

Szymon Goldberg

(1909-1993)



Photo: The Big

SZYMON GOLDBERG

*Polish Violinist
New to this Country
Destined to Assume
an Important Position
in its Musical Life.*

Soloist, Season 1949-1950 with following orchestras:

New York Philharmonic-Symphony (Mitropoulos conducting)
Cleveland Symphony (Szell conducting)
Los Angeles Symphony (Wallenstein conducting)
Seattle Symphony (Linden conducting)
Denver Symphony (Caston conducting)
Rochester Symphony (Leinsdorf conducting)
Oklahoma State Symphony (Alessandro conducting)
El Paso Symphony (Brown conducting)
Harrisburg Symphony (Raudenbush conducting)
Tulsa Symphony (Brown conducting)

and others.

New York, Carnegie Hall, October 25th 1949. Goldberg will appear in a special program for violin solo and string orchestra (23 musicians).

Spring of 1949. Goldberg is now on an extended tour of Europe, visiting Holland, Belgium, Scandinavian countries, Switzerland, et al.

Management: COPPICUS & SCHANG, Inc.
113 West 57th Street, New York 19, N. Y.
Division: Columbia Artists Management, Inc.
Partophone Records

シモン・ゴールドベルク

ワルシャワからベルリンへ

シモン・ゴールドベルクは一九〇九年六月一日にポーランドのヴロツワフで生まれ、七歳でセヴシックの弟子ヘンリク・チャプリンスキのもとでヴァイオリンを習い始めた。次いでワルシャワでカッタ・ランドフカヤに見いだされ、ベルリンへ連れて行ってもらい、カール・フレッシュのクラスに迎えられた。フレッシュはゴールドベルクの才能をすぐさま認め、弟子のなかでも特に目をかけた。若き天才ゴールドベルクは十二歳でパガニーニの《ヴァイオリン協奏曲第一番》を弾いてワルシャワにデビュー、さらにその二年後にベルリン・フィルハーモニー管弦楽団と共演した。ドイツで何度か演奏会をおこなったのち、フレッシュの推薦によりドレスデン・フィルハーモニー管弦楽団のコンサートマスターとなり、ヴィルヘルム・フルトヴェングラーの招きでベルリン・フィルハーモニー管弦楽団のコンサートマスターを一九二九年から一九三四年まで務めた。一九三二年、急死したヨーゼフ・ヴォルフスタールの代理として、ヴィオラのパウル・ヒンデミット、チェロのエマヌエル・フオイヤーマンがメンバーである弦楽三重奏団に加入した。

ジャワ島に拘束される

フルトヴェングラーの尽力もむなしく、ナチスの台頭にともない、一九三四年にベルリン・フィルの他のユダヤ系の団員たちと同じくドイツを去ることを余儀なくされる。ゴールドベルクはロンドンに移り住み、仲間との弦楽三重奏団による名録音を幾つか残した。次いで六年のあいだ、密度の濃い演奏活動をヨーロッパ、パレスチナ、極東でおこなう。ハンガリーのピアノリスト、リリー・クラウスと伝説的なデュオを組むようになるのもこの頃のことだ。なかでもこの二人のデュオによるモーツァルト演奏は、二十世紀における奇跡とも言われている。

ゴールドベルクは一九三八年にニューヨークのカーネギー・ホールでのデビューを果たし、極東への演奏旅行の途中、日本軍にとらえられ、リリー・クラウスと共にジャワ島に拘束された。そのまま十四もの収容所を転々とさせられ、抑留生活は二年半にもおよんだ。ギターの弦を張った間に合わせのヴァイオリンを手に入れたゴールドベルクは、小さな楽団を立ちあげることにも成功した。奇跡的にもゴールドベルクのストラディヴァリは没収されることなく、あるアマチュアのヴァイオリニストによってスイスにいるその人物の身内の手に託される。価値ある楽器はそのまま保管され、戦争が終わると持ち主であるゴールドベルクに返却された。抑留の苦しい経験にも負けず、一九四六年に解放されるとゴールドベルクはすぐに演奏活動を再開した。一九五〇年一月にはカーネギー・ホールで、ミトロプーロス指揮によるベートーヴェンの《ヴァイオリン協奏曲》を弾いた。これはウィーンの国立図書館でゴールドベルク自身が発見したオリジナル版による演奏だった。

ソリスト、指揮者、室内楽奏者

次にゴールドベルクはバッハ、ハイドン、モーツァルトの《ヴァイオリン協奏曲》をヴァルター・ジュスキント指揮でフィルハーモニア管弦楽団と録音した。一九五四年にパブロ・カザルスからブラド音楽祭へ招かれ、一九五一年から一九六六年まではコロラドのアспен音楽祭のリーダーを務めた。この音楽祭でウィリアム・プリムローズ、ヴィクトル・バビン、ニコライ・グラウダンと有名なフェスティヴァル四重奏団を結成し、RCAで数枚の音盤を出した。並行してシモン・ゴールドベルクは指揮者としての活動もおこなっている。ネーデルラント室内管弦楽団の音楽監督となり、名指揮者との評価を確立した。特にハイドンとモーツァルトの交響曲のセンシティブな演奏解釈に定評があるが、バルトークやヒンデミットといった二十世紀の作品も得意とした。一九六九年、ロンドンに居を定めると、若きピアノリストのラドゥ・ルプーとデュオを組み、デッカでモーツァルトとシューベルトのソナタ集をレコーディングした。指揮者としてもロンドン交響楽団やBBC交響楽団から定期的に招かれる。一九七八年にアメリカへ戻り、ニューヨークのジュリアード音楽院とイェール大学、そしてフィラデルフィアのカーティス音楽院で後進の指導にあたった。最初の妻であるメゾ・ソプラノ歌手のアンナ・マリア・マナスが没してから三年後、フィルクスニーとゼルキンのもとで学んだ日本人ピアノリストの山根美代子と結婚し、日本に移住した。一九九〇年からは新日本フィルハーモニー交響楽団の指揮者となり、桐朋学園大学音楽科でヴァイオリンを教えた。一九九三年七月十九日に富山で死去。

カール・フレッシュの門下で、おそらくシモン・ゴールドベルクはもつとも洗練された演奏家だ。

使用楽器

ストラディヴァリ (1711年) 「レグニツァ」

1930年代にゴールドベルクが購入した。

ガアルネリ・デル・ジェス (1734年) 「バロン・ヴィッタ」

1950年代以降にゴールドベルクが演奏した。

CD-ROM

[No.31] モーツァルト：ヴァイオリンソナタ 第36番 変ホ長調 K380

第3楽章

リリー・クラウス (ピアノ) / 1937年4月20～21日録音 / Parlophone
SW 14/20 / 再収録 Dante LYS 410 / (4'01)

息づかい、推進の流れ、休符でさえも惚れ惚れとさせられる。ゴールドベルクのヴァイオリンとリリー・クラウスのピアノは、楽譜を超越したところで、もはや言葉で言い表せないほど素晴らしい組み合わせであり、繰り返し聴いても飽きることがない。まさに永遠の美。二人のあいだの対話に耳を澄ませていると、転調や弾き手の呼吸ごとに驚かされる連続だ。絶妙のバランスと加減は奇跡を思わせ、二人がこれほどに打ち解けている様子は幸福の極みと呼びたい。

理想的なバランスを見つげるすべを心得ていた。テクニクと表情のバランスというだけではなく、心と知性のバランスにおいても優れていたのだ。その才能は古典のレパートリーで美しい花を咲かせた。ピュアであると同時に生気に満ち、たぐいまれな優雅さと気品あふれる演奏スタイルは、特にモーツァルトとベートーヴェンにこれ以上ないというほどしつくりくる。

Wolfgang Schneiderhan

(1915-2002)



WOLFGANG SCHNEIDERHAN

PHOTO-ATELIER

*Pietzner-
Fayer*

WIEN I, OPERNRING 1 (HEINRICHHOF), RUF B 26 4 26, B 26 4 23

ヴォルフガング・シュナイダーハン

アンチ・ヴィルトウオーソ

ヴォルフガング・シュナイダーハンを技巧派でないと評する向きがあったのは、彼の厳格な音楽的なアプローチによる演奏解釈が偉大だと認められていたからこそだ。長い演奏活動において、指揮者との共演だけではなく、同時代で特に優れたピアニストたちと共演をおこなった。

神童、ソリスト、室内楽奏者

シュナイダーハンは一九一五年五月二十八日にウィーンで生まれた。十五歳年長の兄ヴァルターも才能に恵まれ、腕のいいヴァイオリニストとなる。神童ヴォルフガングは母からヴァイオリンの手ほどきを受け、五歳のときに公開演奏をおこないウィーンでデビュー。次いでウィーンでユリウス・ウインクラーに、そしてプラハでオタカール・セヴシツクに師事した。同様にカール・フレッシュやゲオルク・クーレンカンフからもレッスンを受けた。十一歳のときにコペンハーゲンでメンデルスゾーンの《ヴァイオリン協奏曲》を弾いて国際的なキャリアをスタートさせ、同じ曲を最初にレコーディングした。一九二九年より三年間をイギリスで暮らし、シャリアピンやポール・ロブソンといっ

た多くの歌手と共演を重ねた。一九三二年にオーストリアへ戻り、ウィーン交響楽団のコンサートマスターとなり、その四年後にはアルノルト・ロゼのあとを引き継いでウィーン・フィルハーモニー管弦楽団のコンサートマスターに就任し、一九五〇年までその地位にとどまった。一九三六年の頃から積極的に室内楽での活動もおこない、オットー・シュトラッサー、エルネスト・モラフェク、リヒャルト・クロチャクと共に傑出した弦楽四重奏団を結成。シュナイダーハンの名を冠したその四重奏団（一九三七—一九五二）はレコードを何枚も録音した。一九四九年、ゲオルク・クーレンカンフの死後、クーレンカンフがエドウィン・フィッシャーとエンリコ・マイナルディと結成したピアノ三重奏団に加わる。一九五〇年代初頭にコンサートマスターを辞め、ソリストの活動に専念するようになり、ヴィルヘルム・ケンプとデュオを組んだ。一九五五年、弟子のルドルフ・バウムガルトナーと共にルツェルン音楽祭弦楽合奏団を創設した。同じ頃、ドイツの偉大なソプラノ歌手イルムガルト・ゼーフリートとの演奏会をしばしば開催し、一九四八年に彼女と結婚する。

名教師、膨大なディスコグラフィ

一九三六年よりヴォルフガング・シュナイダーハンは教育活動にも熱心にあたり、最初はザルツブルクのモーツアルテウム（一九三九—一九五二）で、次いで一九四九年からルツェルン音楽院で後進の指導にあたった。一九七〇年代から指揮にも取り組み、一九七五年にはフランツ・シュミットの歌劇《ノートルダム》をウィーンで指揮した。一九八〇年代初頭、パウル・バドゥラハスコダとボリ

ス・ペルガメンシヨフと新しくピアノ三重奏団を結成し、さらにピアノリストのワルター・クリーンとソナタを演奏した。二〇〇二年五月十八日にウィーンで死去。享年八十六歳。

同時代の作品が何曲かシュナイダーハんに献呈されており、代表的なものとしてはハンス・ヴェルナー・ヘンツェ《アリオソ》とフランク・マルタン《マリア三部作》が挙げられる。

テンポに厳密で、きわめて控えめ、古典的な抑制の効いたスタイルと、自分流を見せつける要素はすべて削ぎ落とした演奏で知られている。シュナイダーハンはおもに学んだはずのウィーン風というより、ドイツの伝統を汲んだ音楽解釈のほうを向いている。

多くの録音を残したが、その大部分はドイツ・グラモフォンからリリースされた。なかでも代表的なものとして、ベートーヴェンの《ヴァイオリン協奏曲》を四回（初回はヴィルヘルム・フルトヴェングラー指揮）、ベートーヴェンの《ヴァイオリンソナタ》全曲録音を二回（一度はヴィルヘルム・ケンプと、もう一度はカール・ゼーマンと）、ブラームスの《ヴァイオリン協奏曲》を三回、みずからの弾き振りでベルリン・フィルハーモニー管弦楽団とモーツアルトの《ヴァイオリン協奏曲》全曲、さらにフランク・マルタンとハンス・ヴェルナー・ヘンツェとイーゴリ・ストラヴィンスキーの《ヴァイオリン協奏曲》、モーツアルトとシューベルトとブラームスの多くのソナタ、三重奏曲、四重奏曲がある。



使用楽器

ストラディヴァリ (1704年)「リービツヒ」



CD-ROM

[No.32] ベートーヴェン：ヴァイオリンソナタ 第7番 ハ短調 Op.30-2
第3楽章

ヴィルヘルム・ケンプ (ピアノ) / 1952年9月録音 / ドイツ・グラモフォン
463 605-2 / (3'46)

その高雅な演奏は精緻にして明晰、古典的で純度が高い。

Yehudi Menuhin

(1916-1999)



"His tone is one of the most enchanting sounds in violin history. His skill thrills by its quickness, fire and daring, luscious warmth."
San Francisco Examiner, Oct. 2, 1939

"Transported out of Carnegie Hall straight up to music heaven... There is a curious human longing for things of this mythological sort, fauns, fairy tales, muses."
New York Mirror, Dec. 30, 1939

"Capacity-crowded County Center heard Yehudi Menuhin weave magic from a violin and bow. Sounds emanated from the stage sweet and mellow as remembrance of a lovely dream."
Waco Daily Weekly Times, Dec. 22, 1939

"Menuhin approached his herculean task with loving care... heavenly melody soaring high above the orchestra."
Washington (D. C.) Star, Jan. 3, 1940

"His genius has no limitations... one of the great violin virtuosos of all time. The old masters lived again. Behind his nimble fingers and magic wrist is a brain steeped in melody and a consciousness of what it means."
Asheville (N. C.) Times, Jan. 9, 1940

"Complete unfolding of the robust spirit of Bach and the matching genius of Menuhin. Singing melodies, cascades of rhythm like the sparkling play of myriad fountains under colored lights made the listener wonder what new magic a violin suddenly possessed."
Bakersfield Californian, Oct. 18, 1939

"An artist of mature and challenging individuality, a technician of formidable powers, a musician of impeccable integrity... violin playing in great and enduring tradition...."
New York Sun, Dec. 5, 1939

"Audience packed hall, stage and every available inch of standing room... really a breath-taking revelation... Mr. Menuhin made his fingers talk, sing, strum, ring bells, leap about like fireflies and fill the air with sparks."
New York World-Telegram, Dec. 5, 1939

"Menuhin excelled himself in a program extraordinary for even a genius... completely lifted the audience as it realized that it was listening to a new extension of what must have been the graces of Paganini."
Los Angeles Herald-Express, Oct. 11, 1939

"Menuhin's warm, vital tone ran like a golden thread through the rich orchestral brocade of the Chausson 'Poem'.
Minneapolis Times Tribune, Nov. 18, 1939

"Menuhin draws his bow across the heart-strings of humanity... heavenly music to inspired and magnificent one feels the urge to kneel and pray instead of applauding!"
Seattle Daily Times, Nov. 2, 1939

"Musicians and laymen alike were struck by his smooth and lovely tone, uncanny command of his bow... presented the rich musical designs in the grand manner, as one genius interpreting another."
Portland (Ore.) Daily Journal, Nov. 3, 1939

"What a perfect ending to a day of thanksgiving! Yehudi Menuhin made of it a prayer and a rejoicing...."
Detroit Free Press, Nov. 24, 1939

"For thousands upon thousands of the public it was the ideal violin tone. Mellow gold or quicksilver, or warm and human and robust, it was incomparable. Listeners wanted it to go on forever."
Winnipeg Free Press, Nov. 14, 1939

ユーディ・メニューイン

ユニバーサルな音楽家

「これでようやく神が存在するとわかった」と、アルベルト・アインシュタインが嘆息をあげたのは一九二九年四月十二日のベルリンで、バッハ、ベートーヴェン、ブラームスの《ヴァイオリン協奏曲》を立て続けに弾きこなしたばかりの十二歳半の少年を抱きしめながらのことであった。その神童の名はユーディ・メニューイン。その二年前の登場以来、音楽の世界を震撼させていた。ハイフェッツ、エルマン、ティボーといったヴァイオリンの巨人たちを前に、その子は驚くほど自然なままに天才ならではの本能による音楽を聴かせていた。偉大な作曲家にしてヴァイオリニストであるジョルジュ・エネスコとの出会いによって、幼きヴィルトウオーソの少年は大人の音楽家としての深みを身につけ、卓越した教養の持ち主へと変身する。ヴァイオリニストとして波乱に満ちた生涯を送り、その長いキャリアで多くの名指揮者（トスカニーニ、モントゥー、フルトヴェングラー、エーリヒ・クライバー、クセヴィツキー、ワルター、クレンペラー、ミュンシュ、カラヤン）と共演し、同時代の偉大な作曲家（シベリウス、リヒャルト・シュトラウス、エルガー、バルトーク、プロツホ、フランク・マルタン、ウオルトン）と出会う。数多くの作品が生まれるきっかけを与え、一九四四年にはバルトークに依頼して《無伴奏ヴァイオリンのためのソナタ》を作曲してもらった。この曲は二十世紀のヴァ

イオリン作品における代表的なものとなった。メニューインこそ二十世紀を代表するヴァイオリニストだと言っても過言ではない。メニューインはヴァイオリンという枠を超え、多くの聴衆にとって世界で活躍するユニバーサルな演奏家というシンボルとなったのだ。

神童

一九一六年四月二十二日、ユーディ・メニューインはロシアからニューヨークへ移ってきたばかりのユダヤ人の家庭に生まれた。数ヶ月後、家族はサンフランシスコに移住する。ごく早い頃からヴァイオリンに興味を示し、四歳から学び始めた。最初についてはシグムンド・アンカーだが、ユーディはアンカーによってすぐサンフランシスコ交響楽団のヴァイオリン首席奏者にしてウジェーヌ・イザイとジャック・テイボアの弟子であるルイス・パーシנגラーの手に託される。非凡な才能に恵まれたユーディは目覚ましい進歩を遂げる。一九二四年二月二十九日、オーケランドで初めての公開演奏をおこない、師匠のピアノ伴奏によるシャルル・ド・ベリオの《バレエの情景》を弾いた。翌年早々、サンフランシスコ交響楽団とラロの《スペイン交響曲》を共演してデビュー。一九二五年秋、ルイス・パーシングラーについてニューヨークへ行き、そのままパーシングラーの教えを受けた。七／八サイズのグランチーノを贈られ、一九二六年一月十七日にあらためてラロの《スペイン交響曲》をパーシングラーの伴奏で弾いてニューヨークでのデビューを果たした。その早熟な音楽の才能によって疑いようのない神童だと認められる。

エネスコの強い影響

一九二六年末、パーシングラーはユーディをヨーロッパに送って研鑽を積みせよと決心した。旅が可能になったのは、サンフランシスコの裕福な弁護士シドニー・エールマンが後援者となり、メニューイン一家が一年間ヨーロッパに滞在するための費用を負担しようと提案してくれたおかげであった。ユーディは「大好きな先生」の推薦によってブリュッセルでウジェーヌ・イザイにヴァイオリンを聴いてもらい、イザイという人から強い感銘を受ける。イザイは彼に貴重な助言を与えてくれたが、少し冷淡に感じられた。その数週間後に出会ったジョルジュ・エネスコこそ、若きユーディに決定的な影響を与える人物であった。「エネスコ先生と勉強したいなら、自分で会いに行つて直接お願いしなさい。両親からそう言われました。彼は親切に迎えてくれました。エネスコは誰であろうと相手に安心感を与え、そばに行くだけで善良で思いやりに満ちた人柄が伝わってくる。ともかく素晴らしい人で私はすぐに夢中になりました。相手から最良の部分を引きだすべしを心得ていたのは、彼自身が惜しみなく与えることができる人だったからでしょう。私は絶対にあの先生のとこで勉強したいと心に決めていました。エネスコは自分が持つ技術を押しつけるのではなく、ヴァイオリンの詩情を教えることで、私の音楽との本能的なかわり方を成長させてくれました。私があまり練習しないので父が心配したときも、こう答えたんです。『そのほうが将来は安心だ！』とね」

ルーマニアの巨匠はユーディ少年の才能に魅了されて入門を許し、その後も長年にわたりメニューインの音楽的な成長を導いた。一九二七年二月六日、メニューインはポール・パレーの指揮で《スベ

イン交響曲》を弾いてパリでのデビューを飾る。その演奏会の大成功を受け、翌週にチャイコフスキーの《ヴァイオリン協奏曲》での追加公演をおこなう。そのままパリにとどまり、ジョルジュ・エネスコのもとで研鑽を積んだ。一九二七年秋、若きメニューインはアメリカに戻り、十一月末にニューヨークでフリッツ・ブッシュの指揮による驚愕すべきベートーヴェンの《ヴァイオリン協奏曲》を披露した。聴衆とジャーナリズムに歓迎され、名声は高まるいつぼうだった。アメリカで連続演奏会を開催し、一九二八年に最初のアルバムをレコーディングした。

アドルフ・ブッシュのレッスン

一九二九年四月、ブルーノ・ワルター指揮でベルリン・デビューを果たした。その演奏スタイルが「ロマ風」になりすぎたと判断したエネスコの助言にしたがい、メニューインはバーゼルの夏の講習で二年続けて（一九二九—一九三〇）アドルフ・ブッシュのレッスンを受け、楽譜を尊重することと、ドイツの伝統である厳密な演奏スタイルを教えられる。一九三〇年、メニューイ一家はパリ近郊のヴィル・ダヴレーに居を定め、ジョルジュ・エネスコとのレッスンを継続する。翌年、ライプツィヒのゲヴァントハウス管弦楽団の創設百五十周年に招かれ、メンデルスゾーンの《ヴァイオリン協奏曲》を演奏。一九三二年、ロンドンでエルガーの《ヴァイオリン協奏曲》を作曲家本人の指揮で弾き、同じ曲をレコーディングした。一九三〇年代はツアーの数が倍増し、若きメニューインの目も覚めるほどの演奏に熱狂した聴衆から求められ、世界中で演奏するようになる。その頃にはもう妹へプシバのピアノとのデュオも演奏していた。

一九三六年、アメリカへ戻ると、十年におよぶ濃密な活動のあとは休息を取ったほうがいいという両親の意向にしたがい、十八ヶ月のあいだ演奏活動を休止する。数ヶ月ヴァイオリンを置き、代わりに十二気筒エンジンのキャテラックのオープンカーでカリフォルニアを走りまわった。が、音楽への渴望はやみがたく、前にも増して厳しい練習に励むようになる。一九三八年、ゲオルク・クーレンカンプのドイツでの初演の数日後、シューマンの《ヴァイオリン協奏曲》のアメリカ初演をニューヨークでおこなった。戦争中は連合軍への慰問演奏を百五十回以上もおこない、一九四四年九月には解放されたパリで演奏する最初の音楽家となった。共演はシャルル・ミュンシュ指揮によるオペラ座管弦楽団であった。一九四五年七月、ベンジャミン・ブリテンと共に、解放されたばかりの強制収容所の生き残りの人たちのために演奏した。その記憶は生涯にわたってぬぐい去ることができなかった。「音楽を聴けば人々のかつての感情を呼び覚ませるのではないか、そして魂に刻まれた苦悩の結び目をほぐくこともできるのではないか。私たちはそういう想いをこめて演奏しました」と、そのときのことを振り返ってメニューインは嘆息する。戦争が終わるとすぐにモスクワで演奏会を開催し、ダヴィッド・オイストラフと親しくなった。

スランプ

一九四六年、ルーマニアでジョルジュ・エネスコと再会し、エネスコから名器サンクトゥス・セラ

フィンを譲り受ける。翌年、ヴィルヘルム・フルトヴェングラー指揮でベルリン・フィルハーモニー管弦楽団と共演。瓦礫と化したベルリンで演奏した最初のユダヤ系の音楽家となる。こういった行動はのちにさまざまな形で高く評価されるが、メニューインはあくまで自由な人道主義者として行動した。巨匠フルトヴェングラーの名誉回復キャンペーンを張り、その象徴として動くにふさわしい演奏家パブロ・カザルスの賛同を得た。とぎれることなく続いた栄光の二十年ののち、一九四〇年代末になるとメニューインは技術にまつわる諸問題を抱え、演奏にも変調をきたすようになる。左手の技巧はゆるぎないものであり続けたが、弓をあやつる右手の不安定な動きが次第に目立ってきた。その理由については幾つかの説があった。幼年期に楽器を弾きこなすための教則的な修行を欠いたせいであるとか、戦争中の無理がたたったのだとか、あるいはさらに精神的な原因によるものだという説も登場した。メニューインは出口の見えないスランプに陥り、のちにその時期のことをみずから「絶望を味わった」と告白していた。若いのにそれでおしまいかとも思われたが、何年もかけて練習を積み、自分自身を見なおした。右手の不調を克服し、敢然と技術的なハンディを乗り越え、あらたなバランスを獲得した。

世界市民

一九五〇年代、イスラエルへの演奏旅行を多くおこない（彼のドイツでの演奏会を理由にしての批判の矢面にさらされたにもかかわらず）、世界中を飛びまわるようになる。プラド音楽祭でパブロ・

カザルスと再会し、次いでプエルトリコ音楽祭でもカザルスと行動を共にした。メニューイン自身も一九五六年にスイスでグシュタード音楽祭を設立し、ギドン・クレーメルに後任監督をまかせる一九九七年までこの音楽祭の運営をおこなった。一九五九年にロンドンに定住し、バース音楽祭の芸術監督に就任して一九六八年まで運営を取りしきり、さらにウインザー音楽祭（一九六九—一九七二）の監督も務めた。その時代は妹ヘンシバとのデュオをよく演奏し、ヴィルヘルム・ケンプやグレン・グールドとのソナタの演奏会も開催した。一九四二年に関心を抱いて以来、次第に指揮者としての活動が増えてくる。バース音楽祭管弦楽団のリーダーとして指揮活動を開始するが、一九八〇年代以降、世界各国のオーケストラから指揮者として招聘されるようになる。一九八一年、ロンドンのロイヤル・フィルハーモニック管弦楽団の名誉会長に選ばれる。

平和のための闘士、人道主義の守り手、情熱的な教育者

第二次世界大戦が終わってすぐの頃、ユーディ・メニューインは自分の世界的な知名度を人道主義と世界平和のために活用しよう決心する。一九五〇年から南アフリカのアパルトヘイト政策への批判を表明、イスラエルとパレスチナの和平のために奔走し、アムネスティ・インターナショナルの活動もおこなう。こうして一九七〇年代にはその強い影響力を駆使して、チェリストのミスティラフ・ロストロポーヴィチをソ連から亡命させ、アルゼンチンのピアニストであるミゲル・アンヘル・エストレージャをウルグアイの牢獄から解放した。ジャンルの垣根を越えてあらゆる音楽に情熱を傾け、

ルーマニアではロマと共演し、ステファン・グラッペリとはジャズのアルバムをレコーディングし、インドの伝統音楽をラヴィ・シャンカールと録音した。

もう一つ、メニューインが大切にしたもののが音楽教育であった。一九六三年、イギリスでサリー州のストーク・ダバノンに「ユーディ・メニューイン・ミュージック・スクール」を創立。これはモスクワの中央学校をモデルとして、世界中の才能に恵まれた若者に開かれた学校であった（この学校出身者としてはナイジェル・ケネディが有名）。一九八〇年、若い演奏家の演奏活動を支援するユーディ・メニューイン財団を設立し、一九八三年には自分の名を冠したヴァイオリンのコンクールを始める。そして有名なロン・ティボー、エリザベート、パガニーニといった国際コンクールの審査員を務めた。

イギリス女王から叙勲される

メニューイン以前にこれほど浴びるほどに栄誉を与えられた音楽家はいない。一九六五年、イギリス女王から叙勲される。ユネスコ国際音楽音楽評議会の会長に選ばれ、一九六九年から一九七五年まで連続して務めた。一九七〇年にスイス名誉市民の称号を授与され、一九八五年にはイギリスの市民権を獲得する。フランスではソルボンヌの名誉博士号を与えられた初の音楽家となり（一九七六年）、レジョン・ドヌール勲章グラントフィシエを授与され（一九八六年）、イギリスからはメリット勲章を授けられた。一九九三年、エリザベス二世からストーク・ダバノン男爵に叙せられる。

メニューイン卿は一九九九年三月十二日にベルリンで死去。あと数週間で八十三歳の誕生日を祝うはずであった。悼む言葉が数多く寄せられた。モーリス・ベジャールはこう書いている。「メニューインは二十世紀の音楽の奇跡であったのみならず、それ以上に、この地上に生まれた天才であり、あらゆる人種や宗教を超越したところで最後に残る真実と通じあい、生きる意味を与えてくれる人だった」

メニューインのために曲を書いた作曲家は多い。バルトックは一九四四年に《無伴奏ヴァイオリンのためのソナタ》を献呈（メニューインからの委嘱を受けた）。エルネスト・プロツホは《アポダー》（一九二九年にメニューインのために書かれた）と《無伴奏ヴァイオリンのための組曲》二つ（一九五八年）を、フランク・マルタンは《三部作》を、アンジェイ・パヌフニクは《ヴァイオリン協奏曲》（一九七一年）を、ウイリアム・ウォルトンは《ヴァイオリンとピアノのためのソナタ》（一九四八年）をメニューインに捧げた。

さらにシューマンの《ヴァイオリン協奏曲》の蘇演、メンデルスゾーンの《ヴァイオリン協奏曲第一番》と《ソナタ第二番》を再発見した功績も大きい。

ヴァイオリニストとしてのデイスコグラフィーは膨大だ。著者によるデイスコグラフィーは以下のサイトで閲覧が可能である。 <http://www.menuhin.org/?page=theMusic/discography.html>

ンストン刊、1983年、ロンドン)

『Life Class』(ウィリアム・ハインマン私家版、1986年、ロンドン)

『芸術、人への希望』(ビュシュネ／カステル刊、1987年、パリ)

『師の教え』(ビュシュネ／カステル刊、1987年、パリ)

『ヴァイオリンの伝説』(フラマリオン刊、1996年、パリ)

CD-ROM

[No.33] プロツホ：アボダー

ヘンドリック・エント(ピアノ) / 1939年3月14日録音 / HMV DB
3782 / 再収録 Biddulph LAB 128 / (4'58)

エルネスト・プロツホが《アボダー》を献呈したとき、幼きユーティは七歳だった。プロツホからすれば、信仰の奇跡をあらためて見せつける天才児への捧げ物にも等しかったはずだ。メニューインはその存在によって多くの同時代の作曲家の創作意欲に火をつけた。この演奏は長い献呈作品リストの最初を飾る一曲。

[No.34] メンデルスゾーン：ヴァイオリンソナタ ヘ長調(1838年)

第2楽章

ジェラルド・ムーア(ピアノ) / 1952年10月8日録音 / HMV ALP
1085 / 再収録 EMI CDM 7 63988 2 / (6'42)

メニューインが再発見し、1953年に出版した作品である。

使用楽器

ストラディヴァリ(1714年)「ソイル」

現在はイツァーク・パールマンの所有楽器。

ストラディヴァリ(1733年)「プリンス・ケーフェンヒュラー」

かつてヨーゼフ・ベームの使用楽器だった。

ガルネリ・テル・ジェス(1742年)「ロード・ウィルトン」

ガルネリ・テル・ジェス(1739年)「エヴァーショルト」

1995年からリーラ・ジョゼフオウィッツの使用楽器である。

ガルネリ・テル・ジェス「デグヴィル伯」

サンクトゥス・セラフィン

メニューインがジョルジュ・エネスコから譲り受けた。

ジョヴァンニ・グランチーノ

グレン・コリンズ(1987年)

スピドレン

ボッジ

著作

『ヴァイオリン演奏の芸術』『ユーティ・メニューインとの六つのレッスン』
(ビュシュネ／カステル刊、1973年、パリ)

『未完の旅』(スイユ刊、1976年、パリ)

『サー・エドワード・エルガー、わが音楽の祖父』(エドガー・ソサエティ刊、
1976年ロンドン)

『私の好きな音楽物語』(Lutterworth Press刊、1977年、ロンドン)

『ユーティ・メニューイン ヴァイオリンを語る』(ウィリアム・プリムロー
ズとの共著、Hatier刊、1978年、パリ)

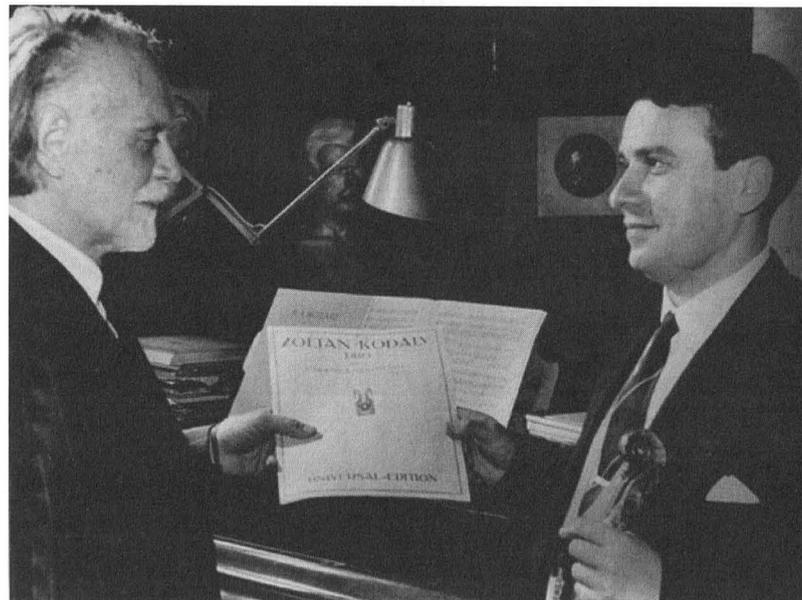
『主題のない変奏曲』(ビュシュネ／カステル刊、1980年、パリ)

『The Music of Man, Conversation with Yefudi Menuhin』(カーティス・
W・デイヴィスとの共著、1980年、ロンドン)

『The King, The Cat and The Fiddle』(ホルト、ラインハルト・アンド・ウイ

Henryk Szeryng

(1918-1988)



ヘンリク・シエリング

弦の上で創られる音の神秘に魅せられて

二十世紀の偉大なヴァイオリニストのなかでも、ヘンリク・シエリングがいまだ一般大衆にその名を知られていないのは不思議なことだ。シエリングはその驚異的な楽器のコントロールと教育者の才能によって、ヴァイオリンの世界ではまちがいに最高レベルの巨匠と認識され、国際的に高く評価されているものの、その名がメニユールやオイストラフのような高い人気を博したことは一度もない。おそらく、シエリングがコントラストと矛盾に満ちた人物だと見られているせいだろう。だが、誰であれ、彼の演奏会を聴く機会に恵まれたなら、得がたい経験として記憶にくつきりと刻みこまれるはずだ。舞台上のシエリングの存在感は強烈で、一生の思い出として残るものである。

ヘンリク・シエリングは一九一八年九月二十二日、ワルシャワ近郊にある村ジェラゾヴァ・ヴォラ、つまりフレデリック・ショパンの生誕の地で、ユダヤ系ポーランド人の両親のもとに生まれた。父のシモン・シエリングはポーランドでは名を知られた実業家で、エレガント、資産家、オペラ好きで、本人もバリトンの美しい声の持ち主だった。が、ヘンリクの母はピアノリストだったので、息子が五歳になるとピアノと和声学のレッスンをした。ヴァイオリンを勉強していた兄の影響を受け、ヘンリク

も楽器をピアノからヴァイオリンに変更する。長じてからの本人の言葉によると「弦の上でつくられる音の神秘」に魅せられたからだそうだ。最初の教師のモーリス・フレンケルは、第一次世界大戦前にサンクト・ペテルブルクでレオポルト・アウアーの助手を務めた人だった。フレンケルからの影響は大きく、特にイントネーションの純度に対する要求の高さが、のちのシェリングの方向性を決定づける。シェリング少年の進歩は著しく、十歳にしてプロニスワフ・フーベルマンの前でメンデルスゾーンの《ヴァイオリン協奏曲》を弾き、パリかベルリンで勉強を続けなさい、とアドバイスを受ける。対位法と作曲を学んで知識を深めることが必要であり、またそれとは別に、世界的に有名な教師について楽器を弾きこなすための技巧を磨くべきだ、と。「フーベルマンは順番に、ヴィリー・ヘス、カール・フレッシュ、ジャック・テイボーの名前を挙げ、ベルリンのヘスに推薦状を書いてくれました」だが一年で若きヘンリクはカール・フレッシュのところへ移ることになった。少年の目に、ヘスの教育法は時代遅れで、目指すものも「古くさいスタイル」に映ったのだ。フレッシュに対しては心から尊敬の念を抱いた。特に響きについて、新しい世界への扉を開いてくれた。「フレッシュは精緻なボーイング、それも弓の毛のひと筋までも使うのだと実際にやってみせ、左の手指と右腕のコーディネートをどうすれば完璧なアーティキュレーションになるのか、気づかせてくれた」この頃のシェリングはフレッシュの最年少の弟子で、一九二八年から一九三二年までにベルリン音楽大学のフレッシュのもとでレパートリーの核となる曲を学んでいる。師であるフレッシュと「見事な教育の手腕」に対して抱いていた感嘆とは別に、若きヘンリクはさらに自分の演奏に磨きをかける必要を感じた。一九三三年、ブラームスの《ヴァイオリン協奏曲》を弾いてワルシャワでデビューしたのち、彼は初めてパリで演

奏する。そのとき、一週間のうちにフリッツ・クライスラーとジャック・テイボーをそれぞれの演奏会で聴く機会に恵まれた。二人の演奏家を持つ気品に魅了され、パリにとどまり、二人のうちでも特に、個性と慈愛を感じさせた演奏に惹かれ、フランスの巨匠、つまりジャック・テイボーと勉強したいと決心した。「なんととしてもフランス楽派ヴァイオリンの奥義に迫るのだと思いだめた」というのが当時を振り返つての本人の言だ。だが、ジャック・テイボーは演奏旅行が多く時間が取れないと、ヘンリクの教育はパリ音楽院の教授であるガブリエル・ブイヨンの手に託された。若きシェリングは一九三七年に一等賞でパリ音楽院を卒業。同じ頃、フランスの有名なヴァイオリニストにして、教育者の娘だったベルトリエ女史に師事し、ルクー、ルーセル、ピエルネ、フロラン・シュミットといったフランス音楽の精神にも触れていく。戦争が勃発し、始まったばかりの演奏活動は中断を余儀なくされた。ワルシャワの陥落後、シェリングはロンドンに戻り、そこでポーランドの亡命政権での通訳（彼は八ヶ国語を流暢に話せた）を兼ねた連絡将校となった。戦争中はヨーロッパ、アフリカ、アメリカで連合国軍のために三百回以上の慰問演奏会をおこなった。その一環として、一九四一年にポロランドから逃げてきた四千人の集団に付き添ってラテンアメリカへ行く。この人々は最終的にはメキシコに受けいられることになった。感謝の印として、ヘンリク・シェリングは一九四五年にメキシコに移り住み、数年後にメキシコの市民権を得た。そしてメキシコ国立大学の弦楽器部門の部長に任命される。第二の故郷となったメキシコへの思いから、シェリングはメキシコ音楽の擁護者となり、マヌエル・ボンセやカルロス・チャベスといった作曲家がシェリングに作品を献呈した。

アルトウール・ルービンシュタインに再発見される

だが、シェリングのキャリアが飛躍的な発展をするのは一九五四年のことだ。偉大なピアニスト、アルトウール・ルービンシュタインのメキシコでのリサイタルのあと、同じポーランド出身のルービンシュタインに称賛の言葉を伝えようと、シェリングは楽屋を訪れた。高名なピアニストはその翌日、一緒に弾いてみようとしてシェリングに声をかけ、すぐさまその才能の素晴らしさを認め、有名な興行師ソル・ヒューロックにシェリングのことを熱心に売りこんでくれた。そのとき三十六歳のシェリングにとつて、これが人生の転機となり、国際的な演奏活動をおこなう道が開けることとなった。二人の演奏家はコンサートで共演し、しばしばデュオだけではなくチェリストのピエール・フルニエを加えた三重奏でもレコーディングした。一九五六年、ニューヨーク・フィルハーモニー管弦楽団との共演でアメリカにデビュー。それを境に、シェリングは当代きつての巨匠の一人として全世界に認められるようになった。J・S・バッハの演奏における最高峰と見なされ、きわめて幅広いレパートリーなどの部分でも見事な腕前であることから、世界のあらゆるステージで演奏し、幾つものレーベルで多大なレコーディングをおこなった。一九五六年にはメキシコの「熱意あふれる」文化大使に任命される。この名称をシェリング自身はたいそう誇りにしていた。そして一九七〇年、ユネスコにおけるメキシコの特別顧問となる。シェリングはソリストとして活動するかたわら、教育にも多くの時間を割いていた。教育学に情熱を傾け、メキシコ大学で継続的に講義をし、スイスではマスタークラスを主宰した。飽くなき好奇心によって、そのレパートリーは新曲や珍しい曲を含めた膨大なものとなって

いく。ジャン・マルティノンの《ヴァイオリン協奏曲第二番》を献呈されて初演したり、バガニーニの《ヴァイオリン協奏曲第三番》を再発見して世界初録音をおこなうなど、シェリングの功績は大きい。一九八四年一月に結婚するが、四年後の一九八八年三月三日にドイツのカッセルで死去。七十歳の誕生日を迎える数ヶ月前のことだった。

シェリングはヤツシャ・ハイフェッツを崇拜し、ハイフェッツを「皇帝」と呼んでいた。他にもコーガンとフランチェスカツティの演奏を賛美し、「真に偉大なヴァイオリニストは作られるものではなく、神々しい星のもとに生まれつくのだ」と評した。ハイフェッツがそうであったように、シェリングもグアルネリ・デル・ジェスのパワフルな響きを好み、もつとも愛した使用ヴァイオリンは一七四三年製の「デューク」だった。シェリングはそのキャリアにおいて他の楽器も弾いていた。一七三四年製のストラディヴァリ「ヘラクレス」、アンドレア・グアルネリを一挺、グアダニーニを一挺、ヴィヨームを二挺（そのうち一挺はストラディヴァリ「メシア」の複製）。シェリングは信じがたいほどの気前のよさで、所有楽器の多くを寄贈した。ヴィヨームの「メシア」はモンテカルロ・フィルハーモニー管弦楽団に、グアダニーニは弟子のシュロモ・ミンツに、アンドレア・グアルネリはメキシコ市に、「ヘラクレス」はイスラエル・フィルハーモニー管弦楽団のコンサートマスターに使用してほしいと一九七二年にエルサレム市へ譲った。

膨大なディスコグラフィは四十年以上（一九四二―一九八四）の広がりを見せる。バッハの《無伴奏ヴァイオリンのためのソナタとパルティータ》全曲は、一九五四年と一九六八年の二回の録音があるが、この作品を語る上で避けて通れぬ記念碑たる完璧さと厳密さの鏡だ。

使用楽器

ガルネリ・デル・ジェス (1734年) 「デューク」

ストラディヴァリ (1734年) 「ヘラクレス」

アンドレア・ガルネリ

グアダニーニ

ヴィヨームを二挺

そのうち一挺はストラディヴァリ「メシア」の複製

CD-ROM

[No.38] J. S. バッハ：無伴奏ヴァイオリンのためのパルティータ 第2番

ニ短調 BWV1004 「シャコンヌ」

1954年録音／オテオン 122/124 /再収録 CBS MP2K 46721 / (14'00)

このバッハ無伴奏の名手による最初の全曲録音。

同時代の多くヴァイオリニストとは違い、シェリングはその重要性を認識していたので、撮影用の照明も嫌がらずに受け入れた。そのおかげでシェリングの演奏活動は、さまざまな時期にアメリカ、日本、メキシコ、ヨーロッパで撮影された多くのドキュメンタリー映像に残されている。

Ginette Neveu

(1919-1949)



ジネット・ヌヴェーとマルセル・ヴァトロ。ヴァトロの楽器工房にて（パリ、1949年頃）。
エティエンヌ・ヴァトロのプライベート写真。

ジネット・ヌヴェー

聖なる狂気

一九四九年に突然、ジネット・ヌヴェーはこの世を去る。本来なら女性ヴァイオリニストとして前例のない大成功のキャリアを築くはずだった。国際コンクールへの参加、レコーディング、放送による演奏会中継、世界中での演奏旅行。そういった現代的なやり方で世界を征服した最初のソリストだ。ヌヴェーのステージを聴いた人は、その炎のごとき芸術性と、演奏している姿が放つ存在感について口々に証言する。

ジネット・ヌヴェーは一九一九年八月十一日、パリの音楽一家に生まれた。五人兄弟の末っ子だったジネットは、ヴァイオリン教師だった母から最初のレッスンを受けた。神童として五歳半で最初の公開演奏をおこなう。七歳のときにパリのサル・ガヴォーでブルッフの《ヴァイオリン協奏曲第一番》をガブリエル・ピエルネ指揮のコロンヌ管弦楽団と共演してデビューを飾る。ジョルジュ・エネスコに注目され、弟子入りを許された。十一歳でパリ音楽院のジュール・ブシユリのクラスに入学。その八ヶ月後に一等賞を獲得し、ヴィエニャフスキ以来という若さで音楽院を修了する。その後、ナディア・ブーランジェのもとでの勉強を続け、一九三三年にロンドンへ行くとカール・フレッシュの門下で四年間の研鑽を積む。「あなたは天から与えられた才能の持ち主だ。私はその才能をいじる気は毛

使用楽器

フランソワ・リュボ

オモポーノ・ストラディヴァリ (1730年)

飛行機事故で壊れてしまい、事故現場からはヘッド部分だけが発見された。(オモポーノはアントニオ・ストラディヴァリの息子)

G. B. グアダニーニ

CD-ROM

[No.39] ラヴェル：ツイガーン

ジャン・ヌヴェー (ピアノ) / 1946年3月26日および8月13日録音 /

HMV DB 6907/8 / EMI CDH 763493 2 / (10' 17)

パブロ・カザルスが「完璧さ、バランス、センス。あとは彼女が演奏の力によって聖なる狂気をつけ加え、すべてを委ねてしまっただけのこと」と絶賛した演奏。

頭ない。あれこれ技術的な助言をするにとどめておこう」とフレッシュュは言った。
ヌヴェーは幾つかの国際コンクールに参加し、優勝した。一九三五年のワルシヤワでの第一回ヴィエニャフスキ・コンクールでは、ダヴィッド・オイストラフ(ヌヴェーより十一歳上)とアンリ・テミアンカを抑えて一位となっている。

そして国際的なキャリアをスタートさせた。一九三八年、HMVで最初のレコードを録音した。が、戦争で演奏活動が少し停滞する。戦時中、多額の報酬を提示されてもナチス政権下のドイツでの演奏を拒絶している。一九四三年にパリでフランシス・プーランクの《ヴァイオリン・ソナタ》を初演し、その翌年にはエリザレデの《ヴァイオリン協奏曲》をポルドーで初演した。

パリの解放後、ジネット・ヌヴェーは外国でのツアーを再開。音楽を職業ではなく使命と考え、特にイギリスとアメリカ大陸へと足を運んだ。ミュンシュ、ロスバウド、ドラティ、シュミットロイツセルシュテット、カラヤンといった大指揮者と共演するようになり、ブラームス、シベリウスの《ヴァイオリン協奏曲》、ドビュッシーの《ソナタ》、ショーンソンの《詩曲》、ラヴェルの《ハバネラ形式の小品》と《ツイガーン》など、ヴァイオリンのレパートリーでも特に大きな曲を録音した。情熱的なテンペラメント、そして自分自身への要求の高さによって、それまで男性上位とされてきたヴァイオリンの世界でほとんど初めて、男性奏者と肩を並べられる女性としてその存在を認めさせた。パリでの最後の演奏会をおこなった数日後の一九四九年十月二十八日、兄のジャンと、そして有名なボクサーのマルセル・セルダンと同じ飛行機に乗りこみ、その飛行機がポルトガル領のアゾレス諸島に墜落して死亡した。死後にレジョン・ドヌール勲章を授与され、パリ市議会はパリ十八区にある通りにヌヴェーの名をつけた。

Isaac Stern

(1920-1991)



エティエンヌ・ヴァトロの執務室でのアイザック・スターンと著者。1997年パリ。

©マリオン・カルター

アイザック・スターン

ヴィルトゥオーソと音楽家のあいだの理想のバランス

アメリカのヴァイオリンを象徴する顔であり、二十世紀後半の代表的な演奏家である。アイザック・スターンは卓越した芸術性を持つソリストであるだけでなく、室内楽と同じように現代作品にも情熱を傾けた、あらゆる意味で総合的に優れた音楽家だ。非凡なエネルギー、ふくよかな響き、深い音楽性。そういった持ち味により、スターンはヴィルトゥオーソと音楽家の中間での理想的バランスを見いだしたと言えるよう。

神童でもなく、生まれついでヴィルトゥオーソでもなく

アイザック・スターンは一九二〇年七月二十一日、ウクライナのクレメネツに生まれたが、一歳のときに家族でサンフランシスコに移住する。七歳になると最初はピアノを学び始め、その二年後にヴァイオリンを始めた。三年間をロバート・ポラックに師事し、次いで数ヶ月間、ユーディ・メニユインやルツジェエロ・リッチの師でもあったルイス・パーシנגーにつく。しかし、スターンが唯一の師と認めることになるのは、アドルフ・ブロードスキー（チャイコフスキーの《ヴァイオリン協奏曲》の初演者）の弟子でサンフランシスコ管弦楽団のコンサートマスターであるナフム・ブリンダーだつ

た。「プリンダー先生は私に、どうやって独力で学ぶかを教えてくれた。教師が授けてくれる知識のなかでいちばん大切なことだ。そうすることで、誰にも依存しないということを感じさせてくれたのだから」と、のちにスターンは語っている。室内楽に目を向けさせたのもプリンダーだった。「音楽の真髄を発見させてもらい、他の人の演奏を聴くすべを学んだ」自分が神童だったとも、ヴィルトウオーソであるときさえも思わないというスターンだが、それでも若きアイザックは十五歳でバッハの《二つのヴァイオリンのための協奏曲》を舞台上で師匠と共演した。その翌年にあたる一九三六年には、アイザックはピエール・モントウーそしてオットー・クレンペラーの指揮で演奏する。一九三七年十月十一日、ニューヨーク・タウンホールで最初のリサイタルをおこなうが、批評記事に落胆させられる。そして「まだ勉強しなくてはいけない」と理解したそうだ。

素晴らしい演奏活動の欠点

多くの慰問演奏をしたのち、一九四三年にニューヨークのカーネギー・ホールで最初のリサイタルを開催することがきつかけとなり、順調なキャリアをスタートさせる。翌年、デイミトリ・ミトロプリオスの指揮によるニューヨーク・フィルハーモニー管弦楽団と共演。一九四五年、スターンは最初のアルバムをコロンビアで（ベートーヴェンの《ピアノとヴァイオリンのためのソナタ第七番》をアレクサンドル・ザークンのピアノと）レコーディングする。長期の独占契約によるコラボレーションのスタートだ。この先五十年続く共作活動をベースにして、見事なディスコグラフィが生みだされる

ことになる。翌年、アイザック・スターンは映画『ユーモレスク』で俳優ジョン・ガーフィールドのヴァイオリン演奏の吹き替えを担当し、さらに映画『わが心に歌えば』ではスターンが昔から崇拜の念を抱いているウジェーヌ・イザイの役を演じた。ピーチャム、ウォルター、オーマンディ、バインスタイン、セルといった大指揮者と演奏する。さらにその頃、最初のグアルネリ・デル・ジェス「パネット」（二七三七年製）を購入。一九六〇年代半ばまでスターン最愛の楽器となり、その後も一九九四年まで所有していた。一九四八年、ルツェルン音楽祭に出演したのが初めてのヨーロッパでの演奏となった。そして一九五〇年、第一回ブラド音楽祭にパブロ・カザルスと共に参加し、カザルスとはその翌年のペルピニャンとブラド、さらにのちにはプエルトリコ音楽祭でも共演する。その頃に幾つもの協奏曲（ハイドン、チャイコフスキー、モーツァルトのK二二六、バッハ、メンデルスゾーン、ブラームス）を初めて録音した。一九五六年の冷戦下、ソヴィエトに招かれた最初のアメリカ人の音楽家の一人となり、そこで出会ったダヴィッド・オイストラフと長く深い友情で結ばれる。同じく、スターンはフランスとフランスの聴衆とのあいだに特別な親近感を育てていく。精緻で明快なフランス語で、フランス料理、銘柄ワイン、そして無論のことフランス製の弓、その立派なコレクション（F・X・トゥルト、ベルソワ、N・キトゥル、E・パジヨ、D・ペカット、ヴォワラン、アンリ、そしてイザイが所有していたサルトリ）について語った。

室内楽への情熱

カザルスとの出会いが決定打となり、あらためて「音楽家である幸運と幸福」をスターンは痛いほど感じとった。その流れからスターンは、アレクサンダー・シュナイダー、ウィリアム・プリムローズ、ポール・トルトリエとの室内楽に、活動の多くを割くようになる。

一九六〇年代初頭、スターンはユージン・イストミン、レナード・ローズと三重奏団を結成した。この三重奏団は世界的な名声を獲得し、一九八四年のレナード・ローズ（チェリスト）死去まで演奏し続け、ベートーヴェン、ブラームス、シューベルト、メンデルスゾーンの三重奏曲をレコーディングした。一九六五年、スターンは二挺めとなるグアルネリ・デル・ジェスを購入する。一七四〇年製の素晴らしい名器はかつてウジェーヌ・イザイが所有していたもので、スターンは生涯この楽器を大切にした。

ヴァイオリニストとしての活動の余白で、アイザック・スターンはアメリカの音楽界にきわめて強い影響力を持つ著名人となり、国立文化評議会の音楽部門の責任者として多くを取りしきった。一九六〇年からニューヨークのカーネギーホール運営委員会の会長に就任し、解体の危機に瀕していたこの有名ホールを救い、さらに運営にも努めた。一九七九年、中国への演奏旅行をおこない、その模様を撮影した映画『毛沢東からモーツアルトへ』は一九八一年のアカデミー最優秀長編記録映画賞を受賞した。アイザック・スターンは、ウィリアム・シューマン、レナード・バーンスタイン、ジョージ・ロックバーク、ペンデレツキ、デュティユー、マックススウェル・デーヴィズといった同時代の作曲家に多くの曲を書かせた。ユードイ・メニューインとは対照的に、アイザック・スターンはホロコース

ト記念イベントでの演奏をつねに拒否している。イスラエル政府とは密な関係結び、真の大使として文化センターやイスラエル・アメリカの財団とのコラボレートをおこない、イスラエルの若手演奏家に助言や支援を惜しまず、それ以外にも、紛争が起きるたびに最前線に赴いて演奏した。イツァーク・パールマン、ピнкаス・ズーカーマン、シュロモ・ミンツ、五嶋みどり、ヨーヨー・マといった若いヴィルトゥオーソが順調なキャリアを築けるようにと心を砕き、彼らの大きな力となった。クラスを受け持つて定期的に同じ生徒にレッスンを、という意味での教師ではなかったが、それは教育者としての責任とソリストとしての演奏活動は両立できないというスターン自身の判断によるものであり、それでもマスタークラスでのレッスンはよくおこない、特に晩年にはその比重が増大した。天才児との出会いはよくあるのかと質問されたときの、スターンのいつもの返答はよく知られている。「天才はめつたにいないが、天才児の親というのはしよつちゅう会うね」

一九八七年にスターンは、ヨーヨー・マとエマニエル・アックスと新しくピアノ・トリオを組み、それまで彼が一度も録音したことがない室内楽曲に取り組んだ。死の一年前、まだ若々しさに満ちあふれていたスターンが「すばらしきかな、わがヴァイオリン人生」という自叙伝を出版し、バーナード・シヨアの「若くして死ぬべきだ。ただし、遅ければ遅いほどいい」という格言を自分のものとしたかのような印象を与えた。二〇〇一年九月二十二日、ニューヨークの世界貿易センターがテロによって崩壊した数日後にスターンは没した。

彼のステージを聴いたことがある者は、その音に表われた稀有なる人間性、息を飲むほどの説得力を一生忘れないだろう。だが、音楽の前にひれ伏すような思いの深さこそが、おそらくスターンの最大の特長であった。

使用楽器

ガアルネリ・デル・ジェス「パネット」(1737年)

1947年にスターンが購入し、1994年に手放した。2005年以降、所有者であるスイス銀行からルノー・カピュソンに貸与。

ガアルネリ・デル・ジェス(1749年)

ウジェーヌ・イザイの所有楽器で、イザイ直筆で「このヴァイオリンはわが音楽人生の忠実な同伴者だった」と書かれた札がついている。現在はピンカス・ズーカーマンの使用楽器。

ストラディヴァリ(1721年)「クルーズ」

ロドルフ・クルゼール(クロイツェル)の所有楽器だった。

カルロ・ベルゴンツィ

現在はパーヴォ・ベルグンドの所有楽器。

G. B. グアダニーニ(1750年)

G. B. グアダニーニ(1754年)

現在はボリス・ベルキンの所有楽器。

J. B. ヴィヨーム(1846年)「皇帝(ツアー)」

著作

『すばらしきかな、わがヴァイオリン人生』(2000年)

CD-ROM

[No.40] バーンスタイン：プラトンの饗宴によるセレナード 第1楽章

シンフォニー・オブ・ジ・エア(レナード・バーンスタイン指揮) / 1956年4月19日録音 / コロンビア ML 5144 / 再収録 ソニー・クラシカル SM3K 45956 / (7'00)

セレナードの世界初録音からの抜粋。曲を献呈されたスターン自身による初演。

[No.41] J. S. バッハ：ヴァイオリン協奏曲 第1番 イ短調 BWV1041

第2楽章

ブラド祝祭管弦楽団(パブロ・カザルス) / 1950年6月16日録音 / コロンビア ML 4353 / 再収録 ソニー・クラシカル SMK 58982 / (7'40)

第一回ブラド音楽祭でのパブロ・カザルス指揮による演奏。カザルスのことをスターンは「途方もない庭園への扉を開いてくれた人物」と言っていた。

Arthur Grumiaux

(1921-1986)



レコードのプレス工場でのアルテュール・グリュミオー。

©Hans Kahan/SOFM.

アルテュール・グリュミオー

誰もが認めるヴュータンとイザイの後継者

一九八六年にアルテュール・グリュミオーはあまりにも早い死を迎える。それは洗練の極致とも呼ぶべき稀少な演奏家が音楽の世界から失われたことを意味した。グリュミオーは扇情的であることを好まず、仰々しさや舞台上での銜^{くち}いや過剰な表現を避けた。虚飾とは無縁の芸術家であった。グリュミオーは作曲家のメッセージを伝えるのに、演奏者はできるだけ黒子に徹するべきだとした。アンリ・ヴュータン、ウジエヌ・イザイ、アルフレッド・デュボワといったベルギー楽派の後継者と呼ばれ、アルテュール・グリュミオーはその清澄な響き、そしてエレガントな演奏スタイルで一つの時代を築いた。

ヴァイオリンだけではなくピアニストとしても

アルテュール・グリュミオーは一九二二年三月二十一日、ベルギーのブラバン・ワロンにある村ヴィレール・ペルウインに暮らす貧しい家庭に生まれた。三歳になった本人の強い意志を受け、祖父がソルフェージュとヴァイオリンの初歩を教え、すぐにアルテュールのヴァイオリンの素晴らしい才能が

明らかとなった。非凡な耳の持ち主であり、五歳で最初の演奏会をおこなった。翌年にはピアノを始め、シャルルロワ音楽院に入学、その五年後にヴァイオリンとピアノの両方で的一等賞を獲得して卒業。ブリュッセル音楽院への入学には二つの楽器のうちどちら一つという選択を迫られ、ウジェーヌ・イザイの弟子、アルフレッド・デュボワが担当するヴァイオリンのクラスに十一歳で迎えられた。並行して和声学、フーガ、対位法を学ぶ。一九三九年のベルギー国内コンクールでヴェーターン賞および第一位を獲得し、それからパリへと旅立ち、夏のあいだジョルジュ・エネスコの指導を受け、ヴァイオリンだけではなく作曲の手ほども授けられた。

アルフレッド・デュボワの助手、次いで後継者となる

ベルギーへ戻るとすぐ、十八歳にしてアルフレッド・デュボワの助手となり、シャルル・ミュンシユの指揮によりブリュッセルでのデビューを果たすが、戦争の勃発で演奏活動をいったん中断する。ドイツ人からドレスデン州立管弦楽団のコンサートマスターの地位を提示されるが、それを拒否。そのせいで戦時中は占領軍司令部から身を隠さねばならなくなり、その時期は師であるアルフレッド・デュボワの横で弦楽四重奏団の第二ヴァイオリンを務めた。解放軍が到着すると、グリュミオーはウォルター・レックに見いだされ、演奏会とHMVでのレコーディングの最初の契約を取り交わした。グリュミオーがロンドンでの演奏活動を一九四五年に再開すると、きわめて純度の高い古典美と抑制の効いたヴィルトゥオーソに観客はすぐさま魅了された。同じ年、献呈者であるヤッシャ・ハイフェツ

ツがその八年前に初演したウィリアム・ウォルトンの《ヴァイオリン協奏曲》のヨーロッパ初演を手がける。一九四九年、ブリュッセル音楽院のデュボワのクラスを教授として引き継ぎ、一九五一年にはボストンでモーツァルトの《ヴァイオリン協奏曲第三番》とラヴェルの《ツイガヌ》を演奏してアメリカ・デビューを飾った。

伝説のデュオ

一九五四年十一月、再発見されたパガニーニの《ヴァイオリン協奏曲第四番》の現代における蘇演をパリのサル・プレイエルでおこなう。二十五歳上だったクララ・ハスキルとブラドで出会ったことが、のちのグリュミオーにとって大きな意味を持つ。彼らは出会うなり音楽的に共感しあい、その後も少なからぬ影響を互いに与えた。二人でのデュオは十年も継続（一九六〇年のクララの死まで）し、その古典美をきわめた様式を生かしてモーツァルト、シューベルト、ベートーヴェンの曲目で他を圧倒する功績を残した。アドルフ・ブッシュとルドルフ・ゼルキン、シモン・ゴールドベルクとリリー・クラウス、といった戦前に一世を風靡したデュオと肩を並べ、伝説となった。グリュミオーは楽器については偏執的なこだわりを持ち、演奏会直前になって楽器職人にどう調整すべきかの意見を求めることも珍しくなかった。あるときなど、ピアノと合わせての稽古をしていてヴァイオリンの調整についての不満がとまらないグリュミオーに対し、ふだんはそんなことを決して口にしなないハスキルがついに堪忍袋の緒を切らし、こう叫んだ。「アルテュール、いいかげんにしてちょうだい、あなたの

ヴァイオリンの愚痴にはもううんざり！」

謙虚な君主

アルテュール・グリユミオーはベルギー国王ボードゥワン一世によって一九七二年に男爵に叙爵（パガニーニと同じ）され、一九八六年十月十六日に没した。謙虚で飾り気のない人物にして、洗練された貴族という余韻を残した。膨大なディスクグラフィイは、作品数にして二四〇以上にのぼり、グリユミオーのレパートリーの幅広さ、技巧派や二十世紀作品というよりはバロック、古典、ロマン派の作曲家に傾倒していたことをうかがわせる。官能的な響き、細部へのこだわり、自然なフレージング、濁りが皆無のイントネーション。すべてにおいて永遠に聴衆の記憶に深く刻まれ、モーツァルトの名手と呼ばれるであろう。同業のヘンリク・シェリングの次の言葉で締めくくりたい。「モーツァルトをどうやって弾くかを教えてくれた人」である、と。

使用楽器

ストラディヴァリ (1715年) 「ティティアン」

エフラム・ジンバリストの所有楽器だった。

ストラディヴァリ (1727年) 「ジェネラル・デュボン」

現在はジェニファー・コーの使用楽器。

ガルネリ・テル・ジェス (1744年) 「ヘメル」

現在はウート・ウーギの所有楽器である。

J. B. ヴィヨーム

G. B. グアダニーニ (1773年)

現在はジョゼフ・シルヴァースタインの所有楽器である。

CD-ROM

[No.42] モーツァルト：ヴァイオリンソナタ 第40番 変口長調 K454

第1楽章

クララ・ハスキル (ピアノ) / 1956年1月録音 / フィリップス A 00338 L / 再収録フィリップス PHCP 4908 / (7'13)

アルテュール・グリユミオーとクララ・ハスキルによるデュオは、音楽史上の奇跡と呼ぶにふさわしいデュオであった。これぞピアノとヴァイオリン、そして相互理解と共感、指向性、息づかい、弓先で聴きあうエモーションの共有。すべてにおける頂点である。洗練とは何かを教えてくれる。

[No.43] ブラームス：ヴァイオリンソナタ 第2番 イ長調 Op.100

第3楽章

アルテュール・グリユミオー (ピアノ) / 1959年10月録音 / フィリップス 802839 LY / 再収録フィリップス PHCP 4933 / (5'01)
ヴァイオリニスト本人がピアノ伴奏もしているというきわめて珍しい音源。

Ida Haendel

(1924-)



イダ・ヘンデル

七十年を超える舞台活動

二十世紀の偉大な女性ヴァイオリニストのなかでも、イダ・ヘンデルは誰よりも充実したキャリアの持ち主と言えよう。

彼女はポーランドのヘウムで一九二四年十二月十五日（生年については一九二三年から一九二八年まで異説がある）に生まれた。父親の強い意向により、ワルシャワ音楽院のミスチスワフ・ミハロヴィチ門下でヴァイオリンを始め、七歳で最初の演奏会をおこなない、十歳でフーベルマン・コンクールの第一位となる。パリでヨーゼフ・シゲティのもとで学ぶための奨学金を獲得するが、結局はカール・フレッシュにつくことを決め、ベルリンそしてロンドンでフレッシュに長く師事する。他にもジョルジュ・エネスコ、シモン・ゴールドベルク、ロマン・トーターベルクのレッスンを受けている。一九三五年、ヴィエニャフスキ・コンクールに最年少で出場（ジネット・ヌヴーがダヴィッド・オイストラフを抑えて第一位となった）して第七位となる。一九三六年、ロンドンのクイーンズ・ホールでのデビュー・リサイタルにて注目された。その数ヶ月後、ブラームスの《ヴァイオリン協奏曲》をサー・ヘンリー・ウッド指揮で演奏し、その演奏に感銘を受けた指揮者はのちにこう書いている。「彼

女がああ協奏曲を見事な響きと情感で弾きこなすのを聴いていると、まるで私の横で旧友イザイその人が演奏しているのではないかと思つたほどだ」

イギリスを第二の祖国として

その三年後にイギリスに移り住み、一九四〇年八月から一九四二年十二月にかけてイダ・ヘンデルはデッカで最初の録音をおこない、ヴィルトウオーソの小品およびベートーヴェン、シューベルト、モーツァルトのソナタ三曲のレコードをリリースした。戦時下で物資が制限され、空襲のおそれもあったことから数年間はスタジオが閉鎖されたが、終戦間近になってチャイコフスキー、さらにメンデルスゾーンとドヴォルザークの《ヴァイオリン協奏曲》、ラロの《スペイン交響曲》、ピアノとの数曲をレコードにした。一九四八年にHMVと契約を結び、第一弾としてマックス・ブルッフの《ヴァイオリン協奏曲》を創設されたばかりのフィルハーモニア管弦楽団とラファエル・クーベリック指揮でレコーディングした。翌年、シベリウスの《ヴァイオリン協奏曲》の演奏をラジオで聴いたという作曲家本人から熱意のこもった称賛の手紙を受け取る。アメリカ、次いで世界中で演奏するようになるが、ヨーロッパでは特にイギリスで活発な演奏活動をおこなっている。一九五二年、モントリオールに家族で移住するが、イギリスでの定期的な滞在を続ける。イギリスの市民権を得て、同時代の作曲家のレパートリーに興味を持つようになり、イギリスの音楽を広める大使となつてブリテン、エルガー、ベンジャミン・フランケルの協奏曲を、ラファエル・クーベリックやセルジウ・チェリビダッケといっ

た偉大な指揮者と共に演奏した。一九六〇年代半ばにはブラハでチェコ・フィルハーモニー管弦楽団と数枚のレコードを出す。その頃から、デイスコグラフィーが数回にわたつて中断した。一九七〇年代末にはスタジオ録音に復帰し、あらためて一九九〇年代には彼女にとって唯一のバッハの《無伴奏ヴァイオリンのためのソナタとパルティータ》全曲（テストメント）と、ウラジミール・アシケナージとの共演によるリサイタルでのソナタ（デッカ）などのレコーディングをおこなつた。一九四七年から、ほぼ毎年イスラエル・フィルハーモニー管弦楽団と共演し、一九八二年にはテルアビブでのフェルマンの生誕百周年を祝う音楽祭に参加した。

イダ・ヘンデルは主要な国際コンクールの審査員をしばしば務めている。フィンランドからシベリウス・メダルを授与されたのち、一九九一年には英連邦王国より大英帝国勲章コマンダー（CBE）を授けられた。二〇〇六年にはポーランドへ戻つてヘウムでリサイタルをおこない、故郷の街での最初の演奏会からの七十五周年を祝つた。その後、ロンドンとマイアミで半々の生活を送っている。

デイスコグラフィーはEMIからリリースされたものが多く、主要なものとしてはベートーヴェン、ブラームス、ブリテン、ブルッフ（第一番）、ドヴォルザーク、エルガー、グラズノフ、メンデルスゾーン、ペツテション（第二番）、シベリウス、チャイコフスキー、ウォルトン、ヴィエニャフスキの《ヴァイオリン協奏曲》、そして多くのヴィルトウオーソの小品が挙げられる。

イダ・ヘンデルはルイージ・ダッラピッコラの《タルティニア第二番》を一九五七年に、アラン・ベツテションの《ヴァイオリン協奏曲第二番》を一九八〇年に初演した。

 **使用楽器**

ストラディヴァリ (1699年)

ストラディヴァリ (1726年)

 **著作**

『ウーマン・ウィズ・ヴァイオリン』(リトルハンプトン・ブック・サーヴィス限定版/ロンドン/1970)

 **CD-ROM**

[No.46] ベートーヴェン：ヴァイオリン協奏曲 二長調 Op.61 第3楽章

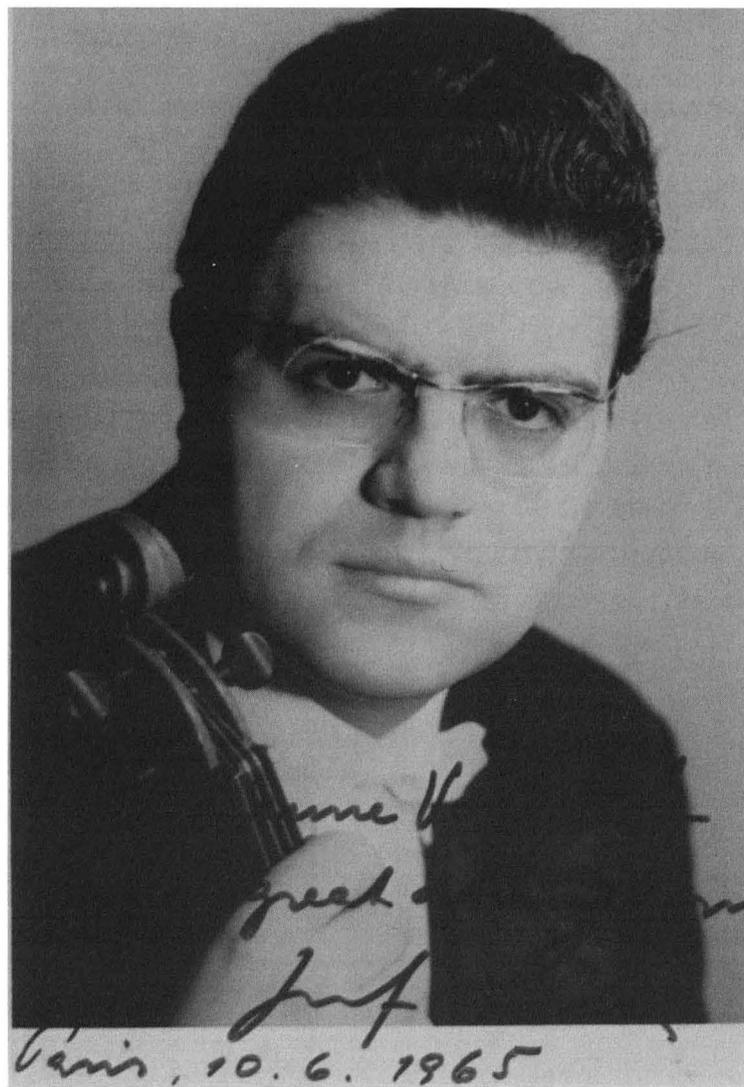
フィルハーモニア管弦楽団(ラファエル・クーベリック指揮) / 1949年9月15～16日録音 / HMV C 4126-31 / 再収録 テスタメント SBT 1083 / (9'30)

この音盤が最初に出たとき、先行するクライスラー、ハイフェッツ、メニューイン、シゲティ、フーベルマンといった大ヴァイオリニストのレコードと同格に扱われた。まっとうな様式感と堂々としたタッチ。世に出た時点で彼女は偉大な奏者としての風格を身につけていた。

カデンツァはヨアヒム作。

Josef Suk

(1929-2011)



ヨゼフ・スーク

アントニン・ドヴォルザークの曾孫

ヨゼフ・スークはプラハで一九二九年八月八日に生まれた。有名な一族の出身で、同姓同名の作曲家ヨセフ・スークの孫であると同時に、アントニン・ドヴォルザークの曾孫でもある。ヴァイオリンを六歳で学び始め、最初は父親から手ほどきを受け、次いでヤロスラフ・コチアンの弟子となり、一九四〇年にプラハで最初の公開演奏をおこなった。数年のあいだヴァイオリンの勉強を中断したのち、ヨゼフは十八歳でヴァイオリンを再開し、チェコきつての教授と呼ばれたヤロスラフ・コチアンのプライベート・レッスンをあらためて受けるようになり、それはコチアンが死去するまで続いた。並行して一九四五年から一九五一年にかけてプラハ音楽院で学び、プラハ芸術アカデミーに進学して二年のあいだアレクサンデル・プロツェクに師事した。一九五〇年からプラハ弦楽四重奏団の第一ヴァイオリンを務め、翌年にはピアノリストのヤン・パネンカ、チェリストのミロシュ・サードロ（のちにサードロが抜けてヨゼフ・フツコロが代わりに入った）と共にスーク・トリオを結成。一九六七年、同じようにして彼はピアノリストのジュリアス・カツチェンとデュオを組み、そこにチェリストのヤーノシュ・シュタルケルを加えてのピアノ・トリオも有名なものとなったが、アメリカのピアノリストであるジュリアス・カツチェンが一九六九年にあまりにも早い死を迎えたため、このトリオ自体も残念

ながら短命に終わった。一九五〇年代半ばには、ヴァイオリンとヴィオラの両方の奏者として世界中で活動をするようになり、特にチェコ・フィルハーモニー管弦楽団とのツアーが多かった。その演奏における非の打ちどころのない古典美、そして清澄な響きが多くの人々に愛された。

偉大なチェコの伝統

一九六四年、ヨゼフ・スークはクリーヴランド管弦楽団との共演でアメリカ・デビューを果たし、長期の演奏旅行をおこないアメリカの主要なオーケストラの数々との演奏会に出演した。一九七四年にプラハ・スーク室内管弦楽団を創設し、一九八一年からはその芸術監督を務める。ボフスラフ・マルティヌーの《ヴァイオリン協奏曲第一番》をゲオルク・シヨルティ指揮によるシカゴ交響楽団と初演し、一九八九年にはヤナーチェクの《ヴァイオリン協奏曲／魂のさすらい》を録音した。

一九八〇年にウィーン音楽大学の教授に就任。一九七〇年にはチェコの芸術選奨、一九七四年にチェコの国家芸術功労賞に叙され、さらにヨゼフ・スークは二〇〇二年にレジオン・ドヌール勲章を授与された。ソナタのパートナーとしては、まずパツハとヘンデルのソナタを共に録音したクラブサン奏者のスザナ・ルジコヴァ、一九九二年にドキュメンタリー映画として撮影された記念碑的な演奏会でスークと共演したチェコのピアニストであるルドルフ・フィルクスニーを挙げべきだろう。二〇〇一年に舞台から引退し、最後に演奏会のかたちでヴァイオリンを弾いたのは二〇〇四年のプラハの春音楽祭で、彼の祖父の没後百周年を記念するイベントだった。セヴシツク、クーベリック、プ

シホダという偉大なチェコ・ヴァイオリンの系譜に連なる巨星スークは、二〇一一年七月六日に没した。

幅広いデイスコグラフィーには、モーツァルトの《ヴァイオリンとヴィオラのための協奏交響曲》をスーク自身が二つのパートのソリストとして録音したもの（一九七九年）がある。他にもジュリアス・カッチェンとヤーン・シュ・シュタルケルとのブラームスの《ソナタ》および《ピアノ三重奏曲》（デッカ、一九六七年から六八年）の名演奏は、末長く聴かれていくことだろう。有名で規模の大きなヴァイオリン協奏曲の数々と、ヴァイオリンのレパートリーを代表するソナタ集以外では、スークは多くの三重奏曲、四重奏曲、五重奏曲の録音も残している。さらにヨゼフ・スークのおかげで多くのチェコ音楽を聴くことができる。特に、彼の祖父であるヨゼフ・スークの作品に新たな命を吹き込んだことにリスナーとしては感謝したい。

使用楽器

G. B. グァダニーニ (1758年) 「ex- ヴュータン」

アンリ・ヴュータン、次いでカール・フレッシュの所有楽器だった。

グアルネリ・デル・ジェス (1744年) 「オレンジ公」

ストラディヴァリ (1783年) 「スーク」

彼の祖父ヨセフ・スクの所有楽器だった。

ストラディヴァリ (1710年) 「カンポセリーチェ」

アンリ・ヴュータン、次いでヴァーシャ・プシホダの使用楽器だった。

ストラディヴァリ (1721年)

ミツシャ・エルマンの所有楽器だった。

ストラディヴァリ (1729年) 「リボン」

G. B. ヴィオッティの所有楽器だった。

J. B. ヴィヨーム

CD-ROM

[No.53] スク：バラード 二短調 Op.3b

ヤン・パネンカ (ピアノ) / 1966年2月録音 / Supraphon SUA

10777 / 再収録 Supraphon SU 3777-2-2 / (8'43)

祖父が作曲したうちの一曲。スークは祖父の作品をあらためて広めることに熱心だった。

Christian Ferras

(1933-1982)



クリスティアン・フェラスとエティエンヌ・ヴァトロ、1964年頃。
エティエンヌ・ヴァトロのプライベート写真より

クリスティアン・フェラス

ヴァイオリンの天性

第二次世界大戦が終わると、フランスのヴァイオリン界を二つの大きな悲劇が襲った。一九四九年にジネット・ヌヴーが事故死、その四年後に同じくジャック・ティボーが事故死したのだ。一九八二年のクリスティアン・フェラスのあまりにも早すぎる死は、世界の宝ともいうべき才能がまたしても失われたことを人々に痛感させた。フェラスこそ、魔法を思わせる弓の使い手であり、真の才能に恵まれたアーティストの一人だった。

ジャック・ティボーとジノ・フランチェスカッティに続いて、フレンチ・ヴァイオリンの旗を高くに掲げた人物がいたとすれば、それは他ならぬクリスティアン・フェラスである。フェラスはヴァイオリンのために生まれたような才能、天性の音、天性の奏法の持ち主だった。その力強さ、奥深い響き、熱情にすぐさま注目したのがヘルベルト・フォン・カラヤンだった。フェラスは一九六〇年代半ばから指名を受け、ヴァイオリンのレパトリーを代表する《ヴァイオリン協奏曲》をカラヤンの指揮で演奏するようになる。カラヤンの目は確かで、死後二十年以上を経てもなお、残された録音を通してフェラスの演奏に魅せられる音楽ファンは増えるいっぽうだ。特に今日の若いヴァイオリニストたちがいまなおフェラスのヴァイオリンに熱狂していることは特筆すべきことである。

クリスティアン・フェラスは一九三三年六月十七日に北フランス、トゥケで生まれた。アマチュアのヴァイオリニストの父から七歳でヴァイオリンの手ほどきを受け、一年後にニース音楽院へ入学し、ウジェーヌ・イザイの弟子であるシャルル・ピストウジのクラスに入る。一九四二年、九歳にしてニースでオーケストラと共演してデビュー。十一歳でニース音楽院を一等賞で修了すると、一九四四年にパリ音楽院へ進み、ルネ・ベネデッティのヴァイオリンのクラスとジョゼフ・カルヴェの室内楽のクラスに入った。一九四六年、二つの科目を一等賞にて修了すると、十三歳でガストン・ブーレ指揮によるパリ・デビューを果たした。一九四七年、デッカでデビュー・アルバムをレコーディング。翌年、スヘフェニンゲン国際コンクールで第一位を獲った。そのときに偉大なヴァイオリニストにして作曲家でもあるジョルジュ・エネスコに注目され、彼のもとで研鑽を積む。そしてエネスコはフェラスにとって大切な導き手となる。「他の何人かの教授からも技術的なことを仕込まれたとはいえ、私は自分のことを基本的にイザイの弟子だと思っています」と、フェラスのちに書いている。一九四九年にロン・テイボー国際コンクールで第二位（一位なし）となり、ソリストとしての順調なキャリアをスタート。その見事な才能を発揮していく。熱く直観的な演奏、パワフルな響き、抑制の効いた技巧によって、フェラスは聴衆と批評家を魅了する。

フェラス・バルビゼによるデュオ

ロン・テイボー・コンクールに出場した際に、フェラスは自分より十一歳上のピアニスト、ピエー

ル・バルビゼ（一九二二—一九九〇）と出会う。二人はデュオを結成してその名を世界にとどろかせ、三十年以上にわたって世界中で演奏し、ドビュッシー、フランク、ルーク、フォーレは無論のこと、ベートーヴェン、ブラームス、シューマン、エネスコといったデュオのレパートリーにおける傑作ソナタの数々を録音した。一九五一年にはカール・ベーム指揮によってベルリンで演奏し、一九五九年にはシャルル・ミュンシュ指揮でブラームスの《ヴァイオリン協奏曲》を弾いてアメリカ・デビューを果たし、その頃から国際的なキャリアを本格的にスタートさせた。同年、ブラド音楽祭で、ヴィヘルム・ケンプ、パブロ・カザルスとの三重奏を演奏。一九六四年にはヘルベルト・フォン・カラヤン指揮でベルリン・フィルハーモニー管弦楽団とベートーヴェン、ブラームス、シベリウス、チャイコフスキーの《ヴァイオリン協奏曲》をレコーディングした。フェラスのテンペラメントが古典よりはロマン派で艶やかに花開くという見方をするなら、二十世紀の作品もまた極めつけの名演ぞろいだ。自分に献呈された作品も含め、フェラスは数多くの新曲を初演している。フェデリコ・エリザレデの《ヴァイオリン協奏曲》（一九四三年）、クロード・パスカルの《ヴァイオリンとピアノのためのソナタ第一番》（一九四六年）、オネゲルの《無伴奏ヴァイオリンのためのソナタ》（一九四八年）、セルジュ・ニツクの《ヴァイオリン協奏曲第一番》（一九五七年）と《無伴奏ヴァイオリンのためのソナタ》（一九六五年）、ギュラ・バンドの《ハンガリー協奏曲》（一九五八年）など。

一九七五年、クリスティアン・フェラスはパリ国立高等音楽院の教授に就任した。健康状態を崩し、舞台から距離を置くようになるが、一九八〇年代初頭に演奏活動への復帰を試みた。一九八二年八月二十五日にヴィシーで最後の演奏会をおこない、九月十四日にパリで自殺した。享年四十九歳。

使用楽器

ストラディヴァリ(1721年)「プレジデント」

ストラディヴァリ(1728年)「ミラノロ」

ジョヴァンニ・パティスタ・ヴィオッティ、ニコロ・パガニーニ、テレザ・ミラノロといった名手の手を経てきたが、現在はコリイ・セロヴシェクの演奏楽器となっている。

CD-ROM

[No.55] ブラームス：ヴァイオリン協奏曲 二長調 Op.77 第3楽章

ウィーン・フィルハーモニー（カール・シューリヒト指揮）／1954年4月

19～20録音／デッカ LXT 2949／再収録 テスタメント 1033／(7'58)

この演奏でフェラスは内臓から響き出るような音、ひと息に歌いあげるような熱のこもった節まわしを聴かせてくれる。音だけではなく、フレージングの魔術師だ。そこにはエネスコからの影響が色濃く、ヴィブラートやポルタメント、とりわけメロディ・ラインを切々と語らせる手法が独特。

クリスティアン・フェラスは百を越える作品のディスクグラフィイを残している。録音時期は三十年（一九四七年―一九七八年）におよび、大きく三つの時代にわけられる。

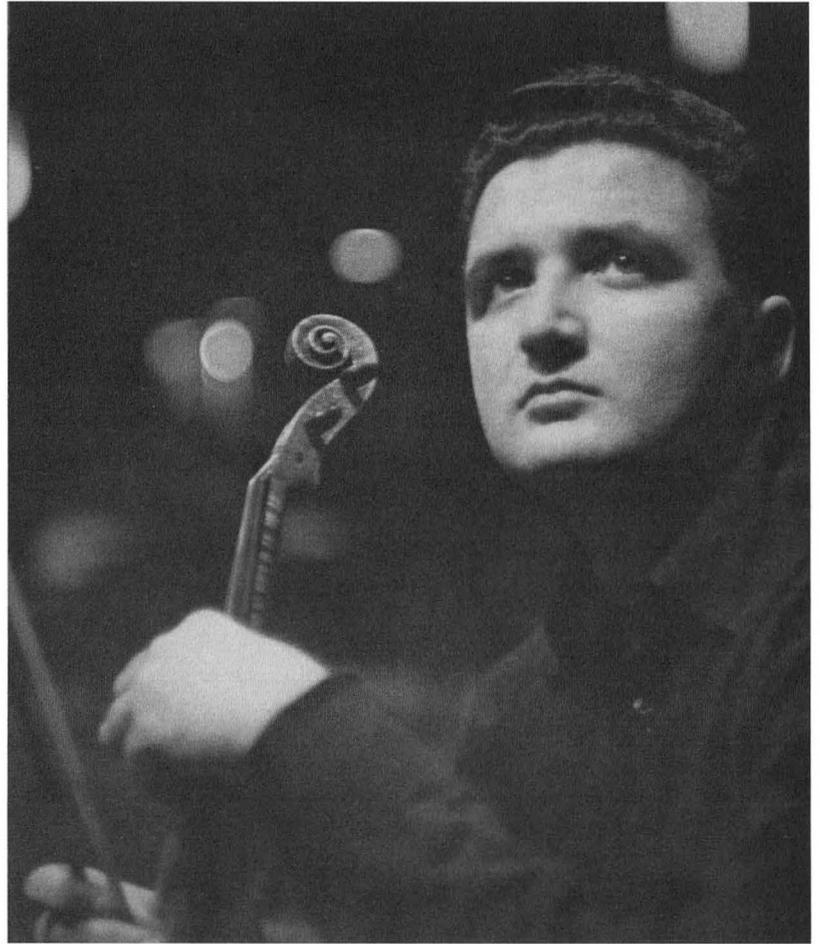
デッカ時代（一九四七年―一九五四年）。エリザルデの《協奏曲》が初期の録音ということになるが、他にもカール・シューリヒト指揮によるブラームスの《ヴァイオリン協奏曲》はフェラスにとってこの曲の初録音であり、あらゆる意味で記念碑的なレコーディングだ。

EMI時代（一九五七年―一九六三年）のレコーディングも宝の山である。バルビゼおよびパレナ弦楽四重奏とのショーン《コンセル》、ユーディ・メニューインとのJ・S・バッハ《二つのヴァイオリンのための協奏曲》、ベルクの《ヴァイオリン協奏曲》二曲、そしてバルビゼとの伝説のベートーヴェンのソナタ全曲など。

ドイツ・グラモフォン時代（一九六四年―一九六八年）は、カラヤンおよびベルリン・フィルハーモニー管弦楽団とのゴージャスな録音が主体となっている。また、ピエール・バルビゼとの共演によるフランク、ルク、ブラームス、シューマンのソナタも忘れてはならない。

Salvatore Accardo

(1941-)



サルヴァトーレ・アッカルド。ジェノヴァでパガニーニ・コンクールを制した栄光の瞬間。

サルヴァトーレ・アッカルド

泰然自若

イタリアのヴァイオリン界は戦後、サルヴァトーレ・アッカルドの出現によって、国際的な評価をあらたに確立した。

アッカルドは一九四一年九月二十六日にトリノで生まれ、アマチュアのヴァイオリニストだった父からヴァイオリンの手ほどきを受け、五歳でナポリ音楽院に入学し、ルイージ・ダンブロジーオ（アウグスト・ヴィルヘルミの弟子）に十年ほど師事した。十三歳でナポリでデビューし、その二年後に音楽院での勉強を修了する。向学心に衝き動かされ、ナタン・ミルシテイン、ダヴィッド・オイストラフのマスタークラスを受講し、次いでシエナのキジアーナ音楽院ではイヴォンヌ・アストリユク（一八八九—一九八〇）のもとで研鑽を積む。イヴォンヌ・アストリユクはかつてジョルジュ・エネスコの助手を務めた人物でもあった。アッカルドの国際コンクール入賞歴は数多く、代表的なものとしてはヴェルチェリのヴィオッティ国際音楽コンクール（一九五五年の第三位）、ジュネーヴ国際コンクール（一九五六年）があるが、ジェノヴァのパガニーニ・コンクールでの優勝によってアッカルドの名は世界で知られるようになった。すぐさまコンチエルト奏者としてのキャリアをスタートさせ、世界中で名指揮者との共演を重ねた。華

やかな技巧派で、アツカルドの力強い響きと、悠然としたステージマナーは聴衆に感銘を与えた。しかしながらも、パガニーニの名を冠したコンクールの覇者というイメージから脱却するには、すなわち彼がパガニーニ演奏のスペシャリストであるという印象をぬぐい去るのには、かなりの時間を要した。

ヴィルトウオーソ、室内楽奏者、教育者

一九六八年、アツカルドはトリノでオーケストラ・ダ・カメラ・イタリアーナを創設し、それからフェリックス・アーヨ、ロベルト・ミケルツチに続いて高名な室内楽団イ・ムジチのコンサートマスターを一九七二年から一九七七年にかけて務めた。同時に教育にも向きあい、一九七〇年代にはシエナのキジアーナ音楽院の教授に就任する。クレモナでも教えるようになり、ここでは特にイタリアの若いヴァイオリニストを育てた。門下生には一九九一年のパガニーニ・コンクールの覇者マッシモ・クアルタも含まれる。一九八二年のパガニーニの生誕二百周年では、アツカルドはパガニーニの《二十四のカプリース》をパガニーニ本人の所有楽器であったグアルネリウス「カノン」を使ってニューヨークのカーネギー・ホールで演奏するという榮譽に輝いた。一九九〇年代初頭、みずからの名を冠した弦楽四重奏団を結成してヨーロッパ中で演奏し、ザルツブルク音楽祭ではマウリツィオ・ポリーニと共演した。ナポリの国際音楽セミナーの顧問を務め、室内楽コンサート企画を担当。自動車事故の後遺症による脳障害で、演奏活動のペースを落とした時期もあった。指揮者として精力的に活動、一九九三年から一九九五年にかけてナポリのサン・カルロ劇場の音楽監督およびプリンシパル・コ

ンダクターを務めた。オペラを指揮することで「ヴァイオリン奏者としてのインスピレーションに喝を入れる」というのが本人の言である。ヴァイオリンだけではなく弦楽四重奏の国際コンクールで定期的に審査員を務めている。一九八二年にイタリア共和国功労勲章（カヴァリエーレ・デイ・グラン・クロッチェ）を授けられた。

幅広いデイスコグラフィ

サルヴァトーレ・アツカルドのデイスコグラフィは幅広く、代表的なものとしてはJ・S・バッハの《無伴奏ヴァイオリンのためのソナタとパルティータ》全曲の二回の録音、パガニーニの《二十四のカプリース》の初回録音、パガニーニの《ヴァイオリン協奏曲》集がある。その他に、マックス・ブルッフの協奏的な作品全集、ヴァイオリンのレパートリーをほぼ網羅した協奏曲の数々、室内楽とヴィルトウオーソ小品（ほとんど知られていないパガニーニ作品も含む）、ヴィヴァルディの《ヴァイオリン協奏曲》の広大な選集も挙げておこう。

アツカルドに献呈された現代作品も多い。おもなものとしてはヤニス・クセナキス（ディクタス）、ウォルター・ピストン（ファンタジア）、フランコ・ドナトーニ（ヴァイオリンのためのアルゴ）など。

アツカルドは偉大な新生イタリア楽派の象徴であり、ジェノヴァの博物館に保存されている一七四二年製のグアルネリ・デル・ジェス「カノン」での演奏、および録音を許された数少ないヴァイオリニストの一人である。

使用楽器

ストラディヴァリ (1717年) 「ex-リエフェンベルク」

ストラディヴァリ (1718年) 「ファイヤーバード」

ストラディヴァリ (1719年) 「ツアーン」

次いでシュロモ・ミンツの使用楽器となった。

ストラディヴァリ (1727年) 「レニエ」

次いでマキシム・ヴェンゲーロフの使用楽器となった。

ストラディヴァリ (1727年) 「ハート」

フリッツ・クライスラー、さらにジノ・フランチェスカッティの所有楽器だった。

ガアルネリ・デル・ジェス (1733年) 「ラフォン」

シャルル=フィリップ・ラフォンの所有楽器だった。

ドメニコ・モンタニャーナ (1742年)

G. B. グアダニーニ

著作

『L'Arte del Violino』(Rusconi刊、1987、ミラノ)

CD-ROM

[No.57] バガニーニ：ヴァイオリン協奏曲 第2番 口短調 Op.7「ラ・カンパネラ」第3楽章

ロンドン・フィルハーモニー管弦楽団(シャルル・デュトワ指揮)／1975年録音／ドイツ・グラモフォン 2530-900／再収録 ドイツ・グラモフォン 463 754-2／(8'55)

華麗な演奏だ。優美で絶妙な抒情性。一時代を築いた全曲集からの抜粋。ピュアで均質な響きから自然に立ちのほるようなベルカントであり、ほんのりと演劇的な味わいも加えられている。

Itzhak Perlman

(1945-)



イツァーク・パールマン

とてつもないカリスマ性

ヴァイオリニストとひとことで言っても、あるヴァイオリン奏者はその存在感で人々を魅了し、別のヴァイオリン奏者はその華麗な技巧で人々に電気ショックを与え、また別のヴァイオリン奏者はその響きで人々の心を揺り動かす。イツァーク・パールマンはそれらを同時に発散させることで聴く者の心を鷲づかみにするが、それだけではない。寛容さ、シンプルスさ、魅力、ユーモア。そういった要素からなるカリスマ性を発揮することで、聴衆の心にさらなるエモーションをもたらす。そんなことができるのはパールマンだけだ。彼が目をつむり、ピアノの譜面台脇に置かれた楽譜の束からアンコール曲を偶然にまかせて抜きとる、あるいは集中しているときの緊張感を独特の身ぶりに見せる、あるいは目くばせ一つで満員の会場の期待感をさらに興奮へと高める。そういった場面を目にしたことがあるなら、パールマンが毎回のステージをどれほど彼ならではの特別なものとしているか、そして、そこに働く眩いほどの魔力を理解できよう。パールマンのリサイタルでは、その場を共有した人々がパールマンと共に笑い、息を凝らし、目に涙を浮かべ、そしてその体験は聴衆の記憶に永遠に刻まれる。パールマンは心の底から自分の聴衆を愛し、聴衆は演奏家の才能にふさわしい熱狂でその愛に応えるのだ。

セレブリティ、膨大なディスクグラフィ、リスベクト、傑出した演奏家たちとの友情。だが、パールマンの生き方や人との接し方はそういった何物にも左右されることなく、年を追うごとに彼の音楽界での露出は（いまでは次第に機会が少なくなってしまうが）まるで祝祭のごとく、いよいよ心待ちにされている。

そのレパートリーは驚くほど幅広い。バッハのソナタおよびバルティータからフリッツ・クライスラーの小品まで、ルクレールのテュオ作品からスコット・ジョプリンの《ラグタイム》まで、イディッシュのフォルクローラ歌曲から二十世紀の《ヴァイオリン協奏曲》まで、演奏効果抜群のヴィルトゥオーソ小品からベートーヴェンの三重奏曲まで、どんな曲であろうとパールマンは同じだけの余裕と同じだけの熱い魂で解釈してのける。その巨大な手におさまると世界有数の美しいストラディヴァリ（一七二四年製の「ソイル」はユーディ・メニューインの所有楽器）は小さく見える。最初の音が奏でられると、不思議なことに世界のどんな大ホールもあまりに狭く感じられる。「芸術を評する立場」の者たちはパールマンのパーソナルな弓の技巧、壮麗なヴィブラート、左手の敏捷性に心を奪われる。それほど技術的なことにこだわりのない音楽ファンですら、パールマンの歌心にこめられた人間性、清澄な響き、さらに、モーツアルトのソナタの優美さからサラサーテ小品の白熱まで彼がいともたやすく弾きこなすのを見て陶然とする。パールマンはそういう情熱を伝える比類なき天性に恵まれている。あるいは、それこそがパールマンの真の魔法なのかもしれない。

テルアビブからニューヨークまで

イツァーク・パールマンは一九四五年八月三十一日、テルアビブでポーランド系の両親のもとに生まれた。三歳でヴァイオリンに惹きつけられるが、四歳でポリオ（急性灰白髄炎）に罹患して両足に麻痺が出てしまう。それでも一年後、彼はヴァイオリンの勉強を始める。最初の教師はカフエのヴァイオリン弾きだった。すぐにテルアビブ音楽アカデミーに入り、八年間をロシア出身の教育者リヴァ・ゴルトガルトのもとで学ぶ。十歳のとき、アイザック・スターンにヴァイオリンを聴いてもらう機会を得て、アメリカで勉強を続けるようにと助言される。一九五八年にテルアビブで最初の演奏会をおこない、アメリカのテレビ司会者エド・サリヴァンに注目され、有名なテレビ番組「エド・サリヴァン・ショー」に招かれて出演した。イツァーク少年はメンデルスゾーンの《ヴァイオリン協奏曲》の最終楽章とリムスキー・コルサコフの《熊蜂の飛行》を演奏してアメリカ中を驚嘆させた。次いで「エド・サリヴァンのスター・キャラバン」と共に二か月にわたるアメリカ・ツアーをおこなう。そして母親とニューヨークに移り住み、ジュリアード音楽院に入学し、数年間をイヴァン・ガラミアンとその助手ドロシー・デイレイのもとで学んだ。この二人の影響により、彼は「ロシア」式の弓の持ち方をやめ、リュシアン・カペーより伝わる「フランコ・ベルギー」方式の弓の持ち方することとなる。一九六三年三月五日、パールマンはナショナル・オーケストラ・アソシエーションとの共演でニューヨーク・デビューを果たし、同じ年にはカーネギー・ホールで演奏会をおこなった。

傑出したカリスマ、全世界的な人気

一九六四年、レーヴェントリット・コンクールで第一位を獲得し、それがきっかけとなり、ニューヨーク・フィルハーモニー管弦楽団などのアメリカ主要オーケストラとの共演機会に恵まれるようになる。アイザック・スターンに背中を押され、さらに高名なアメリカの興行師ソル・ヒューロックの助言を受け、パールマンはキャリアを順調にスタートさせ、同年にはデビュー盤となるチャイコフスキーの《ヴァイオリン協奏曲》をレコーディングする。翌年にはアメリカ・ツアーをおこない、次いで一九六六年から一九六七年のシーズンにはヨーロッパへの初めての演奏旅行に出た。すぐさま、その世代で特に才気あふれるヴァイオリニストであると認められる。ピアニストのダニエル・バレンボイム、ヴァイオリンとヴィオラ両方の奏者であるピンカス・ズーカーマン、チェリストのジャクリーヌ・デュプレとリン・ハレルらと親しくなり、室内楽での共演をする。同様に、ピアニストのウラジミール・アシケナージとデュオを組み、主要なソナタのレパートリーを録音した。驚くほどの才能、自然で余裕のある演奏、輝かしい響き、そして忘れてはならないユーモアのセンス、寛容な気性、聴衆との心のこもった交流によって、パールマンはあつという間に世界中でもっとも人気のある音楽家となった。アメリカのテレビでよく演奏するが、司会者として出演することも多い。

ヴァイオリンの歴史をまたぐレパートリー、膨大なディスクグラフィイ

イツァーク・パールマンのレパートリーはともかく幅広く、バロックから現代音楽までを網羅するが、もちろんロマン派も慈しんで手がけている。ジャズやラグタイムも大好きで、友人であるアンドレ・プレヴィンもしくはオスカー・ピーターソンとよく演奏している。かつて偉大なヴァイオリニストのミッシェル・エルマンがカルーソーと共演したように、パールマンも偉大なテノール歌手であるプラシド・ドミンゴとのデュオでボピュラーな歌曲を録音している。同様にクレズマー・ヴァイオリンやユダヤの伝統民族音楽も好んで演奏する。一九七五年から定期的にニューヨークのブルックリン・カレッジでマスタークラスをおこなっている。さらに世界中のいたるところで障害者のための活動に参加している。

パールマンが献呈された作曲作品にはアール・キム(一九七九)、ロバート・ステイアー(一九八一)があり、初演も彼がおこなった。十年ほど前から指揮活動に身を捧げ、デトロイト交響楽団の首席客演指揮者となり、次いでセント・ルイス交響楽団の音楽監督に就任した。

パールマンのディスクグラフィイはいまだに増え続けており、一人のヴァイオリニストによって録音されたものとしてはかつてない膨大なものとなっている。

使用楽器

ストラディヴァリ (1714年)「ソイル」

ユーディ・メニューインの所有楽器だった。

ストラディヴァリ (1714年)「ex- シンシエイマー」 「ジェネラル・キッド」

ミツシャ・ミシャコフの所有楽器だった。

ストラディヴァリ (1723年)「エスパニョル」

ガアルネリ・デル・ジェス (1743年)「ソーレ」

エミール・ソーレの所有楽器だった。

カルロ・ベルゴンツィ

アンヘル・レイエス、次いでフリッツ・クライスラーの所有楽器だった。

ジュゼッペ・ガアルネリ

のちにミリアム・フリードの演奏楽器となった。

CD-ROM

[No.60] メンデルスゾーン：ヴァイオリン協奏曲 第2番 ホ短調 Op.64
第3楽章

ロンドン交響楽団 (アンドレ・プレヴィン指揮) / 1972年11月27～28
日録音 / HMV ASD 2926 / EMI 5 62591 2 / (6'41)

パールマンの魅力、心のコもった豊麗、千もの持ち味を楽しませてくれる
輝かしい演奏。

[No.61] プロコフィエフ：ヴァイオリンソナタ 第1番 へ短調 Op.80
第3楽章

セウラジミール・アシュケナージ (ピアノ) / 1969年7月録音 / RCA
LSC 3118 / 再収録 RCA BMG 09026 2 / (7'38)

イツァーク・パールマンとウラジミール・アシュケナージの共演による初
めての録音。初共演にして見事なコラボレートであり、のちにこの二人の
コラボレートは伝説となる。この軽快な遊びの部分とドラマティックな部
分の難しいバランスこそ、プロコフィエフの音楽の魔法の精髓で、二人は
息のあった演奏で素晴らしい様式美を創り上げている。

Gidon Kremer

(1947-)



©Magnum Agency

ギドン・クレマー

飽くなき探求心

その審美眼、規律や押しつけへの拒否、折衷主義的な趣味、奏法のアイデンティティそのものを見ても、ギドン・クレマーが類を見ない特別な演奏家だということは歴然としている。反骨精神が旺盛で、危険を好み、つねに未知の領域を探し求める冒険心。同世代のなかで、クレマーだけが他の奏者と一線を画している。そうとしか表現のしようがないのだ。クレマーのことを必要不可欠の革新者にして、勇気ある冒険者だと見る者がいれば、煽動者と呼ぶ者も少なくはない。確かに、数世紀にもわたってその理由を考えることもなく、そんなものであろうと私たちが思いこんでいた約束ごとを、クレマーは端から打ち破っていく。因習主義など意にも介さず、名曲であろうが未知の曲であろうが、自分が取り組む曲に必ず新しさを吹きこみ、どんなときでもそれが初めてであるかのような視点を意識させる。彼の創意、レパトリーの発掘、パーソナルな響きは、そもそもわずか数小節でそれがクレマーの音だとわかるような、突出して個性的で美しい腕前があればこそその持ち味だ。考えてみれば、クレマーはかなり早い時期から、ソリストが好んで弾くような伝統的レパトリーを離れ、埋もれた曲を手がけ、かなりの時間を割いて不遇の作曲家、それも同時代の作品を発見することに情熱を注いでいた。

ダヴィッド・オイストラフ門下でのきわめつけの奇人

スウェーデンおよびドイツ系ユダヤ人の両親のもと、ギドン・クレーメルはラトビアのリガで一九四七年二月二十七日に生まれた。祖父のカール・ブリュックナーは有名な教育者で、父親は教師でもあるヴァイオリン奏者だった。この父からギドンは四歳でヴァイオリンの最初のレッスンを受ける。それからリガの音楽学校でウォルデマー・スツレステプスに習う。十六歳でラトビア共和国コンサートで第一位となり、モスクワ音楽院へ進学するとピョートル・ボンダレンゴとダヴィッド・オイストラフのクラスに入り、オイストラフには一九六五年から一九七三年にかけて八年も師事した。一九六七年、ベルギーのエリザベート王妃コンサートで第三位を獲得。その二年後、ジェノヴァのパガニーニ・コンサートで優勝、同じ年にモントリオール国際コンサートでは第二位。一九七〇年にはチャイコフスキー・コンサートで第一位となった。その頃からソヴィエト国内とヨーロッパで数多くの演奏会をおこなう。一九七五年にはヘルベルト・フォン・カラヤンから招かれてザルツブルク音楽祭に参加し、二年後にはニューヨークのエイヴリー・フィッシャー・ホールでアメリカ・デビューを果たした。一九七〇年代末、ソヴィエトを出てドイツに移り住む。それを境に世界中で演奏するようになり、この世代でもっとも才能と獨創性に満ちたヴァイオリニストとして喝采を浴びる。

ロッケンハウスの魂

一九八一年、オーストリアでロッケンハウス室内楽音楽祭を創設し、毎年夏に最先端の名手と多くの若手音楽家を呼びよせ、みずから先頭に立って、さまざまなジャンルの獨創的なレパートリーによるプログラムを聴かせるようになる。一九九二年にはロッケンハウス音楽祭と同じく、室内楽への愛と精神に則って、自分の共演仲間を核とする室内オーケストラ、クレメラータ・バルティカを結成した。クレーメルいわく、バロック復興の担い手である指揮者、ニコラウス・アーノンクールと一九八〇年代初頭に出会ったことが自分の演奏スタイルの発展に大きな影響をおよぼした。マルタ・アルゲリッチとの火山のようなデュオを結成するかたわら、数年前から、オレグ・マイセンベルク、ヴァレリー・アフアナシェフといったピアニストとも共演や録音を重ねている。ペートーヴェンをはじめ、プロコフィエフ、シューマン、バルトークのソナタをパートナーたちと幾たびも再演しているが、その演奏は否応なく聴き手を新しい世界に引きずりこむ。そこでは美しい音楽が信じがたいほどの優雅さと融けあい、暴力的なまでの至福が濃厚に立ちこめ、次から次へと目が眩むほど精緻な錬金術が繰り返される。クレーメルの幅広いレパートリーでは現代曲が重要な位置を占め、また、その獨創的なディスコグラフィは一人のヴァイオリニストが録音したものとしては他に例を見ないレベルとなっている。現代音楽の擁護者として、アルヴォ・ペルト、アルフレット・シュニトケ、ハンス・ヴェルナー・ヘンツェ、エディソン・デニソフ、ソフィア・グバイドゥーリナ、ギヤ・カンチェリ、ウラディーミル・マルティノフ、ペトリス・ヴァスクス、ヴァレンティン・シルヴェストロフが

ら曲を献呈され、初演をおこなった。最近では、アルゼンチンの作曲家、アストル・ピアソラの音楽に興味を抱いて演奏している。さらにクレームレルには幾つもの著作がある（『ちいさなヴァイオリンギドン・クレームレル自伝』一九九三年、『ロックンハウス・オアシス』一九九六年、『琴線の触れ合い』一九九七年、『クレームレル青春譜 二つの世界のあいだで』二〇〇四年）。一九九七年、ギドン・クレームレルはユーディ・メニュエインのあとを受けてグシュタード音楽祭の監督に就任したが、この交替は二人の傑出した演奏家が自分たちを取りまく世界に向かって完全にオープンマインドである、という共通点で結ばれていることを象徴している。

同じ年、クレームレルはバルト三国出身の才能ある若手奏者二十五人を集め、クレメラータ・バルティカを設立し、世界中でこの楽団とのツアーをおこなうようになる。二〇〇二年から二〇〇六年にかけては、バーゼルで「レ・ミュゼイク音楽祭」の芸術監督を務めた。

芸術表現のあらゆる形式に情熱を傾ける

創意と好奇心にあふれ、芸術表現のあらゆる形式に興味を持ち（ブレル、フェリーニ、カラス、ヴィスコンティ、グレン・グールド、ステファン・グラツペリを等しく愛している）、その奏法は卓越した高揚感とどこまでも自由な精神性が見事に結実したものである。師であるダヴィッド・オイストラフをはじめとする多くの巨匠を心から尊敬しながらも、理想とするモデルは一人もいない。「あらたに自転車を発明しようとしても無駄であると、父にさんざん言われたのですが、何ごとも自分で結論

に辿りつくこと、というのが私の人生における原則です」と、クレームレル。しかも彼はその驚異的な技巧を駆使して、どれほど難しい曲でも、それが実に簡単であるかのようにやすやすと弾きこなしてしまう。真の巨匠だけになせる技だ。人生に対して貪欲であるのと同様に音楽に対しても貪欲であり、クレームレルの数少ない後悔といえは、いまままでほとんど過去を振り返ることがなく、自分のしたことであらためて味わう時間を持ったためしがないことだという。活動を休むことなく、今日のためだけに生き、未来のためだけに生きる。つねに図書館へ行つては文献を漁り、新しいコラボレーションを考え続け、安易な道はそもそも彼の目に入らない。「ですが、私の音楽へのアプローチが古文書の専門家と同じだとは思わないでほしいのです。物心ついた頃からずっと、私は自分にとってエモーショナルな意味を感じられる音楽を弾こうとしてきました。演奏回数が多い曲は、聴衆に気に入られるように弾かねばという現象の犠牲になっています。私にとって、音楽は譜面と演奏者のあいだだけの事柄なのです」（一九九六年十一月、著者によっておこなわれたインタビューより）

キャリアの初期の数年間、クレームレルは祖父が遺したグアダニーニを使用していた。一九七九年から一九八八年にかけては、一七三四年製のストラディヴァリ「ex・パロン・フォン・ファイリツチュ」を使い、次いで一九八八年から二〇〇六年には、かつてフェルディナント・ダヴィッドの所有楽器だった一七三〇年製グアルネリ・デル・ジェス「パイン」を弾いていた。二〇〇六年以降は、一六四一年製ニコラ・アマティ「ハンブルク」を使っている。

使用楽器

グアダニーニ

ストラディヴァリ (1734年) [ex-パロン・フォン・ファイリツチュ]

ガルネリ・デル・ジェス (1730年) [パイン]

かつてフェルディナント・ダヴィッドの所有楽器だった。

ニコラ・アマティ (1641年) [ハンブルク]

著作

『ちいさなヴァイオリンギドン・クレームル自伝』(1993年)

『ロツクンハウス・オアシス』(1996年)

『琴線の触れ合い』(1997年)

『クレームル青春譜 二つの世界のあいだで』(2004年)

CD-ROM

[No.64] イザイ：無伴奏ヴァイオリンのためのソナタ 第3番 イ短調
Op.27 [バラード]

1976年録音 / メロディア C10-10037/8 / 再収録 MFSL MFCD 021 /
(6'12)

圧倒的であると同時に幻視的な録音。過去にリリースされたヴァイオリン録音すべてのなかでも屈指の名演。

[No.65] モーツァルト：ヴァイオリン協奏曲 第5番 イ長調 K219
第3楽章

ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団 (ニコラウス・アーノンクール指揮)
/ 1987年1月録音 / ドイツ・グラモフォン 423 107-2 / 再収録 ドイツ・
グラモフォン 457 009-2 / (8'55)

のちにクレームルの演奏に決定的な影響を与えることになったという、ニコラウス・アーノンクールとの出会いを証言する録音。

カデンツァはR. レヴィン作。

番外編 〈クライスラー以前の巨匠、偉大なる教育者たち〉

以下アルファベット順に紹介するのは、教育者として著名な人物、ならびに、過去の偉大なヴィルトゥオーソたちの略歴である。彼らの存在がなければ、本書の主役たちがその才能を発揮する機会は永遠になかったかもしれない。

レオポルト・アウアー

Auer, Leopold (一八四五一―一九三〇)

ハンガリー人のヴァイオリニストであり著名な教育者、のちにアメリカに帰化。ヴェスプレーム生れで、同地方の生誕者にはヨーゼフ・ヨアヒムやカール・フレッシュュがいる。五歳からヴァイオリンを始め、八歳で入学したブダペスト音楽院で三年間学ぶ。一八五五年にデビューし、メンデルスゾーンの《ヴァイオリン協奏曲》を演奏。翌年にはウィーン音楽院へ送られ、ヤーコブ・ドントにヴァイオリンを、ヨーゼフ・ヘルメスベルガー一世に室内楽を学ぶ。一八六一年、音楽院の入学試験に合格し、パリへ行き、デルファン・アラールのクラスに入ることができたが、すぐにハノーファーへ移り、ヨーゼフ・ヨアヒムのもとで二年間学び、新境地を開く。「ヨアヒムが私の目を開かせてくれました。彼のおかげで私は自分の手だけでなく、頭も働かせることができました。巨匠たちの楽譜を学び、作品

の核心に触れたのです」と、アウアーは語っている。アウアーは十九歳でデュッセルドルフ管弦楽団のコンサートマスター（一八六四―六五）、次いでハンブルク管弦楽団でコンサートマスターとなり（一八六六―六七）、両方の都市で弦楽四重奏を弾いている。一八六八年のロンドンでは、アントン・ルビンシテインのピアノ、アルフレド・ピアッティのチェロと共に、ベートーヴェンの三重奏曲《大公》を弾く。

同年、レオポルト・アウアーはアントン・ルビンシテインに後押しされてヘンリク・ヴィエニャフスキの後任者としてサンクト・ペテルブルク音楽院のヴァイオリン科の教授となる。それからほぼ半世紀のあいだ、教授としてロシアの数世代にわたるヴァイオリニストに影響を与え、さらに二十世紀初頭に教育者としての彼の名声に引き寄せられて全世界から訪れたヴァイオリニストたちにも強い影響を与えることになる。またロシア皇帝に仕える宮廷ヴァイオリニストとしてのみならず、ソリスト、オーケストラ指揮者、ロシア音楽協会弦楽四重奏団の第一ヴァイオリンとして十九世紀末のロシア音楽史のなかでも重要な役割をはたしている。レオポルト・アウアーはチャイコフスキの《ヴァイオリン協奏曲》の献呈者の筆頭にあげられながらも、この作品は演奏できないと判断し、十五年にわたって演奏を固辞した。チャイコフスキの死去する数ヶ月前になって、アウアーはこの作品に修正を加え、その後は弟子たちに教えている。一九〇六年以降、アウアーはロンドン、ドレスデン、ノルウェーでも教鞭を執る。一九一七年五月、革命前夜にロシアを離れ、一九一八年二月、アメリカに移り住み、七十三歳にした新たな生活を始める。

アウアーは自分よりも先にアメリカに移住して名声を手にしていたエフレム・ジンバリスト、

ミツシャ・エルマン、さらにはヤツシャ・ハイフェッツといった、かつての弟子たちと再会する。一九一八年三月、ニューヨークで最初の演奏会をおこない、その後、ニューヨーク音楽芸術研究所（ジュリアード音楽院の前身）で教え、一九二八年からはフィラデルフィアのカーティス音楽院でカー・フレツシュの後任として教鞭を執る。後年、この音楽院でアウアーのクラスを引き継ぐのが彼の弟子でもあるエフレム・ジンバリストである。アウアーはドレスデン近郊のロシュヴィッツで死去し、ニューヨークで埋葬された。

レオポルト・アウアーはヴァイオリン史におけるもつとも偉大な教育者の一人に数えられている。二十世紀至高のヴァイオリニストの系譜を生み出し、ヴァイオリン演奏の近代的な発展に決定的な影響を与えた。門下生には、エフレム・ジンバリスト、ミツシャ・エルマン、イゾルデ・メンゲス、ヤツシャ・ハイフェッツ、トーシャ・ザイデル、ミロン・ポリヤーク、ミシェル・ピアストロ、エディー・ブラウン、カスリーン・パロウ、セシリア・ハンセン、ベンノ・ラビノフ、ナタン・ミルシテイン、オスカー・シュムスキーなどがある。

録音は、七十五歳のときのブラームスとチャイコフスキーの二点だけである。当時、この二つのレコードはわずか五部だけ作成され、アウアーのお気に入りへの弟子に与えられた。

著書は多く、『My Long Life in Music』（一九三三年）、『Violin Playing as I teach It』（一九二一年、および、一九六一年改訂）、『Violin Masterworks and their Interpretation』（一九二五年）などがある。

アレンスキーとグラスノフの《ヴァイオリン協奏曲》、タネーエフの《ヴァイオリンと管弦楽のため

の協奏的組曲》、チャイコフスキーの《憂鬱なセレナード》がアウアーに献呈されている。

ストラディヴァリでの演奏が多く、「ヒル」（一九六一）、「アウアー」（二六九二）、「パン」（二六九四）、「ロシア」（二七〇〇）、のちにオスカー・シュムスキーの手に渡った「ロード」（二七二五）、「マクミレン」（二七二二）があり、また、ニコロ・アマティのヴァイオリンも弾いている。

ハンガリー出身の作曲家ジェルジュ・リゲティ（一九三二—二〇〇六）はアウアーの甥の息子にあたる。

ルネ・ベネデティ

Benedetti, René (一九〇一—一九七五)

トゥーロン生まれのフランス人ヴァイオリニスト、教育者。一家で暮らすパリの音楽院でエドゥアール・ナドーに師事、さらにスコラ・カントルムでフィルマン・トゥシュに師事する。ガブリエル・ピエルネに指導を受けながら神童らしく十一歳にしてデビュー。一九一八年、音楽院で一等賞を手にし、四年後にはエドゥアール・ナドー賞を受ける。その後、彼はフランスでJ・S・バッハの《無伴奏ヴァイオリンのためのソナタとパルティータ》とパガニーニの《二十四のカプリース》全曲を演奏した最初の人物となる。第一級の演奏の実力を持ちながらも、指導者としての道を選ぶが、一九四一年にはジョゼフ・パンヴニュティのピアノ、アンドレ・ナヴァラのチェロと共にトリオを結成。パリ音楽院のフィルマン・トゥシュの後任となり、クリスティアン・フェラス、ジャン・ジャック・カントロフ、エマニュエル・クリヴィヌと数多くのソリストを育てる。リュシアン・カペーやジュール・

クライスラー、ジヨルジュ・エネスコがいる。一八九一年、父親のあとを継いでヘルメスベルガー弦楽四重奏団のリーダーとなり、同時にウィーン・フィルハーモニー管弦楽団の、次いでシュトゥットガルト国立歌劇場のコンサートマスターとなる。作曲家としてオペレッタ十作とバレエ多数を残した。

ヴィリー・ヘス

Hess, Willy (一八五九—一九三九)

ドイツ人ヴァイオリニスト、教育者。最初にルイ・シュポーアの弟子だった父親からヴァイオリンを習う。ベルリンでヨーゼフ・ヨアヒムに師事したのち、フランクフルト、ロツテルダム、マンチエスター、ボストンのオーケストラでコンサートマスターとなる。ケルン音楽院、次いでロンドン王立音楽アカデミーの教授に就任し、ボストン交響楽団のコンサートマスターとなり、さらにベルリン音楽大学の教授となる。著名な門下生にアドルフ・ブッシュとゲオルク・クレーンカンフがいる。

イエネー・フバイ

Hubay, Jenő (一八五八—一九三七)

ブダペスト生まれのハンガリー人ヴァイオリニスト、偉大な教育者、作曲家。父カール・フバイ（フーバー）にヴァイオリンを教わり、ハンガリー国立歌劇場の楽長となる。十一歳でデビュー。十三

歳のときに父親の推薦でベルリンへ行き、音楽大学でヨーゼフ・ヨアヒムに師事する。親しい友人となったアンリ・ヴュータンを助け、未完であった作品を数多く発表する。一八八二年、フバイはブリュッセル音楽院の教授となり、一八八六年にブダペストへ戻ると、父親のあとを継いで音楽院の院長となる。著名な門下生に、ヨーゼフ・シゲティ、イェリー・ダラーニ、フランツ・フォン・ヴェチェイ、ゲオルク・クレーンカンフ、ティボール・ヴァルガ、シャーンドル・ヴェーグ、ゾルターン・セーケイ、アンドレ・ジェルトレル、シュテフィ・ゲイエル、ヨハンナ・マルツイがいる。一九一九年、ブダペストの王立音楽アカデミー（現リスト音楽院）の院長となり、ベラ・バルトークと対立し、保守主義と非難される。ウィーンで死去。ブラームスの《ヴァイオリンソナタ第三番》（作品一〇八）は一八八八年のブダペスト時代のフバイの尽力による。

膨大な量のヴァイオリン作品と、四つの交響曲、ストラディヴァリの生涯をモチーフにした《クレモナの楽器職人》を含む十編のオペラを残している。

使用楽器は、ピエトロ・グアルネリ・ダ・ヴェネツィア「ex・ヴィエニャフスキ」（一七二三）、ロバート・ゲルレの手に移ったストラディヴァリ「ダルシュ」（一七二六）。

ヨーゼフ・ヨアヒム

Joachim, Joseph (一八三一—一九〇七)

純粋な名人芸の作品を非難することで新時代を開拓したヨーゼフ・ヨアヒムは、過去の偉大な作曲

家たちの大義に仕えた最初の人物であり、同時代の卓越した作曲家たちと手を組むことで、理想的な演奏者となった。ドイツ古典の伝統を象徴する人物であり、その伝統に彼はハンガリーとボヘミアの民間伝承に由来する独自の根源をもたらし、演奏法に与えた影響は、ヴァイオリン史でも最大級のものであった。オーストリア・ハンガリーのヴァイオリニスト、教育者、オーケストラの指揮者、作曲家であるヨーゼフ・ヨアヒムは、一八三一年六月二十八日、プレスブルク（ブラチスラヴァ）近郊のキッツェのユダヤ人家庭に生まれた。十歳でウィーン音楽院に入り、ヨーゼフ・ベーム、ミスカ・ハウザー、ゲオルク・ヘルメスベルガー一世に師事。一八四三年、ライプツィヒへ作曲を学びに行くと、フェリックス・メンデルスゾーンに出会って多大な影響を受けることになる。ヨアヒムはライプツィヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団のコンサートマスターとなる。メンデルスゾーンの死後、ヴァイマルへ行き、フランツ・リストの要望でヴァイマル宮廷オーケストラのコンサートマスターとなる。さらにヨアヒムはハノーファー王国の芸術監督に任命される。ハノーファーでレオポルト・アウアーを弟子にする。ロベルト・シューマンとクララ・シューマンと親しかったヨアヒムは、ヨハネス・ブラームスと知りあって親交を深めた。ヨアヒムはブラームスに助力し、《ヴァイオリン協奏曲》、さらに《ヴァイオリンとチェロのための二重協奏曲》を完成させる。一八六〇年以降、ヨアヒムの名声とヨーロッパ音楽に与える彼の影響力は計り知れないほど大きなものとなっていく。ブラームス、ブルッフ、ドヴォルザーク、シューマンの多数の作品がヨアヒムに献呈され、あるいは、初演を託される。一八六五年、ヨアヒムは同僚であるヤーコブ・グリューンが反ユダヤ主義の対象となったことに抗議するかたちでハノーファーを去る。一八六八年、ヨアヒムはベルリンに居を定め、音楽大学の学長とヴァイオリンの教授となり、

死去するまでこの職を続けた。無数にいる門下生のなかに、イエネー・フバイ、プロニスワフ・フリーマン、ヴィリー・ヘスがあり、彼らがヨアヒムの教えを後の世代のヴァイオリニストたちに伝えることになる。一八六九年、ヨアヒムは自分の名を冠した弦楽四重奏団を結成し、当代最高の四重奏団との評価を得る。一九〇七年四月六日、ヨアヒムは最後のコンサートをベルリンでおこない、同年八月十五日、ベルリンで死去する。

作曲家としては三つの《ヴァイオリン協奏曲》、多くのヴァイオリン曲、ベートーベンとブラームスの《ヴァイオリン協奏曲》のカデンツァを複数、ヴァイオリンのために編曲したブラームスの《ハンガリー舞曲集》を残している。晩年である一九〇三年、ヨアヒムはJ・S・バッハの《無伴奏ヴァイオリンのためのソナタとパルティータ》から二つの楽章、ブラームスの《ハンガリー舞曲集》の冒頭の二曲、自作の《ロマンス ハ長調》を録音した。

ヨアヒムがその生涯で使用あるいは所持したストラディヴァリは「コルシャルク」(一六九八)、「ジュピター」(一七〇〇)、「モルガン」(一七〇八)、「クノープ」(一七二四)、「ド・バロー」(一七二五)、「クレモナ」(一七一五)、のちにフランツ・クナイゼルからヤツシヤ・ハイフェッツに渡った「ホーフシュタイン」(一七一五)、「リピンスキ」(一七一五)、ミツシャ・エルマンに渡った「エルマン」(一七二二)、「ロリー」(一七二二)、「アルボス」(一七二三)、「シャコンヌ」(一七二五)、「ベニー」(一七二九)、「トム・テイラー」(一七三二)と多数に及ぶ。一七三七年製のグアルネリ・デル・ジェスを使用してブラームスの《ヴァイオリン協奏曲》を初演している。

カミーユ・ユルソ、フリッツ・クライスラーなど数多くのヴィルトウオーソを育てる。マサールの弾いた一七二〇年のストラディヴァリ「クロイツェル」は、のちにロドルフ・クルゼールの手に渡った。ヴェーターンとヴィエニャフスキの数多くの作品がマサールに献上されている。

ニコロ・パガニーニ

Paganini, Niccolò (一七八二—一八四〇)

パガニーニがヴァイオリンの未来に与えた影響はあまりにも多大で、当然のようにヴァイオリン史は大きな二つの時代に区分されるようになった。パガニーニ以前とパガニーニ以後である。彼は超絶技巧の限界を押し広げ、いまやヴァイオリン曲の作曲家には不可欠となった音楽言語を生み出した。この創造的で英雄的にして燦然ときらめく超絶妙技は、同時代の人々に、また後世に決定的な影響ももたらすことになる。

ヴァイオリンの化身たるパガニーニの名は、二百年の昔からすでに超絶技巧を意味する言葉になっていた。パガニーニが同時代の他のすべてのヴァイオリニストたちの輝きを奪ったというのであれば、同時に彼はおびただしいほどの競争心を煽りたてたともいえよう。その遺産として、彼の死後にエルンストやヴェーターン、ヴィエニャフスキ、サラサーテの内に特別な何かが見られることになったといえよう。パガニーニはまた、シヨパンやリストのような作曲家にピアノの超絶技巧の道を拓いた。音楽史において珍しいことに、非主流派と見なされる作曲家が、シューマンやブラームス、ラフマニ

ノフ、身近なところではミヨーやシマノフスキ、シュニトケ、ルトスワフスキといったメジャーな作曲家に多大な影響を与えることになるのである。

ヴァイオリンの栄光とはパガニーニあつてのことだ。彼がいなければ、ヴァイオリンのレパートリーはこれほど豊かになつてはいなかつたはずだ。パガニーニはタルティーニ、ロカテッリ、ルクレールによつて磨きあげられた技巧を寄せ集め、驚異的な集大成を完成させると、ヴァイオリンの技巧そのものを一気に飛躍させた。それまでに知られていた限界をはるか遠くへと後退させ、それ以上発展の余地がないほどに技術を磨きあげた。パガニーニ以外のヴァイオリニストが彼の技巧的な貢献を自分のものにする事ができるようになるには、一世代以上の時間が過ぎるのを待たねばならない。卓越したヴァイオリニストたちですら、十九世紀後半になるまでは彼の超絶技巧に到達することができず、二十世紀になつても、パガニーニは現在から過去の誰よりも神話につつまれた人物であり続けている。

パガニーニは一七八二年十月二十七日、ジェノヴァに生まれる。父親から初めてヴァイオリンを習い、めざましい進歩を見せる。初めて人前で演奏したのは一七九四年五月二十六日であると記録が残っている。アレッサンドロ・ロッラなどさまざまな教師に学んだのち、独自に並はずれた技巧を研鑽する。これには彼の解剖学的な特質に助けられた面もあるようだ。一八〇〇年からコンサートをおこない、大成を取めていく。一八〇五年、ナポレオン一世の妹エリーザ・パチオツキの宮廷楽団のコンサートマスターに就任し、さらに弦楽四重奏団の第一ヴァイオリンとなる。一八〇九年、自分の職務に飽きたパガニーニは巡回コンサート奏者としての道を選ぶ。評判は高まる一方で、一八一三年のミラノでの一連のコンサートは音楽的な一大事件となる。とてつもなく演奏が難しく、パガニーニ

本人にしか演奏できない曲の幾つかに、観客は心を奪われる。一八一五年九月、ジュネーブで自作の《ヴァイオリン協奏曲第一番二長調》を初演する。技巧を追求した成果である《二十四のカプリース》を作曲したのもこの頃である。

シャルル・フィリップ・ラフォンと対立を深め、さらにカロール・リピンスキーとも対立する。だが、パガニーニの悪魔的な超絶技巧の前にはどの相手も引き下がるしかない。以後、この奇才を耳にし、目にしようと人々が押しかけるようになる。その魅力に釘づけになり、めまいがするほどの超絶技巧に衝撃を受けた聴衆からは、悪魔の化身とまで思われてしまう。彼の人生そのものも大きく揺れ動く。パガニーニはすべてにおいて極端な人物となり、生きていくあいだに莫大な資産も貯まる。女にはもてはやされ、快楽の深みにはとめどもなくはまっていく。特にギャンブルに目がなく、そのために大金を失い、言い伝えでは自分のヴァイオリンを質に入れることすらあったという。パガニーニは貴重なヴァイオリンを蒐集し、時期をみはからつては売買していた。弦楽器の歴史の中でも最高級のヴァイオリンの幾つかは彼の手を経ている。死去した時点で二十二挺の逸品を所持していたが、そこにはストラディヴァリ十一挺(四重奏の完全なセット一組を含む)、グアルネリ・デル・ジェス二挺(一つは有名な「カノン」)、ニコロ・アマティ二挺が含まれていた。

一八二四年、パガニーニは若き歌姫アントニア・ピアンキと出会う。一八二五年、二人のあいだに息子アキツレ・アレッサンドロが生まれ、二年後にパガニーニに認知される。一八二七年、パガニーニはローマ教皇レオ十二世から聖シルベストロ教皇騎士団勲章を叙される。翌年、パガニーニは初めてイタリアを離れて国外ツアーに出る。ウィーンでは《ヴァイオリン協奏曲第二番 カンパネラ》を十四

回のコンサートで演奏し、大成功を収め、オーストリア皇帝から叙勲を受ける。さらに翌年にはベルリン、ポーランド、ドイツ全土で演奏する。一八三一年三月九日にはパリでデビューして聴衆を魅了する。三か月後にはロンドンで演奏。批評家は「奇跡のパガニーニ」「崇高なるパガニーニ」と大絶賛し、「ロードの威厳、バイヨの力づよさ、シュポアの情感」が彼にあると評した。やがてパガニーニはパリへ戻って遊興とギャンブルにふける。だが、一八三四年を過ぎると、健康状態が悪化。結核と梅毒の症状に苦しまされる。不定期にコンサートを続け、パルマとパリの住居を行き来する。音楽とギャンブルを融合した「カジノ・パガニーニ」の計画も企画される。だが、パガニーニの健康状態の悪化から、この計画は潰れてしまう。一八三八年十月には、喉頭に深刻な疾患が現われて声を出すことができなくなる。一八三九年秋、パガニーニはニースに居を移し、一八四〇年五月二十七日その地で没する。無数のヴァイオリン曲(六つの《協奏曲》、《二十四のカプリース》さまざまな変奏曲、ソナタ、種々の小品を含む)の他に、パガニーニは弦楽四重奏を四曲、ギターとの協奏曲を十五曲、無数のギター曲も作曲している。

ルイス・パーシנגァー

Persinger, Louis (一八八七—一九六六)

ロチェスター(イリノイ州)生まれのアメリカ人ヴァイオリニスト、教育者。十二歳のときに単身ライプツィヒへ行きハンス・ベッカーに師事。十六歳で音楽院を首席で卒業。三年後、ブリュッセル

音楽院でレオポルト・アウアーの弟子セルゲイ・コルゲフにヴァイオリンを、ヴィートルリス、ソコロフ、スタインバークに作曲を学ぶ。十三歳でサンクトペテルブルグの銀メダルを獲得する。その後、エカテリノスラーフへ戻り、幾つもの室内アンサンブルで演奏し、音楽学校で教鞭を執る(一九一三—一九二〇)。一九二〇年にモスクワへ移ると、生涯モスクワに住み続ける。ポリシヨイ劇場管弦楽団の第二ヴァイオリン首席となったのち、一九二二年から一九三二年まで指揮者不在の管弦楽団ベルシムフアンスのコンサートマスターを務める。一九二六年、モスクワ音楽院の教授に就任、十年後にヴァイオリン科の科長となる。最高級の教育者と見なされ、ソヴィエト連邦のヴァイオリンの流れに決定的な影響力を与えることになる。門下から輩出したソヴィエト有数のヴァイオリニストに、レオニード・コーガン、その妻となるエリザベータ・ギレルス、ユリアン・シトコヴェツキー、イーゴリ・ベズロドニー、偉大な教育者としてヤンボルスキーの後継者となるユーリ・ヤンケレヴィッチがいる。アブラム・ヤンボルスキーはヴァイオリンの主要レパートリーのさまざまな《ヴァイオリン協奏曲》に幾つものカデンツァを書いている。甥のイツライル・マルコヴィッチ・ヤンボルスキーもまたヴァイオリニスト、教育者であり、教本やヴァイオリンとヴァイオリニストについての評伝を何冊も書いている。なお、ダヴィッド・オイストラフと共演することの多いピアニストにウラジミール・ヤンボルスキーがいるが、彼との血縁関係は皆無である。

ユーリ・ヤンケレヴィッチ

Yankelevitch, Youri (一九〇九—一九七三)

バーゼル生まれのロシア人ヴァイオリニスト、著名な教育者。シベリア、レニングラードでヴァイオリンを学び始め、やがてモスクワ音楽院でアブラム・ヤンボルスキーに師事する。その後、すぐに教育者としての活動に専念する。中央音楽学校とモスクワ音楽院で助手となり、ヤンボルスキーの死から数年が過ぎた一九六一年、教授に就任する。一九六九年、音楽院のヴァイオリン科の科長となり、死去するまで留任する。前世代のソ連のヴィルトゥオーソの大半を育てあげたユーリ・ヤンケレヴィッチは、二十世紀最高の教育者の一人に数えられ、門下からウラディミール・スピヴァコフ、ヴィクトル・トレチャコフ、アルベルト・マルコフ、パヴェル・コーガンを輩出している。

彼のヴァイオリンとしては、現在、ウラディミール・スピヴァコフが所有するフランチェスコ・ゴベッティ(一七二六)と、G・B・グアダニーニ(一七五二)があった。

ウジェーヌ・イザイ

Ysaye, Eugène (一八五八—一九三二)

ベルギー人のヴァイオリニスト、指揮者、教育者、作曲家。ウジェーヌ・イザイはヴァイオリン史の主要人物であり、ヨーゼフ・ヨアヒムがドイツ派であったとすれば、イザイはフランス・ベルギー派

であった。パガニーニ以後ハイフェッツ以前のヴァイオリニストとしては最高のヴィルトウオーソとされるイザイは、十九世紀と二十世紀のヴァイオリニストの架け橋とも言える存在だ。一八六五年、リエージュ音楽院に入学する。才能は認められたものの、熱意に欠け、一八六九年に退学処分となる。そこへ、アンリ・ヴェータンと偶然出くわしたことで、彼の人生は一変する。ヴェータンのおかげで音楽院に復学し、ロドルフ・マサールのクラスで学ぶ。次いで、ヘンリク・ヴィエニャフスキに師事、ふたたびパリ音楽院でアンリ・ヴェータンに師事し、ヴェータンから後継者と認められるようになる。

イザイは偉大なピアノリスト、アントン・ルビンシテインと共にソリストとしてドイツ、スカンジナビア、ロシアでツアーをおこない、一九八三年にはパリに居を移し、何人もの作曲家を友とし、数多くの作品を献呈されるようになる。作曲家たちの目には、獨創性と直観、自由、情熱、愛情、勇敢さに結びついた演奏をするイザイは、まさに理想の演奏者であり、再生の象徴であった。一八八九年、かのイザイ弦楽四重奏団を結成し、ドビュッシーの弦楽四重奏曲を献呈される。イザイは当時の音楽の発展の要となるほどの役割を果たすことになる。同世代のヴァイオリニストたちのすべてにとって、イザイは模範であり、基準となっていた。

一八九四年、初のアメリカ・ツアーをおこない、次いで、ブリュッセルで指揮者としてデビューする。同じ頃、フランス人ピアノリストのラウール・プーニョとデュオを組み、このデュオは当代最高の知名度を誇ることになる。さらにルイス・パーシンガーや、のちにブリュッセル音楽院でイザイの後継者となるアルフレド・デュボアといった何人かの弟子を育てている。一九一二年、イザイはレコードに数点の作品を収録し、いささか遅すぎるくらいはあるが、彼の技量の貴重な証拠となっている。

次第に衰えが目立つようになると、ソリストとしての活動を控え、指揮者としての活動を主体とするようになり、一九一八年、シンシナティ交響楽団の指揮者となる。ベルギーに戻ると、イザイはその晩年を教育(弟子には若きジョゼフ・ギンゴールドがいる)と、とりわけ作曲に捧げる。一九二四年にはいまま傑作とされる《六つの無伴奏ヴァイオリンのためのソナタ》を書きあげる。一九三七年、イザイの弟子でもあったエリザベート王妃(国王の生母)によって、ブリュッセル・ウジェーヌ・イザイ・コンクール(エリザベート王妃国際コンクールの前身)が創設され、ダヴィッド・オイストラフが第一回の優勝者となる。

ウジェーヌ・イザイに献呈された作品は無数にあり、ショーンソンの《協奏曲ニ長調》、《詩曲》、クライスラーの《レチタティーヴォとスケルツォ・カプリース》、フランク、ルクー、マニヤール、ラザリ、ロバルツ、ヴィエルのソナタ、それに弦楽四重奏曲(ドビュッシー、サン＝サーンス、ダンディ)、ガブリエル・フォーレの《ピアノ五重奏曲》などが知られている。

イザイの所有した数多くのヴァイオリンのなかでも特に名高いのが、一八九四年に彼が入手した一七四〇年のグアルネリ・デル・ジェスで、内部のオリジナルラベルの横に、イザイの直筆で「このヴァイオリンは私の音楽人生の中で何よりも忠実な伴侶であった」と記されている。このヴァイオリンは一九六〇年代にアイザック・スターンの手に渡った。現在はピнкаス・ズーカーマンが弾いている。

イザイはまた、一九〇八年にサンクト・ペテルブルクで盗難に遭った一七三二年のストラディヴァリ「ヘラクレス」、ジュゼッペ・グアルネリ(一七二〇)、リュボ、マッギーニ、G・B・グアダニーニ(二七五三)、ジャック・ティボーを経てジャン＝ピエール・ヴァレーズに渡った「ピク」も弾いている。

著者

ジャン＝ミシェル・モルク

幼い頃からヴァイオリンに慣れ親しむ。外科医のかたわら、弦楽器の造詣を深め、音楽批評家として25年間、音楽誌『ディアバゾン』の執筆陣に加わり、同様にイギリスの『ザ・ストラド』誌にも寄稿。マルチメディア辞典『ヴァイオリン、人、作品(仮題)』の共著者。フランス・ミュジク(ラジオ局)で多くの番組を制作し、長年にわたって人気番組『レコード批評のための討論会(Tribune Des critiques de disques)』ともコラボレートを重ねている。

訳者

藤本優子

東京生まれ。桐朋女子高等学校音楽科卒業、パリ国立高等音楽院ピアノ科卒。翻訳家・通訳・ライターとして活動。主訳書に『パリのレストラン』『テロル』『昼が夜に負うもの』(早川書房刊)『マルタ・アルゲリッチ 子供と魔法』(音楽之友社刊)など。

偉大なるヴァイオリニストたち

ークライスラーからクレメールへの系譜ー 全50人の演奏CD-ROM付き

2012年7月10日 初版発行

著者——ジャン＝ミシェル・モルク (Jean-Michel Molkhou)

訳者——藤本優子

発行者——谷口恵治

発行所——株式会社ヤマハミュージックメディア

〒171-0033 東京都豊島区高田3-19-10

電話 03-6894-0250

インターネット・ホームページ <http://www.ymm.co.jp>

デザイン——遠藤賢一

DTP製作——株式会社アルスノヴァ

編集——白木沙恵

印刷・製本——シナノ印刷株式会社

本書収録の写真、音源について一部権利者が明らかでなく、連絡の取れないものがあります。

お心あたりのある方は、下記までお知らせください。

原書発行元：LIBELLA

日本語版発行元：株式会社ヤマハミュージックメディア

出版部「偉大なるヴァイオリニストたち」係 電話 03-6894-0250

出版物、録音物を権利者に無断で複製(コピー)することは著作権の侵害にあたり、著作権法により罰せられます。

また本書の内容を無断転用等することは一切これを禁じます。

本書の定価はカバーに表示してあります。

造本には十分注意しておりますが、万一落丁、乱丁等の不良品がございましたらお取り替えいたします。

ISBN978-4-636-88079-3 C0073

©Japanese edition by YAMAHA MUSIC MEDIA CORPORATION

©2011 by Libella, Paris Japanese translation rights arranged with LIBELLA through Japan UNI Agency, Inc., Tokyo

Printed in Japan